

[研究報告]

銀座座会
～銀座が残すべきもの～

財団法人ハイレイフ研究所

平成9年度

銀座座会 メンバーリスト

座長	長谷川 文雄	東北芸術工科大学 副学長
	荒井 良雄	東京大学 教養学部人文地理学研究室教授
	石丸 雄司	銀座通連合會事務局長
	三枝 進	(株)ギンザのサエグサ取締役社長
	島田 一郎	(株)フォルマ代表取締役
	長澤 忠徳	東北芸術工科大学 デザイン工学部情報デザイン学科教授
	野口 孝一	中央区築地社会教育会館郷土資料館
	船曳 鴻紅	(株)東京デザインセンター代表取締役
	前田 博	(財)環境文化研究所主任研究員
	保田 武宏	元読売新聞社編集委員

(五十音順・敬称略)

銀座が残すべきもの

第1回	1
「私から見た銀座」 コリーヌ・ブレ	
第2回	23
「銀座の記憶」 上山 良子	
第3回	43
「銀座が残すべきもの」 吉見 俊哉	
第4回	63
「私が残したい銀座のあれこれ」 村國 豊	
第5回	87
「まちづくりとしての銀座」 田村 明	
第6回	109
「銀座を売る ～不動産開発の視点からみた銀座～」 船曳 鴻紅	
銀座研究を終えて	129
銀座座会 座長 長谷川 文雄	

「私から見た銀座」



コリーヌ・ブレ

ジャーナリスト

モロッコ生まれ。フランス国籍。パリ大学法学部卒業。1975年初来日。78年、パリに戻り、81年パリ東洋大学日本語学科卒業。82年から91年まで、仏「リベラシオン」紙の特約記者のほか、日本の雑誌で多彩な執筆活動を展開。テレビ番組やラジオ番組出演多数。89年7月から90年2月まで、日本の月刊誌「STUDIO VOICE」のフリー・チーフ・エディターを務める。現在、東京在住。主な著書に『水中出産』『創造の国・ジャポン』『赤ちゃん・ザ・革命人』『おへそを眺めながら』『自由への入門』『山猫の愛のように』がある。

* * * * *

日本の個性とパリの個性

ブレノ 今日、銀座という場所をどういうアングルで見て話をすればいいのかなと考えましたが、私がこの4、5年ぐらい前から気にしている一つの言葉がありまして、そのアングルから少しお話してみようと思っています。それは一見、銀座とは関係ないように見えていても、すごく関係があることだと思います。そのキーワードは「個性」。先日いただいたレポートの中で端山公明さんが「パリは個の権利を生かす街」と、おっしゃってまして、それがすごく面白かったのですが、日本では最近「個性的な人間が現れてこないと企業は困る」といっていますが、私は「本当かな」と思っています。それはいわゆる、企業内で個性的な人間がほしいということなんだと思うんです。

もともと「個」というのは、人間のコミュニケ

ーションとも関係していて、すごく大きなテーマだと思うんです。私が「パリは個の権利を生かす街」と聞いた時に、まず思い浮かんだことは、小さい時に個性的な人間になるためにどれほど苦しんだか、どれほど大変だったか、ということです。私が東洋に来たのは、ある意味で、たぶんその「個性的な人間になりなさい」というような圧迫感から逃れようとしていたんだと思います。東洋に来る人の中には、他にもそういう人がいるんじゃないかな。日本はアジアなんですけど、私はここ10年間ぐらい特に日本の文化には、もしかしてヨーロッパに無いような「個性」あるいは「個」というのがあるんじゃないかなと思ってきました。

私は3年ぐらい前に、子育てに関する本を書いたんですけども、子育てという字に私は個人の「個」をあてて「個育て」と書いていて、教

育は「共に育つ」と書いているんです。私は一人で子供を育てていますけれども、小さい子供を育てながら人間の「個」はどうやって育っていくのか、ずっと自分の6歳の娘を観察しながら書いています。「パリは個の権利を生かす街」という言葉にある「個」というのは、私から見るとそれはとても作られた「個」なんです。非常に意識的に作られているもので、しかし私はもっと別の「個」というのがあるんじゃないのかなと思っています。これについては、後で少しずつお話しします。

個性と消費

私は、消費文化は「個」や「個性」、「人間には個性がある」といったことに基づいて成り立っているのではないかと考えています。

具体的な例を言うと、例えばファッション。洋服を買う時に売り手は、「あなたの個性に合うような服」、あるいは家具を買いに行くときに「あなたの個性に合うような家具」という具体的な言葉は決して言わないんですけど、でもおそらく、そういう前提で買わされていると思うんです。あるお店に行って「あ、私はこれが好き」と思う時、なぜそれが好きなのかと探っていけば、もちろん非常に単純な理由で「好き」だということだけかもしれませんが、もしかしたら小さい時に突然目の前に赤い物を見たからかもしれない、それで深い記憶の中に「赤」という色ができていて「じゃあ今度、赤を買ってみよう」と思ったのかもしれない、そして自分の個性になっているのかもしれない。そういった表面的な個性というのは、とてもイメージに出来上がっているものじゃないかと思っています。ですから、例えば私がある家具屋さんに行って、私の個性に合うような、つま

り「私好みの物」を買ったとしたら、これはもしかして「偽物の個性」かもしれません。つまりそれが、本来の「私」や、私の中にあるオリジナルの部分から来る個性であるのかどうか、ということをしごく疑問に感じているんです。つまり「あなたの個性に合う」とか、「あなたにだけ似合う」というような前提や、そういった価値観、悪く言えば先入観が無かったら消費文化は成り立たないんじゃないかなと思っています。

大正時代の家

少し話が変わりますが、最近、私はある日本の家を見たんです。それは大正時代の最後の年にできた家で、1階は洋風で2階は和風で、大正時代のままのシャンデリアとかがあって、非常にうまくミックスされている。この家を見た時に、私はしごく大きなショックを受けたんですが、同時に「あ、これが日本の文化だ」と思ったんです。私がこれまで日本の文化に昔からずっと感じていたようなことを目のあたりにしたというか、それが実物として現れたというか。

そこで何に一番感心したかということ、昔の家には「床の間」とか、建築の中にすでに飾りがついているということです。つまり、わざわざお店に行って家具を買う必要が全然ない。押入はちゃんとあるし、床の間という飾りがあって、家というか建物が既に主体性を持っているんです。今まで私が住んできた家の中では、主体性を持つのは私という人間だけ。家はあくまでもオブジェクトであって、他にいろんな物を買ってきて、やはりそれらは物体 = objet でしかない。ところがあの家を見た時、ここに外からそういう objet を入れたら、とてもおかしいと思っ

たんです。その家には主体性があるんです。そして、そこに住む人の主体性があるって、その二つの主体性と主体性、サブジェクトとサブジェクトが対話できるような感じなんです。これを見て、昔の建築家というか、昔の職人さんは、人間の心理をよく知っていたんだな、と思いましたね。

私は、今まで家といったら壁に囲まれた箱形の家が当たり前だと思っていたんですけども、この大正時代の家を見た時に、まず感じたことは、壁が生きているということでした。生きていくというのは、何十年の間にそこにいた人たちの笑い声とか、泣き声が染み込んでいるみたいだということです。普通、こういう壁というのはただの壁であって、つまり私たちを入れるための「箱」でしかない。生きてはいないんです。ところが、あの家の壁を見た時は、なんか生きていました。きっと、木造だからその中に何か人間の息とかが、全部染み込んでいたのかもしれない。もしかすると科学的にも説明できるかもしれない。フランスでは石造りの家が多いせいか、もちろん今までにフランスのブルジョアの家で、そういう非常に文化的な何かを感じさせているような家に行ったこともあるんですけども、この大正時代の家を感じたようなことは、ヨーロッパの家とまた少し違います。

それで、端山さんの「パリは個の権利を生かす街」という言葉を考えた時、ここでの「個」は作られた概念であって、自然なものではなく作られたものだから、権利も考えることができるし、ビジョンを持ってすべてを考えの上で作ることができるんだと思ったんです。ところが日本の文化はまるで正反対というか、もっと別なベースで物事が発生していたのではないかと思

えて。いわゆるヨーロッパ的な作られた「個」に対して、「自然」という言葉ではなく、「素直な個」というか「裸の個」というか。先ほどの大正時代の家の中にいると、そのことをすごく感じるんです。私の「個」が「裸の個」になるというか、いわゆる消費文化のためにつくられた「個」ではなくて、何かひとつ、本当に人間的な「個」が私の中にあったということを感じさせてくれるような環境なんです。

本能と個性

私は、小さな子供たちが持っている個性には、すごく共通性があると思います。例えば、小さな子供にはまだ個性ができていないと言われますけれども、たしかにまだ未熟ですが、面白いことに、だいたい生まれた時から2歳ぐらいまで、世界の子供たちはみんな同じような行動をするんですよ。例えば、2歳の頃には、ある入れ物から他の入れ物に物をこうやって入れ替わたりするんです。誰も教えたことがなくても、2歳ぐらいになるとみんな同じようなことをするんです。これは、私の言葉で言うと「生命のインテリジェンスにプログラムされている」ことだと思えます。このことを少し調べて人に聞いてみたら、そういうことをすると、普段使わないような筋肉を使えるんだそうで、そこから注意力が育つらしいです。また同じように、小さい子は2歳ぐらいになると、こうやって物を重ねたりもするんです。これも、全世界の子供が同じようなことをやるんです。物を重ねるというのは、塔を作るということに近くて、ある秩序というか、ひとつの柱みたいなものを作ることになるんですね。

それで、子供がなぜそういったようなことをするのかというと、特に2歳ぐらいの子供は、ま

だ自分の中が白紙状態なので、本能というか、さきほど話した「生命のインテリジェンスにプログラムされている」何かに命令されてそういうものを作っているのではないか、と思うんです。そして、それをひとつの映像にして自分の中にインプットしていくんだと。例えば、塔を作る時には、その塔のイメージを自分の中にインプットして、自分の中にひとつの塔ができる。その塔というか柱というのか、いわゆる、これがモラルを立てるための心理的な手本になるんだと思うんです。こういうようなことを子供たちはみんなやっています。いわゆる個性というのは、そういったごく自然な「生命のインテリジェンス」によって、少しずつ確立するんだと思うんです。

さきほど、ヨーロッパの「個」というのが非常に作られたものだと言ったんですけども、例えば子供の話をする、特にブルジョア階層の小さな子供は、非常に躰が厳しからです、例えばここに、もし2歳の子供がいたとしても決して暴れたりしません。2、3時間はじっとできるように訓練されているんです。それは、子供の自然な行為ではなく、大人が作った形にはめられて出来たものです。こうやって、作られた個性が小さい時から出来上がっていくんです。日本も、もともと昔は躰が厳しかったんだと思うんです。まあ、どこの文化でも、厳しかったと思いますが。その厳しさの背景には人間関係とか、近所との関係とか、いろんな理由があったと思うんです。しかし日本では、ヨーロッパみたいに、躰によって個性をいじった作り物にするのではなくて、もっと人間の個性をありのままにするような文化だったのではないかと思います。例えば、花が咲いたら、その花の行こうとしている方向に行かしてあげる、そういったようなことがあったんじゃないかなと、私は

日本に来て、そういうふうを感じるようになりました。

もっと違うところで言うと、例えばヨーロッパの文化には「エロティズム」がありますよね。この「エロティズム」というのは作られたものですが、日本語の「色気」というのは、西洋に無いような価値観だと思うんです。「エレガンス」というのもヨーロッパ的な感覚なんですけれども、それと似たようなもので、日本には「粋」というのがありますね。

それから作品ということについて、作品という言葉自体がヨーロッパ的ですが、日本でいえば、例えば床の間の中にある生け花だと思うんです。誰が作ったのかわからない床の間に、誰が作ったのかわからない生け花。そこに聖なる何かがある。それは例えば庭からきた左右の光がパツとそこにあたる。もしかするとそれは、聖なる神聖な光というような。なにか聖なることがそこにあるようでもあって。こういうものは、ヨーロッパには無いです。あくまでも人が主体ですね。

二面性を持つ銀座

銀座の話をする時に、よく銀座はシャンゼリゼに似ていると言われるんですが、確かにそういうふうには作られたのかもしれませんが、でも私は、銀座にはシャンゼリゼに無いような面白い様相があると思うんです。それが、これまでも話した、いわゆる日本の独特の何かが残っているということなんです。それはまた職人の世界でもあると思うんです。

以前、銀座のことを調べた時に、もともと銀座は非常に汚い下町っばい一つの道だった、とあ

ったんです。今はこんなに立派なところになっていますが、それでもやっぱり非常に下町のというか、とても日本的な職人の世界の商売がまだありますよね。例えば、手ぬぐいの専門店とか、包丁とか、和紙とかのいるんな店が。こういう職人というのが、まずヨーロッパの都会にはないんですね。コンパニオナーズというのがありますけれども、それは、どっちかという、町を転々としながら、自分の芸を、自分の職を育てていくというようなもので、アルチザンという職人的な何かがあるというのは、シャンゼリゼのブルジョア文化にしたか私には映らないんですね。そういうダブルアスペクト、いわゆる二面性のあるところが、新鮮なのかもしれません。

もともと銀座がパイオニアと言われていたのは、いわゆる西洋の文化の窓だったからだと思うんですけど、もう一つ、職人のいる下町に近いような銀座という面が私たち外国人にはあまり認識されてませんね。しかしそれは古いヨーロッパ文化の窓によったかもしれない。今は、例えば代官山といったもっと他の場所の方が、私は今のヨーロッパのエスプリを感じますね。

ヨーロッパ文化とサービス精神

いわゆるフランスのデラックスなブルジョア文化のようなことを話す時、よくブティックの精神とかサービスのことについて話すんですが、フランスでは、お客様のことは「王様」というんです。「お客様は、神様」とは決して言わないんです。しかし、最近はシャネルやディオールも本当にサービスが悪くなったらしくて、友達が「近所のスーパーと全然変わらない」と言っていました。そういった点で私が日本に来て一番に驚いたのは、どこへ行っても、小さなスー

パーへ行ってもサービスがすごくいいということですね。私は決してブルジョア出身じゃないんですけども、日本にいて、普通の生活をしながらスーパーで買い物をしているだけでもシャネルのブティックで買い物をしているような気分になれるんです。これはきっと私だけではなくて、フランス人のほとんどみんながそう思っていますよ。だからフランス人がいったん日本に住んだら、この贅沢な気持ちを覚えてしまって、なかなかフランスには戻れないんですよ。「サービス精神」という言葉は、おそらく日本特有のもので、フランス語には今ほとんど無いんだと思いますね（笑）。

しかし、この「サービス精神」というのと「余裕」とはまた別なものだと思うんです。「ゆとり」と「サービス精神」も違うと思います。サービス精神ばかりしていると、余裕が出て来なくなると、ゆとりも無くなる。なぜかという、これは私の勝手な考えなんですけれども、余裕が発生するためには「あげる」、つまり「してあげること」だけではなくて、同じぐらい「もらう」ということが必要だと思うんです。例えば、この報告書を読んで私も同感したところで、昔、銀座のお店の人が、お店には何もなくて、しかしお客さんが来たら、なんかちょっと話をしていたり、お客さんの好むようなものを出してあげていた、というところ。これはやっぱり、お店の人が「してあげる」という気持ちだけではなくて、相手のことを聞く耳や、聞く心という、聞く感性を持っていたんだと思うんです。私は、代官山のようなシックなところへ行くと、どこか居心地が悪いんですよ。なぜ居心地が悪いのかというと、サービス精神ばかりだから。一応、「お客さんは神様」なんですけれども、あまりにも「神様」すぎて、なんか居心地が悪い。向こうは商売としてやっているから、

サービス精神はひとつのポーズでしかないんですよね。そうじゃなくて、私という知らない人に会って、私という相手を歓迎する。そういう風に知らない人から何かをもらうということ、これがゆとりの世界だと思っんです。昔の日本の文化には、これが日常的にあったんだと思いますが。

だから 30 年前の日本を知っていた外国人が、あの当時の日本では「小さなもの」が良かったといますね。例えば、おばあさんが手で作った「ワラジ」とか。私が昔、日本に来た時に、京都とかでおみやげとして売られていたんです。大原あたりで、おばあさんがわらじを作っていて、おみやげ屋さんにあったんです。それはすごく良かったんです。贅沢なものではなくて、小さなもの。ところがその小さな小物の中に、すごく大きな贅沢があったと思っんです。そういったシンプルな物の中にあつた贅沢というのが、もう今では、ほとんど見あたらなくなつて。おみやげの世界ではみんなプラスチック製品ばかりですし。

個の主張

個性の話に戻りますが。個性といえは「主張」するということになつて、つまり自分が「個性的だ」というふうになつて見せなければいけなくなる。これはご存じだと思っんですけれども、もともとローマ時代に、握手をする意味というのは、相手の袖口の中にナイフが隠されていないか調べるためだつたそうです。つまり、ヨーロッパのコミュニケーションの基には、まず疑いの精神があるんです。日本は逆で、まず信頼しあう。私は日本に来た時に、そういった精神にまず驚いたんです。ヨーロッパ人の個性、あの強い個性の裏には、常に「自分は悪い人

ではないよ」と主張しないと、まず認めてもらえないというのがある。だから小さいときから、常に「私はこういう人なんだ」と見せなければいけないんです。ところが、日本に来た時、最初に「こんにちは」と挨拶したあと、私は癖として「私はこういう人間なんだ」と見せようすると、そんなのはいらぬみたいで。なんか、すごく単純に受け入れられるような感じで。

最初は、簡単に「受け入れられる」というのが、けっこう居心地がよくて、とても気持ちが良かったんですけれども、そのうちに、こっちから相手を受けることも、実はすごく居心地がいいということが、だんだんわかつてきて。それで、「受け入れること」と「あげる」ことのバランス、これがちゃんとしていないと、じつは本物の個性は出て来ないんじゃないのかなと思っようになって。そうなると、もうそんなに自分を主張しなくてもよくなつたんです。そして、たぶん今私は最悪の消費者になつて思っんです。つまり、物は買わない、いらぬ、なんにもいらなくなるんです。もう貰うことだけで気持ちがいいというか。今では、空気を吸って、ちょっとのことだけで喜ぶようになつたね。特に子供が産まれたあとは、一種のあきらめというか、余裕というのも加わつて（笑）。

それで、さきほど話していた「素直な裸の個性」というのも、昔の日本人がもつていた謙遜する心とか、非常にモデストであるということからは生まれてくるものじゃないかなと思っます。

「自由」にこだわるフランス

今ヨーロッパは、ひとつの行き止まりにきて思っんですけれど、その理由のひとつは自由だと思っんです。自由といえは、フランス人ほ

ど自由にこだわっている文化はいないんじゃないかな。何かあるんだと思うんですけど、でもやっぱりそれに限界がきてますね。自由というのはひとつの大きな限界をもつ概念なんです。それは壁がなかったら、不自由がなかったら、自由はないということ。

フランスがどのくらいこの「自由」にこだわっているかという。フランスでは今、日本をいろいろと紹介する1年ということで、いろんな催しをやっていますが、その後、日本で来年の5月から1年間、フランス・イン・ジャパンというフェスティバルのようなものをやるらしいんです。その時の文化的なイベントは、フランスからくるものとして、ドラクロアの「リベラティー」、自由の女神が大衆を案内するという有名な絵がありますよね。それともう一つ、パリのセーヌ河のある島にある「自由の女神」、これも来るらしいんです。このことを聞いた時、私は「いやー、ダサイ。本当にフランスはおくれているな」と、思いましたね(笑)。もう何だか、コロニアリズム、植民地的。「私たちは自由を知っている」、「自由の概念」「自由」を知っているから、これをシンボルとして持ってくるんですけども、「はい、さあどうぞ」みたいな感覚で、すごく腹が立ちますよ。このぐらいの莫大なお金を持っていたら、もっと他に使い道があると思いますが。フランスがそこまで自由にこだわっているといえることは、もう、おかしいとしか思えないですよ。フランスが自由の国であるということや、自由を大事にしたということ、「自由・博愛・愛」の国だということは、もう誰でも知っていることなのに、まだこだわっている。つまり「個人」という概念にこだわっていると思います。そしてそれを越えることができずにいて、限界にきていると私はみえています。

日本における「生」の意味

日本では、もともと「自由」という言葉には「わがまま」という意味が含まれていたんですけど、明治の時、中江兆民がルソーの『社会契約論』を翻訳した時に「自由」という言葉を使ってしまった。これ、ミス翻訳だと思うんです。やっぱり「自由」には、もっと「遊ぶ」という意味を使った方がよかったと思うんです。つまりフランス人にとっての自由の中には、楽しさが入っていますが、日本の自由のなかには楽しさなんか入っていない。居心地の悪さしか入っていないと思うんです。でもその自由とは何なのか、ってずっと考えて来て、その限界を感じたときに何が見えてきたかという、これは錯覚でもあるんですけども、その時「愛」が見えて来たんです。「愛」というのは他人の世界だと思うんです。その他人の「愛」の方が、底がないようなテーマであって、「自由」というと、少し単純に言えば実存のレベル、実存的な次元での話で「愛」というか「他人」という方が、まさに「生きてる」次元のものだと思うんです。

日本は「生」を実感するという意味で、その答えを持っていると思うんです。もう少し簡単にいえば、私はヨーロッパ人として自分のことを考えると、やっぱり背景にはキリスト教文化というのがあると思うんです。これはどうしても見逃せない問題というかテーマであって、そこには地獄と天国が存在するんですが、それは自分のいるところとは違うところに何か別な世界があるということなんです。だから、たぶん欧米人はみんないつも、「じゃあ、見てみよう、行こう、行こうじゃないか」と、こことは違う所に行こうとすると思うんです。これが自分の

中にある一つの動機というか、とにかく見に行きたいという感じで。悪く言えば、そこでコロナリズムが発生するんですけども。そしておそらくそのコロナリズムのもとで、よく言えばビジョンが育つことでもあると思うんです。

日本は、そういう精神界が自分の外にあるのではなく、自分の中にあると思うんです。だから率直に言えば、日本人はきっと動かないで、じっとしていても満足できるんじゃないかな、と想像するんです。私たちは、じっとしていても満足するというようなことはないと思います。常に外で何かを作っていないと気がすまないんです。ところが、日本では非常にストイシズムといますか、じっとして生きていく実感がある。西洋人は、動くことで生きる実感がある。そのことが、とても大きな差じゃないかなと思ったりします。もしそうだとすれば、結局、言葉や概念で自分の中でその「生」を実感する時に、それを表現する必要は無いんですね。だから、日本では、いろんな表現や概念が生まれにくいんじゃないかなと、思ったりします。

ジャーナリズムの世界では、もう十何年ぐらい前から言われていることなんですが、「日本はいいものを持っている、けれども、それを表現しなければいけない」と。ところが、日本人にとって表現するということは、つまり概念という「箱」を作ることは、もしかしてもものすごく難しいことじゃないかなと。

端山さんはヨーロッパを見て「ヨーロッパでは300年ぐらいの規模でプランをたてる」というふうに、おっしゃっていますけど、日本では今こういうことはとてもできないことなんですね。まあ徳川家康の時代だったら、それもできたかもしれませんが。私は、あの江戸時代の徳川家康のことは研究していないので、どうい

う心理状態、精神状態だったのかはわからないんですけど、でもきっと今の日本人とは違う精神状態だったのではないのでしょうか。もしかして西洋人に近い人だったかもしれません。もちろん権限も違っていたと思うし、徳川家康だとフランスの大統領と同じくらいに圧倒的な権限を持っていたと思うから。その圧倒的な権限を持っていたら、人が何をいっても勝手に町を作れると思いますね。今、そういった権限を持っているような政治家はもう日本にはいないですね。

日本人は、おそらく「実存のレベル」よりも、自分の中に「生」の感覚があって、歴史の中で「生きていく」のではなく、もっと大きな時間の、宇宙の中で「生きている」という感覚があるんでしょうね。だから「仕方がない」というような表現が出てくるんだと思うんです。フランス人は「仕方がない」とは決して使いません。「仕方がないよ、自分で何かしないと」と。例えば、一つの建物がなくなると日本人はよく「ああ、仕方がない」といいますが、フランス人は「仕方がない」と聞くと怒るんですよ。物を作ったり、守ったりするのは、生きている間にしかできないことで、自分が死んだあとには、もう自分がいないから、何もできないんだと。

だから「自由」というのは、生まれた時と死ぬ時の間の自由なんです。そのふたつの「壁」の間での「自由」なんです。非常に「生」や「死」を気にするんです。

ある日パリで、ある絵描きとある詩人と私が、たまたま3人でいて。2人は、私よりとても年輩だったし、私がじっと話を聞いていただけなんですけれども。その時、彼らは「物事の死」について話していて。例えば音楽というジャンルの中にクラシック音楽がありますが、このク

ラシック音楽というジャンルは、守ってあげなければ死んでしまうだろうと。その「死んでしまう、だから何とかしなきゃいけない」という風に考えるところが、私にとってとても以外だったと同時に新鮮で、これはヨーロッパ人的な発想だなと思ったんです。常に努力しなければいけない、というのはまさにヨーロッパ人の発想なんです。

銀座のビジョン

そういうヨーロッパの影響を受けた存在として銀座を考えていくとしたら、おそらくこれからの銀座の大きなビジョンを持つのは無理だと思うんです。むしろ日本的な、つまりヨーロッパにはないような、日本人にしかできないような生かし方というのがあると思うんです。

よく日本のインテリが「ビジョンを持たなければいけない」と言いますが、私からみると、もともと日本人がビジョンを持つというのは、無理だと思って出発の方がいいんじゃないかと思うんです。なぜかという、ビジョンを持つとか、さきほど話した「個性的」なこととか「オリジナリティー」という言葉は、あくまでも外国語であって、そういうヨーロッパからきた概念をそのまま日本で使って、何かをしようとしても、もうそんな時代じゃないんじゃないかと。

むしろ、逆に私たちでは想像できないような何かを、教えてもらいたいと思いますね。つまり、英国の鏡である日本というのではなくて、例えば歌舞伎とか能とかを見た方が、現代バレエをみるより、当然驚きますよね。でもまだ今の日本には、そういう明治以降の日本というのが、深いところで続いているなと思います。まだまだ

現代の日本人、一人一人の意識の中に、そういう錯覚があるような気がします。だから、まだ表現されていない日本文化の独特の何かを表現していけば、けっこう面白いことがあるんじゃないかなと。

銀座に関して言えば、さきほども話したように、銀座は多分特に若い層からは、もうそれほど憧れられているような街ではないという風に思うんですね。確かにこの辺に来ると、けっこう年輩の方がいますが、それは田舎から来た人が、地元の銀座と本物の銀座を比較しよう、みたいな気持ちだったり、ある種のノスタルジーだったり。また、少し悪く言えば「成金趣味」で、銀座の非常に贅沢なお店に入ったりするとかという気持ちで来ているのかもしれない。でももう本物の余裕とか本物の贅沢というものは、銀座ではなくどこか違うところにあるような気がするんです。例えばこの報告書の中にも出ていた昔のお店のあり方とかも、サービス精神という「余裕の世界」「ゆとりの世界」のあるお店は、銀座にはほとんど無いんじゃないかな。

今、私はたまたまというか、仕方なく外国人として住んでいるので、そういった観点からみて考えたんですけど。憧れの的としての銀座でなくなってきたとしたら、これからの銀座は、できれば日本特有の、もうほとんど死んでしまったような日本の文化の窓になればいいな、と思っています。

最近、わりといろんな地方で流行っていたみたいですけども、例えば伊勢の町を再現させるみたいなことが。観光の町としては、まあそれもいいと思うんですけども、そんな時、建物の形を、ただそのファサードだけを再現するのではなくて。

職人の世界

今の日本には、特に職人がいなくなってますよね。いつだったか、伊豆のあるところにかわいい美術館があって、その壁があまりに滑らかだったので、触ってみたら、こんな感触は生まれて初めてだったんです。話を聞いたらそれは「漆喰」だったんです。その漆喰の技術を持っている人は、もう九州に数人いるだけらしくて。そこも、その九州の人を伊豆に2、3ヶ月間滞在させて、全部漆喰の壁にしてもらったと聞きました。先ほどお話した大正時代の家も釘を使わない建築らしくて、今作ろうと思ったら、もう無理なんだそうです。

そういう「もの」を作る職人、その職人の世界が日本の文化を支えてきたんだと私は思うんです。職人の世界というのは、作られた個性ではない別の個性を持っていたはずで、これはアーティストつまり「私が作ったよ」「私が作ったんだぞ」というような、作られた個性、作られた世界ではないと思うんです。昔のヨーロッパにも、そういう誰が作ったのかわからないような素晴らしい職人の世界があったと思うんですけれども、もう今ではほとんど無くなってしまっていますね。

ですから例えば、銀座のある一つの道で、そういう職人の店をすべて再現させてみるとか。能の面を作る人とか、刀鍛冶とか、お豆腐作りとか。そこには本物の贅沢、徹底的な贅沢があると思うんですけれど。東京の佃煮で今一番おいしい佃煮というのは、これ江戸料理のシェフから聞いた話なので間違いはないと思うんですけれど、つまり今の佃島の佃煮ではなくて、なんとかという橋のところにある一軒家の小さな所の職人さんが作っている佃煮だそうで、もうその一軒

ただそうです。

そういうものはもっと普及してほしいと思うので、町のはずれにあるのではなくて、そういうものは銀座という、本当の贅沢を求めている所には、意識的にお店を持ってほしいんじゃないかなと。しかしまだ銀座は高いですね。ヨーロッパではどこの国にも、大きなメーカーが、一つの大きな建物の中に店舗をいくつか持っていて、そこにアルティザナが、一つのフォルクローラとして存在しているような所があるんです。そのような私たちの生活の中に入っていて、なおかつ、人間がこの地球に生まれてきて、ずっと何千年の歴史の結果にあるものとして、超贅沢なものとして、存在するようなものがあってほしいんじゃないのかなと思いますね。ただフォルクローラというのは、観光をあてにしているようなもので、わりと市に近いアルチザンなんですけれども、そういうものではなくて、本当に最高の技術を見せるというところとして。みんなの日常を贅沢するためにね。

「ファンテジー」のない銀座

あと最近私が銀座にあまり来なくなった理由の一つに、銀座は子供を連れてくるようなところではない、というのがあります。私の娘を、わりとあちこちに連れていくんですけれども、どうも銀座にはあまり活気を感じないというか、生き生きしていないので、きっと子供は退屈すると思うんです。昔30年くらい前に「銀座は東京の中でいちばん生き生きした盛り場だった」というふうに言われていて、私もそういうふう思ったんですけれども。

盛り場というのは、あらゆる物があって、非常に生き生きしているものだと思うんですけれども

も、銀座には、フランス語でいう「ファンテジー」がないんです。「ファンテジー」とは、ファンタジーに近い言葉で、オリジナリティーとファンタジーの合いの子みたいな言葉です。このいわゆる、ちょっとおかしい、面白い、独特、とかそういう言葉なんですけれども、日本語ではちょうどあてはまる言葉が見つからないんですが、銀座はそういうファンテジーのない盛り場になってしまったという風にも感じるんです。

それで、これはその時の私の結論なんですけれども、それはマリオンとか、大きなデパートが現れてきたせいじゃないかと思うんです。あそこには偽物の文化を持って来ているだけで、消費文化だけじゃなくて、その文化そのものもアート・イベントになっている。これはひとつの形、フレームの中に入っている文化というアートであって、自然発生的なアートではないです。つまりストリート文化からは一番遠いものです。もともと私の認識では、銀座はやっぱりストリート文化だった。いろんな工房があり、いろんな所から若者たちも来ていたし、インテリ階層も来ていた。とにかくいろんな方面から、いろんな人が集まっていて、非常に活気があって生き生きしていた。憧れだけじゃなくて、おそらく街の持っている、田舎に無いような緊張感というのが銀座にはあった。その緊張感が無くなって、街は少しずつ死んで行っているのではないでしょう。

実は、私が世界で一番嫌いなのはフランスの日曜日なんです。フランスの日曜日には全ての店が閉まっているんです。特に小さい子供というのは、常に生きていて、常に動いているんですが、その自分の中の動きと同じように、外でも動かないとなんか居心地が悪くて、もうそこに

はられない。そういう不動のフランスには、あまり帰りたいとは思いません。いまだに日曜日のデパートを開けよう、という動きがあるらしいですが、大反対がおこって「とんでもない、フランス人はなぜ生きているか」と、バカンス、つまり休むために生きている」と。特に日曜日には絶対仕事はしません。そういったフランスの日曜日を、銀座でも少し感じるんです。どこかでスタティックというか、何か止まっているような。渋谷とか新宿と比べて、動きが違いますね。

最後に、先ほども話した日本にはもう無くなってしまった、最高の余裕のところとか、粋とか色気とか、そういったことをこの銀座で再現すれば、おそらく人は来るんじゃないかなと思うんです。例えば、エロティズムを、色気を本当に感じさせているようなお店があったら、すごく受けそうじゃないですか。もちろん銀座のバーも、その一つだと思いますが、もっと風俗的なところも何らかの形でできると必要なんだと思いますね。

日本における「空間」の価値

以前、私はフランスのリベラシオンの特派員だったので、当時、朝日新聞の11階にあったAFP通信の場所を借りて、そこで記事を書いて送っていたんです。フランスとの時差もあって、取材はだいたい6時とか8時頃までにして、それからAFP通信の人たちがいなくなったあと、11時頃とか12時頃から、朝の4時頃まで仕事をしていましたね。そうするとちょうど向こうの入稿の時間と合うんです。それで、その後4時頃から築地でお寿司を食べて家に帰りました（笑）。あと買い物や映画館にもよく行ってましたね。その頃はどこも広々してましたね。

その「広々」を感じていて楽しんでいました。

日本人にはもうマイホームは買えなくなってきて、日常的な商品にお金をかけるようになってきたと思うんです。それで80年代の後半から、多分イッセイ・ミヤケとかあの辺のファッション感覚の影響があったんじゃないかと思うんですけれども、わりとお店がからっぽになった時代があって。コム・デ・ギャルソンとか、パルコの4階とか5階ぐらいに行くと、大きな空間があって他には何もありません。そこで何を感じたかという、日本人は自分の家の中に作れない空間をデパートが代わりに作ってあげているのか、と。これは私流に言えば、偽物の余裕。フランスの車のことを取材していた時にも、「日本人は家の中はごちゃごちゃしているから、自分の車をサロンとして使っている」と言っている人がいました。これをフランス人に言うと、もう、みんなびっくりしますよ。みんな車は実用車として使っているの。私の車なんかまさにフランス人の車です、とにかくデコボコで、もうどこをぶつけても平気。車は走ればいいと思っているので。サロンというのは、やっぱり家の中に欲しいものですね。日本では、何も無いような空間、整備された空間というのは家の中には無理なので、だから他のいろんな所で求めているみたいにみえますね。日本の事務所に行くと、それはごちゃごちゃしていてびっくりしますね(笑)。そんな風にどこに行ってもごちゃごちゃしている。だから町の美しさというのを日本人は、余計なものがないというところに美しさを感じているんじゃないかな、と思ったり。

たしかに銀座でもそれは感じますが、デパートとか喫茶店の中で感じるようになってきた時に、盛り場としての銀座のライバルというのは、渋谷

とか新宿という街ではなくて、室内の空間なのではないかと思いましたね。つまり、スペース的な余裕がわりとあちこちに発生してきたから、それらを集めたら銀座と同じくらいの面積になるかもしれない。それは、何もない「きれいな面積」。もしかしたらこれが銀座にとって、一番のライバルになるかもしれない。

(講演終了)

* * * * *

- 全体議論より -

日本人と計画

前田 / 地域計画をやっているものとして、お話のなかの「日本人にはビジョンをつくることができない」という部分は、もしそうだとしたら、かなりつらいものがあります。とはいえ、非常に鋭く日本を観察してもらっていると思いました。

もともと私は、大学では建築を専攻していたんですが、どうも建築というものの中に性が合わない部分を感じていたのですが、先ほどのお話を聞いて、その違和感は日本人本来の性格から来ていたのかなと思いましたね。もともと西欧的職能であるアーキテクト(建築家)というのは、「俺が、俺」と、無理してでも自己主張しなければいけないわけで、それがどうも性に合わないところがあるわけです。もちろん、そうでないタイプのアーキテクトもいますが。

そこへいくと、地域計画とか都市計画というのは、住んでいる人たちの話を聞きながら、「成り行き」でつくっていくところがあります。「成り行き」というのはすごく日本的な言葉ですが、反対に「こうでなければいけない」と人に押しつける立場にいるのがアーキテクトなんだと思います。地域計画というのはプロセスがすごく大切で、仮説として「こうでなければいけない」とか、「こういうふうにした方が、いいんじゃないですか」とは言うんですが、全くその通りにはならないんです。結局、住んでいる人達や、関わりのある様々な主体がいろんなことを言いあって、その中で、じわじわと合意や計画が自然にできていくんです。

最近欧米で、プロセス・デザインという考え方が重視されていると新聞紙上で読みました。最終的な目標像を示そうとするグランド・デザインではなく、合意形成の仕方やそれに対応できるフレキシビリティの確保を計画に入れるプロセス・デザインの考え方は、すごく日本的な考え方ではないかと思います。そのような意味で、「日本的なビジョンの作り方」はあると思いますね。

ブレノ 私も少し取材したことがあるんですが、例えばひとつの町であるものを建設する時に、その下に流れている川を残すとか、木を残したりとか。もっと本当に、人間と宇宙がうまく共存できるような角度を考えている。そういうのは大きな「ビジョン」としてではなく、もっと直接的に。今、NTTがやろうとしている、NTTマルチ・メジャー開発でやろうとしているソーラーシステム。これは、いろんな建物の上にソーラーシステムパネルを作って、それを全部関連させて、リンクさせて、ひとつの分散型発電所を作ろうじゃないかという構想で、これ

は聞いてて面白いと思いますね。人間の持つ一人一人のつながりを大事にして、一緒に大きなことを作るという。だから、分散型発電所というのが実現したら、面白いと思うんですけどね。

長澤ノ さきほど塔の話が出ましたが、建築の話でいうと日本には「五重の塔」とか、「三重の塔」というものがあります。その真ん中には「心柱」というものがあるんです。以前それについて、いくつもの塔を調べたことがありますが、その心柱の下の一番中心にある柱は、地面に着いてないんですよ。ヨーロッパで塔を建てる時には、まあバベルの塔は違うとしても、しっかり積んでいくのが普通じゃないですか。それが日本の場合は木と木を組み合わせるって、それを「斗きょう」というんですが、バランスをとりながら組み合わせていくんです。重構造だから揺れても大丈夫なんですけど、真ん中の柱は分銅の役割のようなもので、ぶらぶらと浮いているんですよ。

これがすごく日本人の考え方にも似ていると思うんです。もちろん、心柱は象徴というよりは、構造的に必要なものなんですけど、なんていうのか、真ん中に1本しっかりした中心があって筋を通しつつ、そこから物事を派生させてながら物事を決めていっているというようなところが。組織体は、維持しているというよりも、細かいメンバーをたくさん組み合わせるって、そこに一見中心がありそうにみえながらも、実はそんなに確固としたものがあるわけではなくて、細かいメンバーでそれを支えているだけというか。そういう風に、同じ塔を作るのでも、そういう方式で日本人は作っているんですよ。これと似たような塔は、中国にもあるんですけど仕組みは違うんですよ。

ブレ/ そういうところでも、日本人はものすごい实际的、プラマティックだと思いますね。

そのプラマティズムというのは、物が作られる時に、何て言いますか、素材の規則というのか、あるいは素材を大事にする、無駄をしないというところなんか。その实际的、プラマティックであって、素材を無駄にしないことで、きっと、今、私たちにはわからないような理由があったとしか思えないの。だから、おっしゃっている日本人に似ていることはよくわかるんですけども、でも、もともと千何百年前に、こういうふうに作られたというのは、きっと理由があったと思う。それが知りたいですね（笑）。

職人の町としてのイメージ作り

長谷川/ 以前、長澤さんが研究会の中で「銀座にも物を作っている所があったが、それがだんだん無くなって来た」「場合によっては作るふりでもいいから、作っているというようなことをするだけでも、だいぶ違うんじゃないか」というようなお話がありましたが、コリーヌ・ブレさんもやはり銀座のこれからのイメージとして、職人にこだわり「作る」ということにこだわったらどうかというお話がありまして、そこと大変呼応する部分があるんですが、職人の町として銀座を作り変えていったらどうかという提言についてはいかがでしょうか。

長澤/ 物を作ると言っても、いろいろな物のあり方がありまして。いわゆる今の日本の伝統的な工芸美術品であるものを再現するような地域はたくさんあるけれども、それではダメだと聞いてます。もっとモダンイズして、今風というか。たぶん銀座が流行った頃というのも、今よりずっと洋風に憧れたり、文化生活だったりす

るようなところに憧れていたんでしょね。そういう風に、ある技術と素材を持ってきて、モダンにアレンジメントしてみるといいんじゃないでしょうか。たとえそれが現地に行けば1万円分のものだとしても、ここではもう少し「High」でいいんです。日本人は高価ということはあるけど、高級という概念はわかりませんから（笑）。そういうような意味では再現したらいいと思うけれども。

例えばテーマパークなんか調べても実際にやる芸以外だと、やっぱり作って見せる見せ物が一番面白いですね。見せ物といえば、他にもお祭りとか、金魚すくいとかいろいろありますけれども、あれは、お金と等価交換なんです。しん粉細工とかも、案外あれでうけるらしいですね。例えば、ドイツのテーマパークがありますけれども、そこも作ってくれる。ハウステンボスでも作る、パンも焼く。そういうのを見るのは、実はすごく面白いと思うんです。京都の町屋というものは、玄関を入ったところを店と呼ぶんだけど、その土間のところではなく、格子戸のところになにかいろいろとやっていた。そういった仕組みそのものは決して楽しみの装置ではないんですよ。

だから、ただ持ってこられて、運ばれてきただけの市場にするのではおもしろくないですよ。市場のなかで、やっぱり一番行ってみたいというのは、買いたいということと、あとはたぶん食べに行くということ。そういう意味で、実際には演じることのない町というのはつまらないという気がするんですよ。

もうひとつ言えることで、例えば、銀座に木村屋というパン屋がありますが、あそこは上でパンを焼いているわけですよ。それで、銀座で焼くパンというのは、すごく高いんだろうなと

思うんですけど、でもこれって、やっぱり、そういうモノが「運ばれてきている」ということに対して、日本人がいやになってきちゃったということなんですよ。

例えば「こけし」というのは、本来全国各地の悲しい思い出というのが中にあるんだけど、ほんどの「土産こけし」には、そういう意味は無いわけですよ。駅なんかで売っている「なんとかクッキー」も同じで、実はみんな同じところで作っていたりするわけですよ。ワインの産地では全部隣からタンクで買ってくるわけ。「静岡のお茶」も鹿児島から来たりしているわけですよ。そういうことがみんな情報化時代でわかっちゃったから、みんな「作っているところに行きたい」となってきたわけです（笑）。そうなってくると、たぶんひょっとしたら、佃煮というの、どっかに大量に発注していて、その中で一次加工したやつを持ってきて、もう一回煮たフリをしているだけかもしれないし。ディズニーランドでやるというのは、意外とそういうことなのかもしれない。でも、みんなはやっぱり、本当にそこで作ったものをそのまま欲しいということだと思うんですね。

だから僕は、フランスのブランド物の人たちって、わりとずるいと思うんです。例えば、一つのケースとして、アウト・ドール製の工場職人さんがケリーバックを一つ一つ作っている行程を見せたりしてるけど、あれはあくまでも見せ物用に作るのであって、郊外にいったら工場で作って作っているわけですよ。でも、そういう意味で考えると、まあそれが、すごい価値を生むわけで、そこで作られた価値が大量にある部分であり、価値であるということでもあるんじゃないかな。

だから、銀座はむしろ、もう少し生産基地であ

ってほしいと思うんですね。価値の生産基地であって、それが評価される物の生産基地ではなくて。今、ここに1個だけ、もう何百万円で作っているという装置がある。そういうふうなことを期待しますね。

ブレノ つまりそれを一言で言ったら、「本物」ということですよ。フォルクローレ、日本語でいうと民芸品。そういった物ではなくて、本物の職人が作ったもの。例えば、モロッコのフェズの町に行くと道の両側に延々と作っている人達がいいますが、それはみんな本物の職人ばかりで、見せ物なんかじゃないんです。それで生活をしているので、ここにはやっぱりすごい活気がありますよ。

だから、この銀座にもフェズみたいな迷路があればいいんじゃないかと思います。何か工夫したら、似たようなものが作れるかもしれない。そういった本物の「エレガンス」とか、「本物の粋」、「本物の色気」、「本物のアート」。

空間感とライフスタイル

ブレノ さきほどお話した大正時代の家ですが、ここに入った日本人は、「気持ち悪い」と言うんですよ。これは、小さい時から都会で育った人には、自分の中に余裕の空間が無いということなんじゃないでしょうか。こじんまりしたというか、小さな空間でないと生きられない、生活できないということみたいです。その点、田舎で育った人は、いわゆる「空間」に慣れていて、むしろその「間」の感覚がないと住めないという。これは決定的なことだと思いますね。

長澤ノ 田舎というのは基本的に、家の周りに家以上の空間がいっぱいあるんですよ。田圃と

か、畑とかね。そうすると家というのは、それだけで少し狭い世界なんです。ところが、都会で今、僕が暮らしているところなんかでも、家の中の方が広いんです。庭なんかすごく狭いしね。むしろ、家の中の方が部屋と部屋の間に、距離があって。隣の家なんか窓とかから握手ができたりとかね（笑）。だからつまり壁と、その外との関係がそれぞれ違うんです。そういう考えからいくと、やっぱりなんていうのか、空間感覚というのが全然違ってきてもしょうがないというか。

それでもう一つ、田舎の人から聞いてびっくりしたのは、要するに鍵を持たないということ。僕は今、山形で教えているんですけども、僕は、外出するのに鍵を持ちますよね。ところが山形の家というのは、窓から鍵をかけるだけなんです。そうなる外からは開けられないんです。帰りが遅くなった学生は、家族が寝ちゃうと家に入れなくなっちゃうんです（笑）。それで、彼らは授業に出るの遅いから、塀をよじ登って、自分の部屋の鍵だけを開けとくんだそうです。そうやって2階から入らないと、家に入れない。そういうことから考えてみても、彼らは「内側を確保する」という感覚があるのであって、何ていうのかインテリアとエクステリアの感覚の違い、が誤解を招いているような気がしますね。

ブレ/ ねずみを取りにくるあるねずみ取り屋さんから聞いた話ですが、昔の家の2階の天井と屋根の間には、人間が1人立てる位のスペースがあるんだそうです。また同じように1階と2階の間にもすごいスペースがあって。畳を上げても、ものすごいスペースがあるんだそうです。

そこで思ったのは、その家では目に見えない「ス

ペース」に囲まれていることになるんだなということ。これって、今の文化には無いような、すごい余裕ですよ。それに、もちろん庭が大きくて外も大きい。だからこの「スペース」に、都会で普通に生まれ育った日本人が会うと、もうどう動けばいいかわからないみたい。でもその点ヨーロッパ人は平気みたい。この間もそこに2メートルくらいの身長がある3人のセネガル人のミュージシャンが来たんですけど、彼らは、その家の中でも堂々と歩くんです。全く驚かない。おそらく、たとえそれがミニチュアであったとしても、自分の中にある空間と同じようなスケールがあれば、きっと何事にも驚かないんだと思いましたね。

ヨーロッパの窓としての銀座

三枝/ 私は、これまでも外国の人が銀座を見て、どういうコメントを残しているのか、ということに大変興味をもっていて、まだデータは不十分なんです、気にして調べているんです。

だいたい、盛り場として銀座が有名になってきたのは明治の始めぐらいで、130年ぐらい前です。ちょうどその頃、外国人が多く来るようになったんですね。それでも、一人として誉めた人はいないんですね。日本が好きで、「日本」を誉める外国の人はいっぱいいますが、「銀座」を誉めた人というのは、今まで調べた範囲では一人もいないです。

しかしそれはある意味では当然なんです。つまり、コリーヌ・ブレさんがおっしゃったように銀座はヨーロッパの真似から出発していますから、ヨーロッパから来た人が、日本にあるヨーロッパみたいなものを見ても、ちっとも面

白くもないわけです。しかし明治時代の文化といえはヨーロッパ文化と合体した頃なわけで、当時の日本人にとっては、それが非常に斬新だったということなんです。また、日本はヨーロッパ文化をそのままでは受け入れられなくて、それを日本的に作り替えていったんです。その仕方というのがあって、それらはヨーロッパの人から見ると非常に奇妙な形に映ったとは思いますがね。

それが130年の間でずいぶん変わってきたわけで、それを日本的にどうやって使いこなすか、住みこなすかというのが、銀座の最大のテーマであり、また現代日本の象徴でもあるんだろうと思います。

だから、さきほどコリーヌさんがヨーロッパを感じるのは今や銀座ではなくて、代官山だとおっしゃったのは、まさにその通りで、当然なんです。いかに「ヨーロッパ的じゃないヨーロッパ」を作るか、というのが銀座のテーマだったわけですから。そしてその両義的な、懐疑的なというか、ある意味では、ねじれて歪んでるんですけれども、銀座の好きな人というのは、その辺りのヨーロッパの文化を日本的に、みごとにねじ曲げて同化させて我慢できる形にしていたところが好きなわけで。そこに、日本人のアイデアや文化を加えていったという面白さが銀座だと、そこが銀座の良さなんだと思ってるんです。しかしヨーロッパの人で、たんに旅行者として見聞的に来た人には、その面白さっていうのはなかなかわかって頂けないというか、理解しにくい。だけど銀座の人間に言わせると、そこが銀座の良さなんだ、130年かけてねじ曲げてきた面白さっていうのがあるはずなんだと。

ブレノ 昔はそれができたと思いますね。つまり

昔は、といってもつい数年くらいまでは、まだ外国と日本には時間的なズレがあって。でも、今はもうリアルタイムですからね。

三枝ノ そういうやり方が完全に行き詰まっているということも事実で、だからこそ、これから銀座はどうするのかという話がでてくるんだと思うんです。

ブレノ 例えば銀座に、今パリで一番流行っているものを持ってくるとしたら、半年先に持ってくるのではなくて、同時に持ってくるとか。道でファッションショーをやるとか。それもパリとリアルタイムでファッションショーを同時にやるとかね。

「銀座まつり」について

ブレノ あの「銀座まつり」というのは、どういうものですか？

石丸ノ あれはもう30年くらい続いているものです。もともとは、終戦直後の東京の人口が200万だった時、銀座は唯一の盛り場だったんです。ところが、朝鮮戦争で東京の人口は500万になり、東京オリンピックで1千万を越し、現座は1千200万台ですか。そうなってみれば、盛り場も新宿や渋谷、池袋とできてしまっ

その時、「銀座はベスト1なんだ」というのを、見せなければいけない、といって始まったのが銀座まつりの始まりなんです。戦後、新しく東京に入ってきた人たちに向かって「銀座はどでかいことが、できるんだよ」という、そういうイメージを与えるために始めた、というのがまあ本音の動機でしょうか。

そうして確かにはじめは、みなさん「銀座はす

ごい」と言って下さったんですけれども、やはりこれも神社の祭礼と同じですから、ただの「祭り」になってしまっただけ。そうなる、やっっている方もだんだん深刻になってきてしまっただけ（笑）。それでも、やはり10月のあの時期になると、多少は活気というのが銀座に出ているような気はしてますけど。

ブレノ そうなる、銀座の未来は「ものすごくノスタルジーを感じさせる」ようなことをやるか、もしくは「ものすごい大胆不敵なことをやるのか」のどちらかなんでしょうね。例えばアルベールピルの開会式のときに振り付けをやったフランス人がいますよね。あれは、オリンピックの開会式の中でも、今までで一番大胆なもので、それはもう、みんなびっくりしましたよね。だから、ああいった人呼んできて「銀座まつり」の演出を頼むとか、というのはどうでしょうか。

「アルチザン」の街としてのあり方

荒井ノ 最初の方のお話でフランス人の「個性」や「個」についてのお話がありましたが、その時、「個」というコンセプトは「ブルジョワジー」であって、その対極に「アルチザン」があるというお話がありました。そこから一つ、これからの銀座のあり方として「アルチザン」ということも考えてみればということでしたが、そうしたことを考えた時、例えば、今ヨーロッパなりフランス、あるいはイギリス、ドイツに「アルチザン」というのはいるんだろうか。アルチザンをコンセプトにしたようなことは現実に行われているんだろうか。あるいは、ヨーロッパの人たちは、そういうことに対する可能性を真剣に考えているんだろうか、ということをお伺いしたいのですが。そういう関連性がある

として、もし今、ヨーロッパではそういうことを考えることはできない、アルチザンをコンセプトとして関心を持ちながらも、新しいスタイルのことを考えることはできないとするならば、銀座はまったく別のことを考えるというか、新しいことをやる、ということになりますよね。

ブレノ 「個」の話は、「パリは個の権利を生かす街」という端山さんがおっしゃった言葉に、たしかに私も同感するところがあったからで。これは現在のパリ、ある短い歴史の中での話で。私から見てその「個」というのが、「生きる」というのに近いような「個」ではなくて、どちらかというと「作られた個」であって。

私は昔の中世時代の文化と、初期江戸時代の文化の、例えば、作品を見ると、とても共通性を感じるんです。それはおそらく、中世時代の人間と、中世時代のフランス文化、ヨーロッパの文化がルネッサンスの時に非常にダメージを受けたからで、それが今再認識されつつあるんです。その時代は東洋と西洋が一番接点があった時代ではないかなと思います。また別の言い方で言えば、フィクションとノンフィクション。芸術と非芸術が一緒に重なっている時代だと思うんです。

ちょうどその頃のヨーロッパでは、教会を作っていたんですが、その教会を作っていた時には、いろんな職人がいて、みんな技術を持って。そのコンパニオナーズは今現在も、生きているんですよ。ですから、これが多分、一番日本のアルチザンに近いような人たちだと思うんです。それと先ほど話したコミュニティー・コルベルとどういう関係なのかというのは、おそらくそこからきていると思いますね。つまり、フランスではものすごくアルチザンの意識が深いということで、だからそれらは共通性を持っている

んだと思うんです。自分たちが伝統を伝えるとした時、「残っている」とすごく意識しないと。つまり、それは無名な人、名前を持たない人たちで、またとても厳しい世界でもあると思います。

ただ、私個人としてはオスマンの作ったフランスというのは、好きじゃないんです。あれはやっぱり近代フランスであって。ただ経済成長の一番頂点に着いた時のもの。アムステルダムもイギリスも、ロンドンもそうだったように、みんなある時期に、ものすごく世界に向けて「ほら、こんなに豊かなんだよ」ということをアピールする。日本もそういうことをやろうとしたのかもしれないですけど。

人間国宝

ブレ / 日本で一つ面白いと思ったのは「人間国宝」。特にフランスからみると、あれは驚きますよね。「人間国宝」つまり、生きた人間を国宝にするという発想がすごい。フランスはそこまで考えなかった。くやしいと思うんです(笑)。

ですから逆に、日本人はそこまでスケールが大きくて、もしかしてヨーロッパ人よりもっと大きなスケールでもものを見ているんですけども、それをもう少し表現しなければいけないんだと思います。人間国宝みたいな発想というのが、いっぱいあればいいと思いますね。職人とは言わずに、本物のアーティスト、本物の芸を持っている人が選ばれているわけですよ。

前田 / ただ人間国宝ということ自体は、別に悪いことではないんだけど。例えば、お茶の世界で千家というのがあるわけですよ。その千家には、お茶で使う道具を作る人たちがいるわけ

ですよ。彼らは構造として、そういう人たちが食べていける仕組みを江戸時代を通じて作って来たわけです。だからそういう人は、人間国宝にしくたって十分、食べていけたし、立派にやってこれた人たちなわけで。もちろん今でもそういう人はいますけど。しかし、そういう構造がだんだん壊れてきて、しょうがないから、お国がそういう制度を作って面倒みようとしていただけの話で。むしろさきほどのコルベールの話みたいに、もっと構造的に、アルチザンみたいなものを守る仕組みがあった方が本当はいいんです。

島田 / 私も実はフランスが大好きなんですけど、さきほどフランスのお年寄りの話で「何かが死にそうだから、これは救わなければいけない」というお話がありましたよね。そういう考え方にはある種、現在の欧米などで全体に通じる話だと思うんです。それに比べると日本の場合の「人間国宝」の話にはインチキくさい部分もあって。たまたまその人がやってきたことが、その人が死ぬことで、完全に死んでしまう。技術、成果が無くなってしまふ、というか、途絶えてしまふ。そういうものに対して、「人間国宝」とすることで「よくやってきてくれました」という感じの方が圧倒的に強いんです。しかし日本の場合、歌舞伎とかさきほどの千家の話も、延々と続いてこれたというその背景には、経済が成り立ってきたからで。要するにパトロネージされる構造があったからなんです。

要するに、システムとして構築してきたわけじゃなくて、日本では教育のシステムでもそうですが、アルチザンを育てていくには、非常にその辺があいまいなんです。ある種、階級社会でなくなったということではいい意味もあるかもしれませんが、悪い意味ではそういうところも

あったと思います。その点、私はヨーロッパ人ではないので、本当のところはよくわかりませんが、聞きかじりで言えば、例えばマイセンやロイヤル・コペンハーゲンなどにしても、学歴みたいなものは別に問わないけれども、本当にそのことを一生懸命にやる人たちというのは、小さいうちから育てられていて、そうやって伝承というか、それらのトラディショナルなものがきちんと伝わっていくようになっている。そしてそれらを受け継ぐ人たちは、またちゃんと社会の仕組み、システムとして繋がってきているというところが、とても興味深いですね。日本では、戦後そういうものが家業レベルで企業として成長してしまうと、そこに伝わる伝統とか、守るべきものが、儲け主義の中にホモジナイズされてしまうんです。

「偽物の個性」と消費

ブレノ 銀座にはシャンゼリゼにないような日常的な要素があって。職人がつくる手ぬぐいや包丁など、日常的に使っているものの一流品をその場で売っているというのがすごく面白いと思いますね。しかし今の日本で、しかも東京の中にあるということを考えると、銀座はやはり古くなったなと思いますね。

島田ノ たしかにそうなんです、逆に日本はその時々でものすごく価値が変化するんですよ。そうすると、ある意味では銀座ではない所での問題があちこちにてきて。

ブレノ 最初にお話したように、私は消費文化というのは「偽物の個性」でないと成り立たないと思っているんです。ですから、その個性の作り方によっては、おそらく消費者文化は成り立たなくなると思いますね。それは、さきほどの

大正時代の家の中に入った途端に、物が入らなくなるというのと一緒で。だから、きっと江戸時代にはモノはあまりいらなかったと思いますね。

そういった非消費社会を作れるのは、ある意味で日本だと思うんです。ただ、現実にはやらないでしょうけど。しかし理論的にはできるし、またやらなかったら日本はゴミの中に埋もれて滅びてしまうかもしれない。ですから、今、それを変えなければいけないと思いますね。

130年間の歴史を持つ銀座

船曳ノ 私は本日はじめてこの会に参加させていただきました。実は、私も子供が4人いるんですが、その子供たち全員を連れてくる一番の盛り場は銀座なんです。さきほどブレさんば「銀座は、子供を連れてくる所じゃない」とおっしゃっていましたが、そういえばそうなのかもしれない。ただ、自分が小さい頃から銀座に親しんで来たから、子供たちを連れていってもすごく楽しいんですよ。そういう意味で私は銀座ファンの一人なんですけど、その銀座ファンから見ると、やはりここに職人たちのテーマパークとか、地方の何かを持ってきたら、と言われるとちょっと苦しいなという感じです。

銀座はこの130年間の中でいかに西洋文化をここに定着させようか、利用しようかとやってきた歴史なので、その歴史なりの厚みというものがあると思うんです。それがやっぱり私にとっては銀座の最大の魅力です。

銀座は西洋文化を擬似的に取り入れたという、外国から見てのマイナスだけではなく、やはりこれまでの日本の文化には絶対に必要なものだ

ったと思うし、またこれからも必要だと思えます。なぜかという、私も少し外国で暮らしたことがあって日本からきた留学する若い方をずいぶんお世話したことがあるんですが、その時の経験から、大変断定的なことを言って申し訳ないのですが、日本人の方でも東京を通過しないで、地方からきた留学生というのは非常に欧米の価値観とか評価というのを非常にうまく受け入れるんです。受け入れるというか、相手の深さが見えないためかすごく根元的に入ってしまっ、そのまま結婚して、そのまま離婚してしまうというケースが多いんです。そういう人と話をしていると、どうも日本自体もわかっていないし、西洋もわかっていない気がして。しかし東京を通過して、銀座的なものを通過した人というのは、向こうにいてもそれなりの尺度を持って向こうを見ることができていると思うんです。ですから日本における銀座はこういう意味での存在価値もあるんじゃないかと思えます。

「残す」ための第一歩として

保田 / 今日ブレさんがおっしゃったことは、私は全部銀座を誉めていることだと思います。子供を連れてくる所ではない、というのもある種の誉め言葉だし、銀座はそういう街であった方がいいんです。

ただ、今までにもいろんな人から銀座についてのいろんな意見を聞いてきて、ものすごい数の意見があったんですが、どれもこれも、何か一つやろうとしたら何か障害にぶつかるとい。その現実とこれまでのいろんな意見をどうやってこれから整理していけばいいのかということがこれからの課題であって。例えば「残す」というのは、そういった意見の中から何かを残す

というのも一つの「残す」だし。今ある物を「残す」というのも。また何か持ってきて残すのも「残す」だし。つまり「残す」というテーマに絞って何かやらないと、あまりに問題が多すぎて大変だと思うんです。ですから今年の「残す」というテーマ、問題に対して今日のお話は大変貴重なご意見だったと思います。

三枝 / 今、銀座の街に対して周りからの意見というのはいろいろあって、また個々の方々はそれぞれ皆さん意見を持っているんですが、実際になると、じゃあどうしようかっていうことになるわけで。ですから私自身は何かビジョンを持たなければいけないわけなんです、ところが「日本人にビジョンは持てない」となってしまうと迷ってしまうわけで。

ブレ / それはヨーロッパ的に、という意味でのビジョンであって、だからこそ独自のビジョン銀座らしいビジョンをこれから育てていけばいいんですよ。

三枝 / 今まで銀座の街の人間というのは、あんまり銀座に、これからこうなりますとか、あーあしようというのは野暮だからやめようという雰囲気がありましたが、もうそうはいっていらなくな。若い人を中心にそい動きがあったり、やはりさきほどお話があったように建築畑の人たちは、やはりビジョンを構築するのが大好きでいらっしゃるようで、そういう議論を盛んになさって下さるんですよ（笑）。しかしあまりにも複雑な要素がありすぎて、まとまるのかどうかというのが、難しいところで。

* * * * *

長谷川 / 議論は尽きませんが、今日コリーヌ・ブレさんから出されたいろいろな問題提起をもとに、座会の方でもさらに「今後どのようにして銀座を残すか」ということを、消極的な意味の「残す」ではなく、より発展的な意味での「残す」ということで、今年も進めていきたいと思っています。

(1997 年 6 月)

「銀座の記憶」



上山 良子

ランドスケープ アーキテクト

上智大学英語科卒業。1978年 カリフォルニア大学バークレー校
環境デザイン学部大学院ランドスケープ学科修了。

以後 CHNMB、アーバンデザイン/ランドスケープ アーキテクチャー
事務所（旧ローレンス・ハルプリン事務所）を経て、1982年帰国後
（株）上山良子ランドスケープデザイン研究所設立。長岡造形大学大
学院環境デザイン学科教授。

<プロジェクト> ロングビーチ市街地再開発、玉川高島ショッピング
センター20周年改装、日立科学博物館屋上庭園、芝浦シーバンス、
広島空港庭園都市構想、芝三丁目東地区開発ランドスケープデザイン
ガイドライン、東京湾臨海道路換気所立杭景観検討委員会基本計画策
定、長岡平和の森公園、他。

<委員> 建設省建設審議会、歴史的景観保存委員会。

<賞> 都市景観賞、日本建築美術工芸協会賞、ヘルシンキ招待コンペ
トウーランロッティ湖ランドスケープ。

<主な著書> 『アメリカに於けるランドスケープデザインの展開』

（SD特集「庭園」編集協力）

共著『環境をデザインする』環境デザイン研究会、朝倉書店他。

* * * * *

はじめに

上山 / 私は今日のテーマを「土地の記憶」だと
ずっと勘違いしておりましたので、「銀座の記
憶」ということでしたら、おそらく皆様方のほ
うが、ずっと詳しいのではないかと思います。

ただ私は日頃、日本は何層にも「土地の記憶」
が重なってきたところであるにもかかわらず、
そういうものをないがしろにして、開発をして

きているということに対して、非常に憤りを感じ
ております。アメリカから帰ってきたのは15
年前ですが、それからずっと、どうしてこれだ
けの歴史があってこれだけ「土地の記憶」とい
うものを持っているにもかかわらず、これほど
までにカオスの都市にしてしまったのか。どう
やって今後この土地ならではの街づくりをすべ
きかを、ずっと言い続けてきています。

そういう中で、「銀座」というところを私はちょっと別な観点で見えています。といいますのは、さきほど、三枝さんにもお話ししたのですが、私の中で銀座というと、まず「サエグサ」さんなんです。それは母が、私が生まれてすぐに九歳ぐらいまでの洋服を「素敵なのがある」といっては「ギンザのサエグサ」から買ってきてしまっていたからです。そういう記憶からか、銀座というと私の中ではすぐに「サエグサ」さんが浮ぶんです。

そういったように、おそらく我々の中には銀座ということ、それぞれ何か特化したイメージがあると思うんです。また銀座は今まで、ずっとそういうものを大切にしてきた所だとも思いますので、できるだけこれからも、そういうみんなの記憶に特化されて残ってきたものは残していくべきではないかと思っています。

銀座の土地の記憶

銀座の土地が持っている記憶というものには、レンガ館時代を含めて独特の歴史があって、その中で街としての記憶というのは、各自何か一つ特化された思い出があって、そういったキラキラ光るものの美しさが重なって、世代から世代へ継承されてきていたということだと思うんです。

このあいだ尾島先生と「丸の内をどうするか」という研究会でお話ししている時に、尾島先生が「銀座の屋根を全部屋上庭園にする」という案をお出しになったんです。そのとき「銀座というところはすごいところなんだ」とおっしゃっていました。つまり銀座には新しいものをドンドン取り入れていける、そういう力があるんだと。たしかに老舗は老舗であるけれども、新

しいものも取り入れているので、街が活性化しているということでしょうか。

私もそれまで銀座をそういうふうには見ていなかったものですから、ときどき来てみてよく見ると、たしかに今までなかったようなものが突然パッと出てきたりしているんですね。そういった新しいものを取り込みながら発展しているというイメージが銀座にはあります。そしてその中でも、絶対に変わらないものもある。そうでなくては、私たちは銀座の意味がない、と思っているんですね。そういう重層した記憶の中に、新しい記憶をつくっていくことは、すごく創造的な力を要することだと思います。

「ネオフィリア」という言葉があります。ネオは新しい、フィリアは愛というギリシャ語です。「人類は究極のネオフィルだ」と、ライエル・ワトソンが言っています。そういう「ネオフィリア」の概念でいいものを作ってきたから、それら一つ一つが歴史をつくって来た訳です。世界にそして日本各地に「銀座」というのが繋がっていったのもそのあらわれではないかと思えます。つまりフレキシブルにもものを取り入れられる、というところがキーだと思います。

パブリックレルム

1992年の細川政権の時に「美しい街づくり」という委員会がありました。この時、何が日本で問題になったかということ、やはり「パブリックレルム」でした。つまり「公共の領域」ということは、「人さまのために何ができるか」ということですが、それが無い。そういう中でいい景観というのは作れないわけです。景観とは「公共の領域」に属するものです。

ヨーロッパを旅すると、このパブリックレルムの概念の重要性を痛感します。つまり「自分の景は人さまの景」という意識がきちっと市民のマインドに育っているところは、きちっとした景ができています。そういう「生活の景」というのが経済的な価値にまで結びついている。「経済的にアメニティが経済を促す」ということが最近 OECD の会議の中で云われたそうです。そういうことがようやく言われ出してきたというのは、随分遅い話だと思うんですけども。我が国でも「生活景」がきちんと認められた時、初めてアメニティが再び生まれ、街がきれいになるだろうと思います。それにはおそらく 100 年はかかるのではないのでしょうか。

でも 100 年というのは決して長くはないのではないかという考え方も出来ます。江戸でも 400 年かかってああいう形になったんだと思えば。これはたしか高田公理先生がおっしゃっていたことなんですけれども、「江戸はできるまで 260 年かかったんだから、これからいい景をつくるのに 100 年の系でやっていくのも、あながち悪くないんじゃないか」と。やはり景は、次の次のジェネレーションまで、つまり 3 代ぐらいはかかると思うんです。生活のストックとしての景を一つ一つ創っていかねばいけない。

最近まで私はある国際招待コンペに挑んでいました。場所はヘルシンキで、中央の操車場跡地が問題の場所でした。日本の代表として招かれたのですから、頑張らなくちゃと張り切ってやりました。その時、フィンランドの国に感心致しました。といいますのも、彼らは経済的には地味な国です。それが EU 諸国に加盟して、少し経済的によくなった今日、今まで 30 年間の懸案であったこの公園をコンペにしようと思ひました。そのために、賞金も奮発し、アメリカから 1 チーム、日本から 1 チーム、ス

イスから 1 チームを招待し、あとは、EU 諸国は誰でも自由に参加出来たのです。それだけ EU に気を使いながら、しかし「ストック」をつくっていかうとしている。そういうストックをつくることに、まずお金を使うというマインドに私は非常に感動した訳です。それで現場を見て感じましたのが、街に何ひとつ無駄がないということでした。つまり、余計なものをつくらなくて、じっくり考えて、いいと思うものだけをつくっていくので、それが景のストックとなっているんですね。このヘルシンキというのは比較的新しい都市です。都市を急につくらなくてはならなくなってしまった経緯があります。その時、一番流行っていた新古典主義で急に町がつくられていったいきさつがあります。それに反発して大工さんがすごく民族的なものをつくったりしたというのも、よく見るとたくさんあるんです。しかし、それら全部がストックになっているんです。我々の、作っては壊し作っては壊しという考え方とは全く違って、ストックを少しずつ作っていくというところに非常に感動しました。

フライブルグもそうでした。やはり昔の古いものをうまく生かしながら、そういう土地の記憶というものを大切にしながら街を作っている。これからは私たちがそういうことをやっていかななくてはいけないんじゃないかと思ひます。そのためには「パブリック・レルム」、つまりパブリックに対して何が出来るかという、そういう意識を子供達にまで浸透させていかなければいけないと思ひます。

都市の中の水

私は「水」というものに非常に興味を持っています。そういう目で銀座を見てみますと、も

とも銀座のすぐ近くには水があって、水路もありましたよね。昨日もちょっと地図を見てみたんですが、今ではそういう水の記憶みたいなものは全く失われているようで、しかもその水というものが、都市の中の演出として全然つくられてこなかったのだなということ、強く感じました。ある人が「都市の中における水の演出が、その都市の文化のパロメーターである」ということを言っているんですが、確かにローマなんかに行くときすごいなと思いますね。そう考えて銀座を歩いてみると、水というのがとても少ないという気がするんです。屋上緑化の話もおもしろいと思います。「屋上というのは第5のエレベーションである」と言った建築の先生がいます。第5のエレベーションを緑としてもう一度再生するんだという考え方も環境的にもよいと思います。同時に銀座にはちょっと歩いて少し休めるような場がないことを感じます。そういうポケットパーク的なものをつくるには、どういう職域があるのかということ、今日はスライドでお見せします。

トポフィリア：場所・愛

まず「フィリア」についてお話しします。「フィリア」というのはギリシャ語で「愛」のことで、「トポス」というのは「場」という意味です。イーファー・トゥアンという人が『トポフィリア』という概念を作ったのです。この人の書かれた『空間の経験』に私はすごく感動しました。ある場所を見る時、その人の文化的なバックグラウンドによって同じところを見ても見方が全然違ってくるとい話です。例えばピグミー族の人たちは、普段森の中で生活しているので、遠くを見渡す習慣はなく、空間のスケール感が全く他の民族と異なる。反対にインディアンは遠くの方に煙が上がったらピッとすぐにわかる。

どこに上がったかというのわかるぐらいの空間感覚を持っていて。そういう空間感覚というのは、その人の人生経験とか、それまでの空間経験で全然違ってくるのでしょうかけれども、そういうものを全て排除しても、有無を問わずすごいと思うところがあるんです。彼はそういう、場所の考え方として「トポフィリア」という概念を使って説いているんです。皆さんの中にもこの本を読まれた方がいらっしゃるかと思いますが、私がこの概念を知ったのは実は20年ぐらい前なんです。その時はまだアメリカの『ランドスケープ・デザイン』という雑誌の記事でした。

忘れられない風景

最近、彼の『トポフィリア』という題の本が翻訳されました。その序文に、彼の死の谷の経験で感動した話がかかれていました。死の谷は、私にとっても風景の原点だと感じた、偶然にも同じ体験を持っています。イーファー・トゥアンさんの書を読んでいて、いつも感動するのは、まさに同じような経験をしているからだと思ったのです。私になぜその「死の谷」で感動したかといいますと、そこはまったく緑がなく、無風なところ。そういう場所である夜、寝袋で寝ていたんですが、目が覚めたら素晴らしい朝の光がサーッと地上を照らしはじめた。そこは「死の谷」と言われるぐらいですから、砂漠です。朝日を受けると、石一つがひとつキラキラ5色に光りはじめました。その時の感動は忘れられないものとなったのです。

それで何が言いたいかというと、つまり私たちのように「場」をつくる人間は、何かを考える時のキーワードとして、さきほどお話しした「ネオフィリア」、つまり常に新しいものを考えて

いかなければいけないということと「トポフィリア」、つまりそこにしかない「場」を創造することを考えています。

もう一つ私が自分の場づくりのキーワードとしていますが、これは私の造語なんですが、「コスモフィリア」。そこに行くことで、何か自分の存在を考え、宇宙との関係性を感じるような、そういう場所をつくっていきたい。街の中でそういうコスモフィリアを感じさせる空間に出会ったときに、その街は絶対忘れられない存在になるんじゃないかなという気がします。

ランドスケープという仕事

私たちの仕事というのは、そういう都市の中の空隙、ほんの小さな場所をどうやって魅力的にするか。人がそこで何か考えて、立ち止まってもらえるような、そんな場所をつくるのが、私たちの仕事の一つの使命だと思っています。今日は、そういう自分のやったランドスケープの事例の一部をご紹介しながら、ビジュアルにお話ししていきたいと思っています。

1935年でしたか、ブルーノ・タウトが桂離宮に行った時の話ですが、その時彼は53歳のお誕生日だったらしいんですけども、日本に着いてまっすぐ車で桂離宮に行ったそうなんです。そして桂離宮を初めて見てとても感動して、日本のことを「目に美しい国」と言ったそうです。にも関わらず、3年後、東京に来てそのカオスの景を見て、「何て汚い街だろう」と落胆されて帰っていかれたという話があります。そういうことを考えると、私たちには本当に美しいものをつくれる力があるにもかかわらず、街の景に関しては、確かにやれていないということがわかります。それをこれからの100年でやって

いかななくてはいけないと思います。

(以下、スライド上映とともに)

デスパレーの波紋は、風の足跡がこの美しいパターンとなるわけです。皆さん、デスパレーには夏は行かないでください。夏は気温が摂氏40度以上になるんです。それはそれはものすごい暑さです。さきほど、私が寝袋一つで寝たといったのは冬だったんです。一昨年の夏にまた行ったのですが、「おまえはバカか。こんな真夏にデスパレーに行くのはドイツ人と日本人ぐらいしかいないと」と言われました。しかしそこで、この全く何もない風景の原点みたいなものが見えたんです。

これはスミソンという環境アーティストが海上に岩を集めて作った環境アートです。風景を人の手によって変換することがアートになるランドアートです。

ここで、ランドスケープとランドアートの違いを少しお話ししたいと思います。私は、ランドスケープもランドアートも、宇宙に対して何かのメッセージを表現するものだと思っています。ランドスケープというのは、天と地を結ぶものであると考えています。ランドアートもおそらくそうだと思うんです。しかし、この2つにはとても大きな違いが一つあります。

例えばこれはワルター・デ・マリアの作品ですが、彼はアメリカの大平原に400本のポールを立てて、そのすぐ近くの小屋で人を待たせます。待たせて、雷がポールに落ちるこの瞬間の美を待つんです。しかしこの瞬間の写真は撮ってはいけないんです。その写真は写真の専門家から買ってくださいといって。これが芸術であると。それを見るためのしつらえのアメニティという

ものはないんです。ランドアートにアメニティは必要ない。ところがランドスケープは違うんです。これを見させるために、どういうしつらえのアメニティをつくっていったらいいか。このところへどういう設えをしていったらいいか、ということを一生涯懸命に考えるんです。これが、とても大きな違いではないかと私は思っています。

これはご存じのクリストの作品です。何の変哲もない風景を一枚の布が変換した。マリカウソンの丘陵に白い布を海まで立てていった環境アートです。これは参加性も含めた一つのアートとして彼はやっていっています。いろいろなランドアートが'60年代からアメリカの広大な大地をキャンパスに展開していきました。この場合にもいわゆるアメニティはないのです。

これは「時間軸」をテーマにしたランドアートです。ある一定の時期になると、光がスポットに入ってきます。人が立っているのが見えますが、これは非常に広大なランドアートです。この大地の中で時間の軸を感じさせるというものです。

「水の浄化の流れ」といわれるこの噴水は、水の流れを水の流れるとおりに彫刻家につくらせたものです。「水は流れることによって浄化する」ことを実践したものです。まさにサイエンスとアートの間にあるようなものです。ここはストックホルム郊外にあるシュタイナーの弟子の一人の学校です。その紹介が坂根巖夫氏の本にあったので、行ってきました。本にはスウェーデンのストックホルムの郊外であるとしか書いてなくて。それでも、2時間半ぐらい車で走ったところにシュタイナースクールというのがありました。これは、そのスクールの裏の何の変哲もない湖のほとりに、ひっそりとありまし

た。しかもよく見てみると、下には泡ができていて何だか水が汚いんです(笑)。考え方としては多分、いいと思うんですが。そういうアートとサイエンスの狭間という部分に、魅力を感じるものが多々あります。

もう一つ、「デザインされていないデザインの美しさ」という意味で「ノンデザイン」。これを最近、片木篤さんが「テクノスケープ」という言葉を使っていますけれども、そういう時代の最高のテクノロジー、そのものの美しさ。「風」を利用するテクノロジーが形になっている美しさ、というものがあります。

これはカリフォルニアの畑を上から撮ったものです。この型はトラクターのあとがパターンとなって美しい。これは全くデザインされているわけじゃないんです。この写真家、実はランドスケープアーキテクトなんですけれども、上空からこの部分を切り取ることによって、これをアートに高めているんです。そういった全くデザインされていない美しさというものも多々あります。

それと全く反対に、きちっとデザインされていて、しかもそれがピシッとその場に合っているもの。例えばデルエルバハリの神殿のすごさ、美しさというのは、この場所にぴったり合っていて、ここの場所ではありえない。ここの場のスピリットをきちっととらまえてつくっているというものだと思います。だからこそ、ジェネレーションからジェネレーションへと、何千年と継承されていくような景がつかれる。

これも何の変哲もないローマの郊外にできた一つの小宇宙で、ローマの最後の賢帝であったハドリアヌス帝の別荘都市といわれている小宇宙です。彼は最後の人生を、この中で昔の思い出

にひたって過ごしたと云われています。ここは、彼の過去の旅の世界がメタファーされて隠蔽された小宇宙です。これがその中にある思索の場で「海の劇場」というところです。この中に籠もって思索したのだというふうにも言われています。

そこから離れたすぐ近くの「ヴィラ・デステ」というところは、水を徹底して使いながら、水のおもしろさをテーマにしてつくった庭園です。水というのは実に感応しやすい性質ですので、庭園の中では常に主役を務めてきたものです。様々なテーマで水の物語性を空間装置として人々に水の世界を楽しませるといったものです。コモ湖のほとりの「ヴィラデステ」というホテルにお泊まりになった方もいらっしゃるかと思いますが、「ホテルヴィラデステ」はヴィラ・デステを模したものです。ランドスケープの場合は、メンテナンスが重要になります。ホテルとしてメンテをきちっとしてありますので、模した庭の方がきれいに植物は管理されていますが、オリジナルの迫力には欠けます。オリジナルの美しさも、時間軸というものにどうやって対応していくかということがまさに重要になっているようです。

これは何の変哲もない一つの島だったのを領主が名所に変えたマジョーレ湖の中の1つの島「イゾラベーラ」です。イタリア人の観光のメッカです。この湖に浮かぶ言葉通り「美しい島」はこの場所性を生かし、ここにふさわしいコンセプトで見事に空間化し、名所となっている訳です。

これは皆さんよくご存じのヴェルサイユ宮殿の庭園の作者、ルノートルの最初の作で、ル・ヴィコンテの庭園です。やはりオリジナリティの高いものというのは、非常に美しく、これは彼

の代表作のヴェルサイユよりも次元が高いと私には思えるのです。次にヴェルサイユの庭園ですが、水の祭典で使用した水の量が当時のパリ全市の水道水と同じぐらいの量であったという権力の象徴としての庭園です。一方、ヴェルサイユの中には「アモ」という村の風景が作られています。これはマリー・アントワネットが、農家の生活をしたいという、非日常的なものに対する願望によって作られたものです。しかし彼女にとってはないものに対する憧れにすぎず、非日常性を演出していたといえます。

これはパリのビュッテショーモンという公園です。19世紀の中頃、オスマンがパリをどんどん再開発していった中で、オスマンの片腕でランドスケープアーキテクトが力量を発揮して作ったもので、もともとは岩の石切り場だったところです。パリっ子には実によく使われているところです。英国の風景式庭園の様式で作られています。敷地は大きくないのに人がとても多い。パリ市民の憩いの場の一つです。緑が時間の経過とともに素晴らしくなっていることもこの魅力の一つです。

ランドスケープアーキテクトの職域

次にアメリカに移りましょう。ランドスケープアーキテクトという職業は、実はこのセントラルパークから始まっていると云えます。1958年に社会改革者であり、植物に精通していたオルムステッドという人が、建築家と組んで、このセントラルパークのコンペティションで1位になり、この公園を創った後ここを管理することになりました。そして自分自身をランドスケープアーキテクトと名乗り、社会のための場を創る仕事の領域を「ランドスケープアーキテクチャー」と名付けました。彼が何かに手を出すご

とにランドスケープアーキテクチャーという職域は、どんどん広がっていきました。それだけ社会的影響力を作っていた人でした。

これはセントラルパークの 1930 年の姿ですけども、すでにまわりの高層建築がぎっしり建てられ、このオープンスペースが貴重な存在として見えています。セントラルパークで、建築家のヴォーと組んで、彼はサーキュレーションということの一つのテーマとして、人と車、つまり歩車道分離というのを初めてやったんです。そういう中で彼は、1893 年のシカゴ万国博覧会の敷地計画をバンナムと組んでやりました。郊外の方譲住宅地の開発も手がけました。このときの住宅地の作り方がいわゆるアメリカの郊外型住宅のプロトタイプとなっています。これも 140 年たっている彼の設計した住宅地の一つですが、140 年たつとそう大した住宅地ではないのにもかかわらず、これだけ美しい景観になっている。時間軸というものが非常に重要であるということです。オルムステッドは国立公園運動にも参画して、ヨセミテ公園を残したのも彼の力です。そういう時代から、ランドスケープが社会的な市民権を得るまでに、そんなに時間はかからなかった訳です。1900 年代初頭にはハーバード大学にランドスケープアーキテクチャーという学科が出来ていて 1907 年の都市計画学科より前にあったことになります。かくして時代の要求に応じて、ランドスケープアーキテクチャーの領域は広がっていきました。1960 年代には空洞化した都市の中心街区を活性化する必要が生じ、アーバンデザインにランドスケープが入っていきます。これはその代表となる例ですが、シェラネバダの水を空洞化した都市の中に入れようとしたローレンスハルプリンがポートランドで創った広場です。彼は私の恩師でもあるのですが、この「参加する水」と

いうのを最初に創った。30 年たった今では、もうこのスタイルは広くゆきわたっていますけれども、当時これができたときは、画期的な水の扱い方でした。

これはすぐ近くにある、同じように「参加する水」。これが最初にできたとき、本人自身も本当にこれがいいのかという不安があったらしく、ヘリコプターで見て回った新聞記者が「ものすごくいいものができた」といったのを聞いて、初めて安心したというようなエピソードがあります。

都市の中の空隙を、どうアメニティのある空間にするかということは、いろいろな人がいるなところでやっています。これは、チャールスムーアが 1973 年につくった、ニューオーリンズの、イタリアの移民たちがたくさん住んでいる街区にある公園です。これはイタリアという土地の記憶をデザインとして表現したものです。ところが、これに対して周辺の再開発がうまく進まなかったようで、私がこれを撮った時には頹廃している感じでした。この写真を撮っていると道行く人が「教会の跡なのか」というふうに聞いていたくらいですから、きっと人々はこれを使っていなかったのだと思います。デザインとしては、非常によかったと思うんです。当時のポストモダニズムのプラザとして非常に評判を得たものです。ただ時間軸に対応できていなかったのだと思います。

都市の中の空隙をいろいろな人が広場として再生します。これは彫刻家のイサム・ノグチのつくった広場です。彫刻の展示場のように思えます。

これは L・ハルプリンがシーランチというところでワークショップをやったときのものです。

たまたま私はこの 1978 年のワークショップに
参画するチャンスを得たんです。ここで4日間
完全にこもって、自然との共生をテーマにワー
クショップを行いました。これはそこに参画し
たイギリス人の社会学者のもですが、この人
はこの海岸にあるもので大地の中に自分の空間
をつくりました。「自分の家」の表現です。い
ろいろな形で大自然と自分がどうやって共生し
ていくかというテーマで個性的な表現がなされ
ました。他にも、あなたの死に場所を見つけな
さいとか、いろいろな命題が出るんです。そん
な中で、人と自然、人と街というものがどうあ
るべきかというのを体得させられるという経験
でした。大自然と自分自身を結びつけながら場
をつくっていくことの訓練の中で、目の上のう
ろこが取れたような感じがしました。

「アート」と「テクニク」というものをうまく
結びつけた人の中に、バラガンという人がい
ます。彼は建築家であり、エンジニアであり、
アーティストなのですが、彼のスケールという
のは非常におもしろい。どうしてこんなスケ
ールでものをつくるのだろうかと思議に思っ
ていましたら、実は、彼はすごい馬好きだった
んです。そのためか彼は、馬のスケールで物事
をみていたんだということが、最近わかって非常
に感動したんです。これは馬の水を飲む桶だ
ったんです。こんなに美しい桶で水を飲む馬。街
の中の一つの場ですけれども、その中に、本当
にここにしかつくれないものを美しく彼は創っ
ている。

これは今年の6月にできあがったワシントンに
あるルーズベルト大統領の記念公園です。これ
は1975年のコンペで、L・ハルプリンが優勝し
て、それが25年たった今年の6月ようやくオ
ープンしたんです。その時、彼は「場のモニユ
メンタリティ」を主張し、それが受け入れられ

た。ルーズベルト大統領の業績を公園を歩くこ
とによって、人々が感じていくという場所自身
がモニュメントであることを表現しています。
出来上がるまでの25年間に、普通だったら設計
者が変わったりするかと思うのですが、実は4
回ぐらい実施設計しましたと彼は言っていまし
た。そんなふうに時間をかけてデザインを練っ
て、しかもそれまでに25年経ってしまうと、も
う新しくはない訳ですが、ただ一つの記念碑で
すから、やっとアメリカにお金ができて出来上
がったというわけです。

では、ランドスケープの手法はどういうものか
をご紹介します。この例はシカゴから遠く離れ
ていて、デトロイトからも1時間半はかかる
という結構辺鄙なところ。この街の現況の街
を見ていただいてもわかるように、川が忘れら
れていて、結構汚い水なんです。ここで、どう
やったらこの町を活性化できるかということが
依頼の内容です。この町は水から再生していく
べきであるということワークショップでコン
センサスを作り、川を再生させることで、計画
をたて、実行に移していった訳です。まず中心
を水の公園にし、そこから周辺へと開発してい
く計画です。これは1982年にASLAの最優秀賞
を取りましたが、1990年に行ってみますともう
水は出ていなかった。つまりポンプを使って水
を汲み上げるというのは、もうその時既に経済
的にはとても厳しかったようです。デトロイト
は自動車産業の国ですから、日本から見学者の
団体が見に行くということだけで、向こうとし
ては非常に戸惑いを持ったらしくて電話をし
てもなかなか埒があかなかったんです。そして行
ってみてわかったことは、水が出ていなかった
ということです。その時、水を出してもらった
ところ、5分後には子供たちがドッとやって来
るくらいでしたから、水は希求されていたんで

しょうけれども。「日本の自動車業界の圧迫を受けたんだ」とさんざん言われました。しかしアルキメデスの原理を使って汲み上げていた水は何とか無事だったのです。これは省エネで設計することの必要性が時間軸に対応する条件ということを知られます。

もう一つの例をご紹介します。この街の一角にモールをつくるという話がありました。すぐ近くに川があるのに、敷地に立つと全然川の感覚を持たない。ここはむしろモールを作るのではなく、川をつくってしまったらどうかということで計画をたてました。模型を作って説得し実現していきます。完成すると、水の流れと広場には周囲の人々が集まって来ました。

100 ヒルと云われる千葉の開発は、実はやりたくなかったものの一つですが、結局かんでしまったのです。私は何も日本にビバリーヒルをつくる必要はないと随分ゴネて、アメリカ人の建築家とランドスケープアーキテクトとプランナーを紹介したんですけれども、何しろ土地が日本なものですから、最終的にはどうしてもということで引き受けました。通常こういうふうな場をつくる時には、まず全体のプランを考えながら、少しずつ詳細へと入っていくわけです。これは基本設計までやっていますが、実施設計まではできなかつたのです。開発側の本音としてはアイデアをもらいたいといったところだったと思います。しかし私共の仕事というのは、最後の実施までをし、しかも現場を監視しないと本当の意味でつくれたとは思わないんです。これはその一つの例です。

次に玉川高島屋のショッピングセンターの20周年の改装をご紹介します。建築家の彦坂裕氏がプロデューサーでした。3Fの屋上は何をつくっても上手くいかなくて放置されていたのです。

可能性のある場所をもったいないじゃないですか、といて、ここに場を作らせてもらうのを説得するのに、結局6カ月ぐらいかかりました。この「百頭噴水」ができた時は、子供たちがワーツと入っていったんです。ここには今でも、カップルが夜になるとよく来るというのを聞いています。人がアメニティというものを感じて、何かそこに行きたいなと思わせるような場所を作っていく。作って結果が出て、ようやくランドスケープという仕事を理解していただけたようです。コンセプトを何にしようかと考えた時、玉川高島屋は多摩川から近くにあるにもかかわらず、全然水というものを感じないので、これはやっぱり貝とか魚とかをアイコンとして水を感じるようなもので全体をつくっていこうということになりました。完全にリゾート感覚でお買い物ができるという装置に変えていったんです。街づくりの手法をインテリアに取り入れて、空間構成をしてあります。この回廊のずっと先には一つのランドマークとして水の装置があるんですが、本来ここは高級商品を置く場所で高いテナント料の取れるところだったのです。そこにあって水を持っていくことは彼等の常識からはずれていたのです。ここに関しても3カ月ぐら説得にかかったと思います。

実は長谷川さんもいらしたこの清水建設のヘッドクォーターのランドスケープも私がやらせていただきました。これをつくる時も、上の方々とやりとりで担当者がとても苦労したという話を聞いています。最初はランドスケープで何をつくる気だというふうに言われたりもしたのですが、それでも、あの時代にランドスケープを起用していただいたというのは、やっぱりさすがだなと思うんです。ここも水がありながら水を感じられない場なので、水を敷地内に取り込んでしまう計画にしました。その中心がこの

「水のラビリンス」という光、音、水の装置です。回廊に囲まれた水のラビリンス。この回廊の柱には逆パスがかかっています。何千人もの建築に携わる人々の昼休みの時間に何か非日常的な空間体験をしてもらいたいと願って作りました。最後の頃に、担当の方が「もうこんなつくっても大変だからやめよう」と云っていた時でも、今度は現場の監督が「いや、何とかこれをつくろう」というふうにおっしゃってくださったと聞いています。

次の例は広島の新空港の代替案を依頼されたものです。それまで地方の空港というのはいつ見てもつまらないものばかりでしたので、つまらないお豆腐のような空港ではないものをつくりたかったんです。我々は、空港というのは、何もなかったところに2500mとか3000mの大きい滑走路をつくるということなので、大地に描く20世紀のメッセージの一つだと考えました。それ自身が上から見たときに美しいランドアートであるべきではないかというのが、私どもの考え方です。出来上がった広島空港は結局、真四角につくられているそうです。実施設計をまだしているときランドスケープでもう少しおもしろく考えられないかという依頼を受けました。我々はそのある湖を中心に、この空港を「空港庭園都市」と名付け滞在型のコンベンション都市を計画しました。ここに小さな湖があるんですけれども、これを中心にして、テーマ性のある庭園をつくらしたらどうだろうかという提案でした。その後6カ月ぐらいたって、これはいい考え方だということで県が着手した途端にバブルの崩壊でまた元の木阿弥の空港が出来上がった訳です。

次は日立の駅前の、日立科学館の屋上の子供のための遊び場です。一番空に近いので、「セレストリアル・ガーデン」という名前をつけまし

た。天空と自分との関係性というようなものをいろいろな形で子供が学べるようにしたいと思いました。例えば銀河鉄道であるとか、恐竜のトレリスであるとか、いろいろな宇宙との関係性を感知するような空間の舞台を用意したのです。子供達が宇宙とのつながりの中で自分を発見し、未来に夢を持ってくれることを願って創ってあります。

次に、長岡の小さな都市の空隙を小さな公園に変えた例です。3000平米ぐらいと小さかったんですけれども、ここに柿川という川がありまして、その柿川と一体化することによって、全体を一つの空間としてつくったらどうかということをご提案しました。実はこれは戦後50周年記念の公園でした。この柿川でも1460数名の方が亡くなったということでした。それで柿川に一つの神聖なる舞台をつかって、その舞台を中心に手前側に600席の観覧席をつくり、水の劇場としました。長岡ですっと親しまれてきた平和の像を奥の方の中心に据えました。もともとはいろいろな条件が厳しく、しかし何しろ3000平米なものですから。そこに「600人収容する場をつくりなさい」ということが出てきて、もし隣接する川を使えないなら「もうやめる」と云ってやめたのですが、市長さんが「今どきやめるとい人にはやってもらったほうがいいのではないか」と云って。それで、なぜかやるはめになりました(笑)。最後には、県の方が理解を示して下さって、こちら側の川をいじるということにも理解をして下さいました。このようなことは、とても珍しいことだそうです。長岡というところは役人が実に協力的です。それでこれは実際に出来たところです。この設計に当たっては、いろいろな思いが込められていまして、実は私も戦争というのが自分の小さいときの原風景としてあるんですね。そういう私が、なぜ

アメリカに行ったかということもありますし、なぜこの公園を受けるはめになったかということなど、いろいろなことを考えさせられたんです。それで、本当にここに来て、人が平和というものを考え、自分自身を考えてもらいたいということをどう空間化するかに力を注ぎました。水は、柿川の水を1回上に上げて上から出しました。あれは「つくばい」です。いわゆる茶庭にあるつくばいから発想しています。「蹲踞の泉水」という名前をつけました。この水で手を清めることで心を清めてもらいたい、そういう思いがあります。これを24のツールが囲んでいます。ツールの中心に小さい点がありますが、その点は、昼の間は太陽の光を集めて、夜になりますとそれが青い光になって見えます。そこから何か宇宙とのつながりを自分で感じてもらいたいというふうに思っています。本当はこの石の舞台を神聖な神籬空間にしたかったんですけれども、神籬（ひもろぎ）という言葉は使ってはいけないということで、抹殺されたんです。どういう訳かわからないんですけれども、宗教くさいとかと、いろいろ言われました。

この一連の写真は藤塚光政さんです。1460 数人の方の御霊を 1460 本のファイバーグラスに託しまして、この 14 本のフォーリーから平和の像に向かって、細い青い光が出ています。ここで光と音とのオープニングセレモニーを市長さんが開いて下さり、800 人が集まりました。この小さな都市の中の空隙が「場のモニュメント」として世界に向けて平和への祈りを発信したのです。

さきほど「テクノスケープ」と「インフラスケープ」という言葉についてお話しましたが、今ところどころにこういう何だか意味不明に建っている建物を、お気づきになった方もいらっしゃるかと思います。実はその下には海底トンネ

ルの道路が通ってしまっていて、そこに空気を入れたり出したりする吸排気口です。こういうものは今までずっと建築家によってつくられていたのですが、今度東京都のほうから、景観に影響を与えるんだからランドスケープの人がやるかどうかという話が来ました。こういうことは珍しいことなのです。

東京湾のお台場は江戸時代の記憶です。この土地の記憶を表現するようなものであるべきで、しかもインフラスケープとして表現されるべきではないかということを考えました。実は既に大きさも決まっていたんです。それに段々をつけまして、排気塔がそのまま見えるような形にして設計をしました。これは CG のシミュレーションです。実は今、これの実設計に入っているようですが、何か段が1段低くなっているとか、いろいろなことがあるようです。私達は計画をしたにもかかわらず、次の段階は他の事務所がやっています。こういうものを最後まで面倒が見れないというのは、設計者としては非常に苦しいところなのですけれども、もし私が意図したようにできていましたら、瓦を使って新しい東京湾の記憶としての景となると考えています。

これまでランドスケープというのは、何か庭をつくるのかなと思っていらした方もあるかと思うのですが、このようにさまざまな場をつくっていく幅広い職域なのです。場を作るにあたって私達の目標はその場に来られた人々に何かを感じていただき、自己の存在そのものを問うような場づくりをしたく思っております。「ランドスケープは天と地を結ぶ学問」という先人の言を実行しています。

するなどというアイデアは全く出てなかったそうです。反対運動もあることにはあったけれども、汚い川に瓦礫を放り込んで造成してそこに建物を建てれば一石二鳥、三鳥だというのが当時の考えだったようです。水がなくなれば柳もなくなって。その結果が今の状態です。現在銀座で住民登録している人はどんどん少なくなって、いまや3000人をきってききましたから、やはり土地というのは、そこに住んでその土地を愛する人がいないとダメですね。

上山 / しかしさきほど石丸さんがおっしゃっていましたが自動車の問題を解決できれば、その道を水にすることができますよね。

石丸 / そうですね。結局水を埋めて道路を得たというのが、銀座の戦後の再開発ですから。しかしこれはある意味では、銀座を広域化したわけで、昭和30年代の土地計画論でいけばいわば成功例なんです。実際に銀座の地域は経済的な恩恵を受けたわけですが、逆にメンタリティーから言えばどんどん砂漠化してきたんです。水も緑もいまでは海を臨んだ状態でしかなく、無理やり選んだ絵のような存在です。とにかく根本的に水路が絶たれていますから、何か発想を変えないと。そうでなければやはり泉や噴水といったあたりでお茶を濁すしかない。それよりも東京というところは、飲む水や、流す水のほうが日常生活上、心配ですね。今年は台風がきたのでよかったけれども、いつ干上がるかわからないような条件下にあって。もし雨がなかったらどうしようかと年中噴水を止めたり、わざわざ「循環水を使っています」と、要するに汚い水だとはっきり言わなければいけない。だから、もっと雨水とかをうまく利用するような仕掛けを作って、それを1つのショーに仕立て上げるなどすれば。

島田 / 前も一度話しましたが、今の銀座の子供のことを考えますと、本当にこんなことでいいのかなと寂しい思いがしますね。何かどんどん追い立てられていくようで、この辺りの道路や建物、ビルもあつという間に変わっていく。それはそれはすごいスピードで。しかしこれは今ある繁栄を手に入れた代償であって、もうどうにも取り戻せない。では、その何か象徴的なものを再生するかというと、それにはやはりあるレベルのものでなくては、先ほどの、まさに感激が得られるものにはならない。

そして今の銀座は土地のストックという点でももう異常ですから。道路などの公共の場所を使うとしても、その時には適応性なり法律なり民意の合意として、本当にドラスティックにやるのか、やらないのかという大議論をやり、特例化して思いきりやるしか残された手はないのではないかと思いますね。そうでなければもう遷都するしかない。歴史的な流れでいうと、もうダメになる都市はどんどん捨てて、新しく変わっていくという、究極のパターン。そういう究極のところに私は来ていると思いますね。

銀座らしい「たまり」

船曳 / 私はそこまで悲観的には考えていません。昔から銀座と呼ばれてきたところの面積的な広がり、東京に住む人間の交通手段が戦前に比べてはるかに大量になり移動する時間が短縮されたことを考えると、ついこの間までは銀座の隣にあったお堀が佃島のほうに行ってしまった、ということなのであって、東京の街全体からすれば拡大したということではないかと思うんです。銀座のエリアだけで言えば、確かに水は遠くなったけれども、向こうのほうにはあるわけで。決して水がなくなったというこ

とではないわけですね。

ですから今は、ここに自然の水をもう1回呼び戻そうという盛り上がりを考えるよりは、もう少し人工的になってしまった銀座の中にどう21世紀の街のたまりをつくるのか、ということを考えてほうがいいのではないかなと思うんです。その中で、多少は噴水のように人がたまるころを作ってそこに水の仕掛けを作っていくということでも決してそれほど後ろ向きなことではないかなと思うんです。もちろん昔の銀座を知る人にとっては寂しい状況にはかわらないかもしれませんが、とにかく銀座の並木を歩いていると、人がたまるような、休めるようなところがないですね。

別にここに若い人を集めたいと思っているわけではないんですけども、それでも今流行っているところというのはオープンカフェとか1階の路面の辺りで人がたまるような仕掛けがあるようなところですね。ですから銀座も4丁目のグランドレベルで人がたまる所をつくって、そこには水の仕掛けがある、ということでもいいのではないのでしょうか。そんなに大きな面積でなくてもいいのです。おそらく銀座のスケールから言えば、人が歩いて行ってたまる距離のところに点在すると何かすごく生きてくるかなと思うんです。

それから私は、水路が道路になったということ考えた場合、ある意味で言えば逆にこの銀座の道路を水路に見立てることもできるかなと思うんです。そうした時、その水路こそが銀座の空隙だとも思えるわけで、この空隙から見える景色といえば、こちらのほうに佃島の新しいリバーシティがあり、あちらのほうには汐留に新しい予算でできるという超高層がみえる。そういう風景としての建物が銀座を越えたところに見え

始めるわけです。これが先ほど上山先生がおっしゃっていた空間の中の小空間として、町の中に四角く一つ一つの風景をつくっていくということなのではないかなと思うんです。

上山 / 二つ考え方があるかなと思うんです。一つ大きな意味でのランドマークというのは確かにあって、道の軸を富士山の方向を意識したこともその一つです。新しい建物のランドマークは富士山にはなりえないと思います。もう一つはヒューマンスケールのランドマーク的存在、本当に人が歩いて感じられるものがあるはずなんです。重要なのは、後者のほうではないかなと思うんです。それをさきほどお話にあったように、本当に人が「来てよかったな」と感じられる場所を、何か水と絡めてつくっていったら、新たな名所になるのではないかなと思いますね。

かつて、富士の軸は見えなくても軸であった様にこういった心の軸というものは、必ずあるかなと思うんです。そういうものは大切にしていってほしいかなと思いますね。確かに新たなランドマークもあるかもしれませんが、それよりももっと大切にしたいものが何かあるような気がするんです。それはそれできちんとした見えない軸として考えて置かなければいけないかなと思います。

人が感じられるものを

上山 / それからもう1つ、人が何かを触ったり参画することによって何かを感じられるような場所というのをやはり公共の場所で作っていかないとかなければいけないかなと思いますね。ハイデルベルグでも結局、もう観光客は要らない、お金なんて落としてくれなくていいと言って観光バスも入れないんですよ。経済的には自分の首絞め

るようなものなんですけれども。銀座でも大通りのある一角でもいいと思います。そこだけでも車は通さないというぐらいまで覚悟すれば。

島田 / 相当ドラスティックな決断が要ると思いますね。何かを犠牲にして何かを捨てなければならぬのでしょけれど、現実にはそこで常に負けてしまって流されているわけで、こういう話をするようになったのは本当に最近ですよ。

石丸 / 話だけなら 30 年前にもあったんです。銀座通りの設計自体は歩く人のための設計になっているんです。ガードレールも作らなかつたし。それでいっそのこと、道路ではないということにしてしまおうという話が建設省から出たんです。要するにもう国道としての価値はなくなっているわけですから遊ばしてしまってもいい、とある建設省の高官が言って。それで、その時は公園にしてしまおうと考えたんです。そうなるともう車は入れなくなる。もともとそういう設計になっているので、いつでもそういう風になれるという発想があったんですね。

ところがまず警察が、道路でなくなると取締の方法がなくなると反対してきて。そして建設省も後から、道路でなくなると自分たちの金も使えなくなって、電気もつかない、植木の手入れもできなくなると言い出してきて。建設省というのは、車が通る道でない道路ではないと思っているんですね。そうなる、我々にしても何から何まで自分たちで面倒みれるわけでもなく。結局、建設省の現場から「おたくらの面倒は見れないんだけど」ということで終わってしまった。これが 30 年前の日本の現実だったんです。

40 年に一度のリニューアル期を迎えて

三枝 / 今、銀座通りに面しているビルは、昭和 30 年代の後半から 40 年代の前半から半ばにかけて建てられたものが多いんです。それで現在、ちょうど読売広告社さんのように立て直す計画があるところが多くなっていて。物理的にはまだ寿命ではなくても、設備が悪くなったとか最近の OA 化に合わないということから建て直すと思っている場合があるようです。ところが、資生堂パーラーさんも既に始まっていますが、みなさんまたそれぞれに良いと思う建物を建ててしまう。こういうのは 40 年に一度くらいしかないチャンスなので、本当は何か銀座なりの統一したコンセプトがあれば、それに協力して建物を立て替えるということもあると思うんですが、それができない。ですからこのままだと、また個々にバラバラのビルが建ってしまって、今とはまた違った感じにはなるでしょうけれど、統一されたようなものにはならないでしょうね。そうすると次のチャンスはまた 40 年先くらいになってしまうと思うんです。

私が考えているのは、ただ共同ビルにして容積率が上がればいいのか、上が使えるようになればいいといったものではなく、もっと人間が歩けるような場所としての生かした、一種の統一性に基づいた基準というものができればいいと思うのですが。まだ今の建築基準法では、建て替えても容積が増えない、というよりむしろ消防法の問題や駐車場の部分などでも厳しくなっているために実質的に使用できる面積が減ってしまうので、本当はやりたくてしょうがなくても、皆さんそろばん弾いても合わないからやらないんです。その辺りが緩和されるとパッと建て替えたいという人は多いですよ。

島田 / 私もこの間、ある銀座の画廊のリニュー

アルをお手伝いしましたが、これが昭和 32 年のビルでもう梁に手が届いてハンチの部分で頭をぶつけるくらいの、とてもひどいところだったのですが、それを逆手にとってやりましたら、結構おもしろくなってしまっ。そこは画廊だったからそういうこともできたわけですけども。結局そこも建て替えたくても、さきほどの専有面積の関係などで、いまはもう我慢しているしかないみたいです。

石丸 / 少し典型的な例をいえば、地下がある場合、1400 % だったところを 800 % にしなければいけないので、600 % は減らさなければいけないんです。ですからもうこうなると死ぬまで立て直せなくなってしま。その時々のおいつきや時勢による高さ制限があっ、そのかわり地下はいくらでもよかったよう。今度、三越さんが 1 年半かけて外装をし直すそうですが、本当はこれも一回建て直したほうが早かったそう。しかし地震が来たとき外装の部分が危ないということで、とりあえず外装だけをやり直すそう。日本の場合、とにかく法律で一律に話が進みますから銀座だけのケースは考えようがないよう。本来、建物や何かの容積の問題というのは各地方自治体ごとでそれぞれ事情に沿った権限を委譲すべきだと思うのですが、山の中も都心の道路も画一的にガードレールがなければいけないというような発想なんですよ。

画一的な発想による限界

石丸 / 横浜ではある種、町並みに関するガイドラインを作りとてもよくなりましたが、その背景にはやはり横浜の文化性、精神性があるからだと思います。東京では、まず利益が先にたってしまう。

前田 / 横浜の都市計画で有名な田村明さんから聞いた話では、東京が拡大する中で、横浜はこのまま放っておくと東京の一部になってしまう恐れがある。意識的に横浜のアイデンティティをつくらなければいけないという強い思いがあった。それが横浜の都市計画の重要なポイントになったよう。その点、東京はそういった必要がなかったということでしょうか。

工学部が作った日本の都市

前田 / 上山先生のお話を伺っていて、改めて確認したことなんです。日本では何でもエンジニアリング（工学）で物事を考える傾向があっ、都市は土木工学、建築は建築工学、その分野に関わる法律もその論理でできているような気がします。それに対して、先ほども少しお話がありました、パリの都市計画というのは造園家のオースマンのによるものなんです。ヨーロッパでは造園家が都市計画をすることが多かったの、自ずと、生態系や土地土地の自然を尊重するような計画になったと思います。それに対して日本では、造園というものがあまり高い地位にない。例えば、東大でも造園専攻というのは農学部林学科の一部にあり、造園学科という独立したものは残念ながらない。その上、ヨーロッパの大学で建築科というのはほとんどが芸術学部にあるよう。日本では多くの場合工学部にあります。明治の初期頃から「建築にデザインなんて必要じゃない、とにかく地震に負けないものをつくればいいんだ」という風潮ができてしまっ、それが未だに直らないんです。そんなわけで、日本は都市づくりにおいて西洋から工学的な面は大いに取り入れたけれども、自然や芸術文化的なものの扱い方についてはあまり重視してこなかった。

そのような反省に立って銀座を見てみると、銀座の中には歴史的・自然的な地霊というものがほとんどなくなってしまいましたね。堀も埋めてしまった。文化性に注目すると、もともと銀座は下町と山の手の間の中にあり、それぞれの文化が重なり合った良いものがたくさんあったはずなのですが、それらも顧みられず、多くのものをなくしてしまいましたね。それに変わる何かをということで、景観論という代償景観をつくれなかつたとなると、地価が高いのでミニチュアのようなもので代償せざるを得ないんですね。さきほどのお話にあった、オープンカフェみたいなものもその一つでしょうか。例えば、インセンティブ・ゾーニング（何か街にとって良いことをすると容積率のボーナスをあげること）というものの考え方がありますがけれど、一般の歩行者に見えるところに池をつくるとか、オープンカフェをつくれれば、容積率を200%以上乗せてもいいといった方法もあるのではないかと思います。

自然を感じる仕組み作り

上山 / さきほど前田さんがミニヤチャーで代償、景観とおっしゃっていましたが、創造力をたくましくすれば絶対にミニヤチャーではないものでできると思うんです。ミニヤチャーというところどうも本物ではないことになってしまうと思うのですが。21世紀に生まれてきた何か新しい、しかも土地の記憶に基づいたものというのは、絶対に創って行くべきであり、それは我々の世代がしなくてはならないことだと思います。

前田 / 街に自然を取り戻すには二つの方法があるでしょう。一つは創造力で何とかなるもの、

もう一つは本当の意味での自然をとり戻すことです。私は両方で頑張らなくてはいけないと思うんです。例えば、仮に銀座の建物の屋上すべてに木を植えたとしますね、そうすると全体としてそれらは本当に大気を変えていくわけです。そうするとミニチュアではなくなるんです。そのように本当の意味で自然を取り戻すという仕掛けと、言葉の使い方は少し違うかもしれませんが、創造力を違しくするミニチュア的なものの両方を頑張らないといけないと思うんです。

自然についてもう少し言わせていただきます。例えば、原宿の表参道のどこがいいのかというと、まずあそこは坂ですよ。それ自体立派な自然であり、そのうえ大きなけやきの並木もある。そして先に行けば広大な明治神宮と代々木公園もある。やはり近くにあのような大きな緑地があると、自然の風が吹いてきていいですよ。上野広小路の商店街も昔はもっと良かったんです。上野公園と不忍の池の自然があって。そこへいくと自然条件では、銀座には坂もない、水もない、近くに緑地もないという三重苦なんです。

島田 / 最近風までなくなってしまいましたね。昔は海から必ず海風が吹いていたんですが。僕はあの有明のところもすべて緑地にしてほしかったと思っていたんです。ランドスケープとしての公園を作って、それは絶対浮上するということ。何も無いということの意味が今だけ大きいかと認識されると思うんですが。都市博のプランの時にそういう意見を言いましたら、もう二度と声はかからなくなりましたけれど（笑）。

大田市場の横に野鳥公園がありますが、あそここのセンター街のところは十何年前からビオトープになっていまして。実に見事です。自然と

というのはここまで本当に蘇生するのかなと思いますね。

前田 / 銀座にどう自然を取り戻すか、ということでは何かコンペをやったら面白いかもしれませんね。

長谷川 / 非常に難しいですけども、さきほど上山先生がいわれたように 100 年というレンジで考えた場合、例えば私のでた小学校の屋上には木が植えてあったのですが、もしそれが 100 年後にも存在していたとすると大木になっているわけですね。屋上に大森林があるということもこれまた不自然な気がするのですが。こういうことは実際に成り立つのかどうか。マンションなどもよく脇に木を植えていますが、それらも 100 年経ったらどうするのか。おそらく途中で切ってしまうわけですね。

上山 / マンションそのものもつかどうかという問題もありますけれどね。例えば緑にしても蔦ならば割と楽にできるんですよ。蔦にもいろいろありましてね、オオイタビといって割と小さく細かい蔦もあるんです。これなんかはずっと這っていきますから。しかし建築を早くためにするといって建築家は嫌いますが。

銀座の位置するところ

前田 / 私はよく、銀座はどの辺りに位置しているのかなと思うことがあるんです。どういうことかといいますと、例えば仮に、北欧からドイツに行って、そこからスイスへ入ってアルプスを越えてイタリアへ、とヨーロッパを南に縦断していったとしますね。その時、景色が変わるというのは当然なんですけれども、北に行くほど看板類など邪魔なものが少なく、景観要素が

絞られている印象ですよ。ミース・ファン・デル・ローエが言った「レス・イズ・モア」、つまり「少ないことは豊かなこと」の世界を感じます。切りつめた少ない要素で豊かさを表現している。それがだんだん南に行くと、景観の中に沢山の要素が入ってきます。スイスでもフランス語圏に行くと、その印象が強まります。しかし、それはそれでまた魅力的で美しい。雑多な要素があっても、風土にあったかたちでそれなりに調和されていけば別に構わないということですね。そうすると日本の風土でいくと、銀座の場合どの辺りに位置しているのだろうか、どのくらい雑多なものだったら許されるのかな、と考えるわけです。

島田 / それに付け加えてもう少し考えた場合、アジアでは、片方にいわゆる西欧型の美意識というものがある。そこに、例えば福岡のようなところのようにまた非常にアジア的なものが渾然としてくる、といったこともありますよね。今の日本では北海道と九州とただただでもかなりの違いがあって。それが東京という所、少なくとも銀座では西欧化していて先兵をしてきたんですが、それでも根の部分はやはりアジアであって。日本の中の日本といった場合、そういった部分はどちらの方に向いているのかなと思いますね。

前田 / 景観を整理するとき、要素を切りつめていけばなんとなくきれいになっていくと思うのですが、本当にそれでいいのかどうかということをもまず考えなければいけなくてはなりません。どの辺りまで多様な景観要素を許すのか、どの辺りのところで調和をねらうのか、ということが問題になるんです。つまり、銀座を急に北歐みたいにしても歓迎されないでしょう。

上山 / それは違うんです。なぜかと言うと、土

地の記憶がそれぞれ違うからです。昔、東京にはいわゆる何々藩、何々藩といった地方の藩のいろいろな文化があったと思うんです。今、私手がけています芝でも、もとの薩摩藩の記憶は全く失われていました。そこを再開発しようとする時にも、それらをもう一度考えてみようといった発想は全くお役所にはないようでした。しかし、今回はデベロッパーの三井さんがそれに気づいたのです。江戸というのは、いろいろな地方の文化が集まってできたところなんだということ、わかっているということが大切で、そういう記憶があったということをもまえて新しいものを創るべきだと思います。そういった意味では、銀座にはいろいろ掘り起こされるものがあると思うんです。画一化されたガイドラインというのはやめたほうがいいと思います。銀座ならではのガイドラインを創るべきです。

* 講演時に使用されたスライドについては
著作権により掲載不可

* * * * *

長谷川 / 本日は「土地の記憶」「銀座の記憶」ということから上山先生にお話をいただきましたが、ここで提案されたものを銀座が取り入れていくにも、ある種の体力というものが重要なのではないかと思いますので、できるだけ早く、まだ銀座に体力があるうちに考えていかなければと思います。

(1997 年 7 月)

「銀座が残すべきもの」



吉見 俊哉

東京大学社会情報研究所 助教授

東京大学教養学部卒。東京大学大学院社会学研究科修了。

在学中より、如月小春らと共に演劇活動に参加。卒業後、東京大学生産技術研究所で1年間建築を学び、大学院へ進学。昭和62年東京大学新聞研究所助手となり、のち助教授となる。平成9年朝日新聞書評委員。著書に『都市のドラマトゥルギー～東京・盛り場の社会史』『博覧会の政治学』などがある。

* * * * *

はじめに

吉見 / 私はこれまで、歴史研究と社会的な研究をちょうど交差させる形で、大衆文化の研究をやってまいりました。特に人が集まったり、あるいは人々が意識を集中させたりする場に、はたらく権力の問題、政治の問題を含めて歴史的に考えよう、ということです。もう少し具体的に言うと、都市に限らず、ある人々が集まる空間の中で文化をめぐる権力とかイデオロギーとか政治とか、あるいはそういった欲望がどういふふう絡まっていくのかという研究です。

そこで最初に書いたのが『都市のドラマトゥルギー』という1987年に出した盛り場の社会史です。これは明治から現代に至るまでの東京の盛り場を取り上げたものです。大きく言うと戦前における浅草と銀座、それから戦後から現代にかけての新宿と渋谷、この四つの盛り場を取り上げて、そこにおける人々の集まり方の変化、それからその集まり方の変化の背景にある

社会史の変化とか、都市化のプロセスの構造的な変化とか、そういうものを明らかにしていく。つまり四つの盛り場を比較しながら、その背景にある社会構造の変化、社会意識の変化をとらえ出していくという作業でした。

その後は、空間的展開、空間論のテーマの流れの中で言いますと、ちょっと都市を外して近代の国民国家の形成の中で、人々が集まる空間がどういふふう組織され、それがネーションの権力と人々の欲望を、その空間がどう媒介していったということをメインに考えてきました。それで具体的に一つまとめたものは92年に出しました『博覧会の政治学』という本です。博覧会というのは、まさにマス・モビライゼーションで、大衆動員、たくさんの人を集めるということです。そして、そこに国家的な権力が強力に入っていく。同時にそこにある社会的な世界文化を演出し、人々に通用させていくことです。同じようなことは運動会とか、それ

から天皇の巡幸とか、それからオリンピックとか、そういうどちらかというとなショナルイベント、ナショナルセレモニーの世界をここ何年かやってきています。それがグローバル化の中でどうなるかというような問題がさらに少しずつ見えてきています。都市論ということで戻ると、自分の著書という形では最近まとめておりませんが、編集をしている友人や知り合いと一緒に編集に関わったものが一つあります。

盛り場とは

ここでなぜ「盛り場」なのかということですが、私自身の中での問題意識として出発点にあったのは、「人が集まる場所」ということです。人が集まる場所から、どういうものが生まれてくるのか。単に「集まる」といっても、「集まり」はいつの時代でも同じように、その時代の意識の変化とか社会構造の変化が、その都市化のプロセスというものに非常に結びついている。そのことを考えると、盛り場というものが社会学研究の一つの重要な対象になり得るのではないかと思ったからです。これは既に地理学とか社会学では、いろんな専門的な研究もありましたし、都市社会学の中でも、磯村英一さんのように、都心機能の研究とか、そういう大都市構造の中での都心機能、そういうものがありますし、あるいは繁華街の研究というものもあります。ただそういうものと、盛り場の研究というのは少し違うと思っています。

「盛り場」とは何かというと、これを一言で言ってしまうと文字どおり「盛る場」です。「盛る」というのは、例えば「盛りのついたネコ」とか、「花の盛り」といった時の盛りと同じで、人々の身体や精神が、ある濃密な状態で、ボル

テージが高くなった状態を指しています。盛り場というのはそういう状態が、ある空間点な限定を受けている場ということです。「盛り場」という概念は、確かに繁華街とか商業地域というものと、概念としては重なりますけれども、しかしそのアプローチとして、例えば人類学の祭りの研究であるとか、あるいは歴史学でいえば巡礼の研究であるとか、あるいは都市反乱とか、儀礼、そういう民族学や人類学、歴史学の研究に連なるアプローチで近・現代の都市を見ると、盛り場というものは少し違った形で見えてきます。これが重要な切り口になり得るのではないかというのがベースにありました。つまり祭りの研究とか、巡礼の研究というのは、装置の問題というのが非常に重要ですが、同時にそこに集まる人々の意識の問題とか、心性の問題、そこに集まる人々の意識や心性がその装置のシステムとどういうふうに絡まりながら構成されて、形作られていくのかという問題がその一つになります。

近代においてそういう問題を考えようとするときには、街を繁華街や商店街と見るのではなくて、まさに盛り場と見ることで、単なる装置系の問題ではなく、むしろ、ある「場」の意識の問題とその意識が構成されている「場」の問題として見る可能性があります。そういったことから私自身も、繁華街の研究でも商店街の研究でもなく、敢えて「盛り場の研究」という言い方をしています。背景としては、フランスの社会史とか人類学の新しい展開としての関連を意識しながらやってきています。

東京の盛り場

ここで銀座を考える前に、まず東京の盛り場を、戦前と戦後に分けて考えてみます。

盛り場といえば、戦前はやはり浅草と銀座というのが圧倒的な代表でしたから、浅草と銀座といった装置を考えます。それから戦後は、新宿と渋谷、原宿という盛り場を採り上げて、これらの盛り場を「意識の場」として人々が集まる装置系として見る。そして人々が集まるその集まり方を構造化し、それを基礎にして、その中において人々の意識が形作られていく、構成されていく場として見ていき、その場のありようを比較していこうというアプローチでやっています。

先に結論的なところを言ってしまうと、1920年代において東京の中で、最も「賑わいの中心」といいますが、よくメディアの中でも話題にされ、語られる盛り場というのが1920年代半ばを境に、浅草から銀座に移っていきます。それ以前は、やはり銀座より浅草の方がはるかに中心点を持っていましたが、1920年代以降になると、浅草以上に銀座が人々の中心にのぼってくる。

このプロセスと、1970年代の半ばを境にしたメディアの影響で、若者たちは一カ所に集中できなくなります。全体としてはもちろん分散的な形態になってきますから、一概には言えないんですけども、その若者たちにとって最も先端都市、最も意識を集めていく吸引力を持っているような盛り場というのが、1960年代までの新宿から、1970年代末以降は渋谷や原宿に移っていきます。

この二つの変化の中には、構造的な同形性があるだろうというふうに読んでいます。つまり、ある意味で、全部同じではないんですけども、浅草と新宿は似た面を持っている。どういふところかという非常にどろどろとしたごった煮的なイメージがあるんですが、1920年代

以前の明治、大正時代の浅草と、それから1950年代から60年代にかけての新宿の間には、そこに集まる人々の集まり方にある種、通底する要素がある。同じように1930年代以降の銀座と、1970年代末以降、80年代以降の渋谷や原宿には、浅草や新宿と対照した場合、銀座や渋谷、原宿の方にある種通底する要素がある。そうすると、戦前と戦後に二回、似たような盛り場の質的な転換というのが起こっている。これはどうしてかという疑問を持ったわけです。

1920年代に、いわゆる大衆娯楽の中心、つまり賑わいの中心が東京では浅草から銀座と徐々に移動していく。それから1970年代を境に、若者文化の装置が新宿から渋谷や原宿に移行していく。この二つの時間的な流れの間には通底する要素があります。こういう二つの同時的な変化が戦前と戦後の両方に起こってくるということを、最終的にどう見ていくかということの説明します。

日本における都市化の構造

まず日本の都市化には二つのフェーズ、つまり局面があります。その一つは、農村から都市にどんどん人口が流入していくことで、その流入していった人々が、都市のどちらかという、裏町的なというか、広い意味での周縁ですけども、やや周縁的なところに住みついていく。それは都市の村人みたいな形で農村や地方から東京にどんどん入ってきた人間が、まず最初に住む。その人たちが集まり、作っていくような盛り場というものから、都市の姿というものができます。

明治の中期から後期、日露戦争の前後から第二次大戦にかけて発展した日本の産業化の中で、

東京には北関東や北陸など、いろんなところから人口が集中してくるわけですが、そうするとその集中した人口が下町一帯、つまり浅草とか下谷、それから本所、深川といったところに集積していきます。その集積した人々の比較的貧しい労働者階級、あるいは丁稚している小僧さんとか、そういう人たちが浅草に遊びに来るわけです。ですから、明治から大正にかけての浅草は、どっちかという江戸っ子の人たちが作った文化というよりは、その人たちのエネルギーによって大きく支えられてきたといえます。新宿の場合も、高度成長期あるいは戦後からずっと、地方から集団就職などで人口が集まってくる。この集まってきた若者たちが新宿にたむろして、それが新宿のエネルギーを支えたわけです。つまり浅草にしても新宿にしても、これらの盛り場が一番エネルギーを持っていた時期というのは、都市への人口流入が非常に激しかった時代とかなり重なります。

それに対して、銀座にしても渋谷、原宿にしても、これらの盛り場が非常に吸引力を強めてくるのはその後の段階といえます。銀座の場合をみても、盛り場が本当に浅草から銀座に移るのは、やはり関東大震災の後の復興期と通じています。つまり帝都、大東京というのが交通機関の上でも空間の上でも整備をしていったわけです。そのプロセスの中で銀座は非常にファッションブルでモダンで、先端的な町というイメージになり、それが実際の人々の身体感覚と日常生活文化が結びついたような形で浸透していきます。そして次第に銀座は浅草以上の賑わいを得ていきます。渋谷、原宿にしても、70年代後半以降というのは、東京への人口集中ということから、むしろ都市空間が消費の面でも居住の面でもかなり具体的に整備されてきた時期です。したがって、都市化の二つの移行期というのは、

一つは農村から都市に、あるいは地方都市から東京に人口が大都市にどんどん集中してくる局面であり、もう一つは、その集中していった人々が都市の中で、居住空間の上でも消費の空間の上でも、いろんな空間とのかかわりの中で、都会人としての意識形態を身につけていったプロセスだといえることがいえます。

盛り場における賑わい

江戸時代の盛り場というのは、両国、浅草、上野、深川、芝といったところが主な盛り場でしたが、特に両国は飛び抜けて賑わっていました。こういう江戸年間の盛り場には、幾つか共通した特徴があります。

東京は武蔵野台地に乘った部分と、それから隅田川の下流のデルタ地帯、そしてちょうど左手をポコンと乗せたような上野台地から、湯島の本郷台地、麴町台地、不忍台地というふうに台地がありました。その五つの盛り場、上野と浅草と両国と芝と深川というこれらの盛り場は、幾つかの系統に分けられますが、これらのついて一つ共通して言えることは、都市の中心にはなく、周縁にあるということです。例えばヨーロッパと比較するのは適当ではないかもしれませんが、ヨーロッパの都市というのは、やっぱりフェアとか市とか一番賑わうところが都市の中心にあるわけです。ところが日本の、少なくとも江戸においては、中心は江戸城ですが人々が集まる賑わいの文化の中心というのは、むしろ都市構造的には周縁部にあったということが言えます。

このことは偶然ではなくて、当たり前と言え当たり前なのですが、どうして周辺だったかといいますと、盛り場というところはもともと門

前町だったわけで、その寺社地的な空間、浅草観音であれ、深川の八幡であれ、あるいは上野の寛永寺であれ、両国の回向院であれ、そういう聖地を中心として作られたからです。浅草や両国の場合には御開帳といって仏像を見せる時があります。特に両国では、長野の善光寺や京都のお寺などいろいろなところから仏像を持ってきて、それを展覧会みたいに見せる。いろんな人がそれを見に集まってきた際、その周りで羽を伸ばしていくということがありました。聖なる土地を中心にしてると同時に、宗教的な女性を表に出してるような形にして悪所でもあったわけです。浅草の裏には吉原がありますし、両国の裏にもそういう岡場所のようなところがありました。ですから悪所であると同時に聖域でもあったということです。

これらをまとめて考えると、江戸時代の盛り場というのは、一種の他界ないしは異界との境界、あるいは窓という言い方をしていたわけです。つまり日常的な秩序を越えた他界。他界というのは時間的に死者の世界、あるいは物の怪や鳥といった日常の秩序を越えたような魔物たちがいるような世界。そういうところへの窓、あるいは出入口や境界として盛り場が成立していました。これは中世の興行とか、そういう興行地が大体その寺社地の墓場の周りとか、それから寺社の境内とか、そこでずっとやられてきたことと関係していて、盛り場というのはそもそもそういうところから発展してくるわけです。それは歌舞伎とか能とか、そういう演芸のように大体もとのベース、一番ベーシックな形態というのは、死んだ人間というか、死者たちが、どういう形であれ、なんか違う形で復活してきて現れる。死者たちを生者の世界に召還するわけですよね。そういうものをベースにしています。だから、ベースにそういう死者たちの世

界や魔物たちの世界と日常の世界とのインターラクションというのが盛り場にはあり、それをベースにしてスタートしたわけです。

浅草というのは基本的にそういう異界として、江戸時代からずっと栄えていた盛り場ですから、その異界や他界とのインターラクションという要素をベースには持っているんです。そして、そういうベースを持ちながら、そこには近代的な要素も入っていき、それらが入っていくことによって近代的な盛り場を作っていったということが、浅草の空間の側からは言えます。江戸時代の浅草の中心というのは「奥山」という、浅草観音のちょうど裏手に当たるところでした。幕末あるいは明治の初めの浅草観音のごく周りまで、小さな露店とかのお店がひしめいていたような感じでした。周りがきれいに整地されて、広場になったのはずっと後のことです。

その浅草がどういうふうに変容していくのかということで、近代以降の浅草の変容として、一つ非常に重要な契機となったのが、明治の15年から17年にかけて行われた公園地改造事業というものです。簡単に言うと、明治の6年に公園制定の太政勅告というものがあり、東京の上野と浅草と深川と芝と飛鳥山、この五つを公園として、西洋的な意味でパークに整備するということを、太政官が公布したわけです。このモデルは西洋の都市で、つまり日本ひいては東京をどうしたらより西洋の都市に近づけることができるのか、という発想がベースにあった。その時、西洋の都市には公園がある。だから日本の都市にも公園を作らなくてはいけない、しかしすぐには作れない。だから、とりあえず公園らしきものというか、公園に似たようなものを公園というふうに名付けて制定してしまおうということになった。その頃、公園らしきものといった時、一番近そうだったのが寺社地だった。

飛鳥山は別ですけども、寺社境内で人々が憩い、寛いでいるところから、一種の盛り場ともいえるような寺社境内を一応整備をするということになった。そして、そこは公園となったので、ここで見世物をやってはいけないとか、露店もあまり出してはいかんなどと、いろいろおふれが出るんですけども、浅草の場合、実質的にはほとんど変化がなかったということです。

明治 15 年になると浅草をもうちょっと公園らしく整備しようという動きが出てきて、それまで観音堂の横には浅草田圃と言われるような大きな沼地帯が広がっていたんですけども、ここを埋め立てて浅草全体を区画整理しました。その埋め立てた敷地を「浅草六区」と呼んで、整地をしたところに先ほどのような観音堂の周りにずうっとひしめていたような見世物小屋とか、その辺の奥山の方にずっとあったような見世物小屋とか露店とかを移動させ、そして区画化された土地にそれぞれを割り付けて、そこから地代を取る。同時に猥雑な見世物など、いろいろ問題があるところを全部排除していく。

ところが、これがうまくいかないんです。ここは明治 17 年に完成するんですが、20 年になるといろいろ東京の制約が厳しくなって、見世物の人たちとか露店商の人も、浅草を見放して、他に行ってしまう。閑古鳥が鳴くというか、浅草がさびれていきつつあるということで、いろいろな批判がされるんです。当時、興行師の人たちとしては、別に浅草にこだわらなくても、秋葉原とか両国とか、芝とか、他の盛り場に移っていけばそれでよかった。絶対に浅草でなければならないという理由はありませんでしたし、江戸時代の盛り場は、別に浅草だけが抜きん出ていたわけではなく、他にも幾つか同じような所があったわけです。ところが、浅草公園を整備した側としては、あまりさびれてもらっては

困るので、いろいろな紆余曲折はありますが、最終的には、東京の側あるいは政府側が大幅に妥協して、少なくとも浅草公園六区に関しては見世物、興行の制限をすべて撤廃するという自由化をするわけです。そしてようやく 20 年代になって、いろんな見世物の人たちが戻ってくるわけです。明治 20 年前後でしたら、まだ秋葉原でも万世橋付近でも、両国あるいは銀座でも見世物とかをやっていたように、東京のいろんなところで興行ができていました。ところが、明治 30 年代、40 年代になると道路交通量が著しく増加したり、ほかの場所での見世物興行の制限が厳しくなってきて、徐々に別な職種の人たちが入ってくるようになったわけです。

明治の末になると、浅草だけが東京の中で唯一そういう猥雑な見世物師たちによって自由に興行ができる天地として、残された自由の所という構図になってきます。東京のいろんな興行師が調べて書き残しているのですが、大道芸人たちというのは、昔は芝の神明前に集まってきては東京のいろいろなところで興行をしていた。ところが明治の終わりから大正にかけて、徐々に他のところでは興行ができなくなってきて、浅草の周辺に集まるようになります。そして浅草がそういう吹きだまり的な場所になってきた。その前提が浅草が公園に制定されたことだと思えます。いわゆる日比谷公園のような近代的な公園というより猥雑さを許容してしまうような公園として残ったことによって、浅草がそういう場所になり得たのではないかと考えています。

その全く逆の例が両国です。両国は浅草以上に江戸時代に非常に栄えた町であり、盛り場だったわけですけども、両国は公園にはならなかった。むしろ交通の要所として発展しました。千葉、房総方面に行く鉄道の出発点として、そして貨物とかその他いろいろな交通の要所にな

ってきます。そのことによって、むしろ文化的な大衆娯楽は排除されていきましたから、盛り場としての両国は、時代とともにだんだん廃れてしまったのだと思います。

明治 20 年代になると浅草では、新しい要素として、高い所に人々を登らせて周りの世界を見渡させるという娯楽物が出てきます。これを発展させたのが、一つはパノラマ館という真ん中に展望台をつけて見させたものです。周囲 360 度のパノラマで風景が描かれており、近いところにもものが置かれていて、まるで自分が高い戦場、日清戦争とか南北戦争の戦場の真ん中に立って周りを見渡しているように感じる装置です。これを一言で言うならば、触覚的な娯楽ではなく、視覚的な娯楽へと変わったということです。つまり、周りの世界を高いところに立って見渡す、あるいはイリュージョンとして周りを見渡すという楽しみです。近代以前の娯楽にも、もちろん視覚的な要素もありますけれども、見るものと見られるものとの間のインターアクションを楽しむということが多かったんです。ですから、どちらかという視覚的というより触覚的だった。ところが、これは一方的に高いところに立った観客が周りの世界を見渡して行って、理念的にも全世界をずっと見渡していくというものでした。このような装置が浅草にでき、それに伴って他の盛り場にもたくさんできてきて人気を得ていきました。

これは別に日本だけの現象ではなくて、ヨーロッパでも 18 世紀末から、特に 19 世紀前半を通じてこのパノラマ館というのは非常に都市の娯楽として流行っていました。特に 19 世紀前半の映画が登場する以前は、全世界的な最大の娯楽装置の一つであったので、パリでもロンドンでもアメリカの都市でも非常にたくさんできていました。その理由の一つにはヨーロッパの人々

の意識の中に、ヨーロッパという中心からアジアもアフリカも中近東もアメリカも、全世界を一望のもとに、自分たちの視線のもとに掌握していくんだという、そういう意識が 18 世紀末、19 世紀の近代西欧の都市の人々にビジュアルズムとして芽生えていたわけです。その意識と娯楽施設が結びついて、このようなショー空間が生まれたのが明治初年です。

これがもっと技術的に発展していくと映画になります。浅草が映画館街になっていくのは明治 40 年代以降です。それまではさきほどのパノラマ館とか塔とか、あと江戸時代からあるような曲芸とか、ちょっと猥雑な見世物とか、そういう物がひしめいていました。それらが明治 40 年代になると、こぞって次々と映画館に衣替えしていきます。大正の初めまでには十数軒の映画館がずっと建ち並ぶことになります。今でこそ新宿でも渋谷でも、そういう映画館が何軒も集まっているところがありますが、大正中期においてこれだけ活動写真館が集中しているのは、浅草以外にはありませんでした。つまり、そこに行くということは映画を見るためであり、浅草に行くことによって映画を見ていたということです。十数軒ありましたから、ロードショー館とか洋画館とかなり専門化していましたので、いろいろなものを見ることができました。とにかく、浅草に行けば何かロードショーや、新しいものをどんどんやっているというような状態だったわけです。大正初期には浅草オペラというものも出てきます。関東大震災のころは、まさに東京の民衆娯楽のすべての要素は浅草に集中していたといえます。

その頃、銀座はどうだったのかと考えると、銀座は確かにイメージとしては「すごくハイカラ」だと広く考えられており、一度は銀座に行ってみたいという雰囲気がありました。しかし

それが日常生活にどうやって含まれていくか。日常生活にどれほどつながっていたのかということと考えますと、銀座は日常の賑わいの空間として、週末に銀座へ行って銀ブラするという程度でした。

この大正中期までの時代では、やっぱり東京の町文化の中心というのはあくまでも浅草であって、それもずば抜けて浅草が力を持っていた。この時代浅草の賑わいというものに、一体どのような要素があったかと付け加えますと、大きく四つくらい特徴として言えることがあります。一つは異質なものが共存していたということ。あらゆる異質な要素をすべて一緒に飲み込んでしまうようなところ。浅草は東京の長であるとか、ブルジョワもプロレタリアもごったになっているとか、何でもかんでも飲み込んでしまう錆物状のような、そういう異質な部分が共存する、ごった煮的な存在でした。もう一つの特徴というのは、常にどんどん変化していくということで、絶えず要素が変化していました。谷崎潤一郎が非常におもしろいことを書いています。彼は『鮫春』という小説を書いています。これはまさにこの時代の浅草論です。谷崎という人は1930年代になると日本趣味になっていきますが、1920年代までは大変モダニズムで、そういう浅草的なことや都会的なものがどちらかと言えば好きなタイプで、『痴人の愛』などにそういう谷崎の特徴が非常に出ています。そこでみられるような、絶えず流動しつつあるものというのが浅草の第二の特徴です。そして三番目の特徴としては、奔放自在さ、あるいは日常性からの逸脱ということで、祭りの意味での非日常性です。谷崎の文章には、浅草に行くと職人が平気でカフェーに入ったり、娘が平気で縄のれんをくぐってしまうということが書かれています。彼らは最初からそういう

ものをベースに持っていたわけではなく、浅草というところに行くと、ついそうしなくなってしまふんだという言い方をしています。つまり、日常の自分に対する批判とか、役割を逸脱させてしまふ、そういう雰囲気があったわけです。四番目の特徴としては、ある共同性というか、そこに行った人達が、そこでは何か自分たちは仲間なんだという一体感、あるいは幻想共同体といった意識を持ってしまふ、そういう要素がありました。

例えば大正の末から昭和にかけて「安来節」が流行しました。その時の流行の仕方を江戸川乱歩が書いています。浅草の安来節というのは他のところの安来節とはかなり違う。それは他のところ以上に、野次とか感情というものが客席からどんどん上がってきて、そのうち客席と舞台が非常に一体感を持って高揚していくところ。浅草の興行界は、客席と舞台の仕切りをなくしてしまうようなところがある。そういうある種、そこに来ている人間が、ある共同体意識とか一体感を持ってしまったりする。非常に雑な言い方をすると「村祭りの」、そういう要素を持っていた。これが形を変えて活動写真館でもあらわれ、浅草オペラでもあらわれ、となってきたのだと思います。

こういった浅草の賑わいが廃れてきたのは、関東大震災の後です。震災後もカジノフォーリーといったものが出てきますから、決して一気に廃れてしまうわけではありませんが、陰りが見えてきます。象徴的なことといえば、震災前までの浅草の活動写真館のほとんどがその土地の興行師が中心だったのが、震災で全部駄目になってしまい、その後、松竹が入ってきました。昭和の初めから浅草の映画館はほとんどが松竹系です。その後、浅草オペラが全く振るわなくなった。それから十二階そのものが震災で壊れ

てなくなってしまいましたから、十二階下の魔窟という場所は、震災後に玉の井となりました。東京の流行歌の中でも、浅草は賑わい場所ではなく、粋な場所というふうに歌われるようになり、そして「銀座」の流行歌がヒットしていきます。そうするうちに浅草の土地の若者たちは銀座に対してある種のコンプレックスを持つようになる。浅草が本当に衰退していくのは戦後ですけれども、震災後徐々に陰りが見えてきていた。反対に、この震災後、浅草に変わって東京の大衆文化の中心、あるいは大衆ショッピングの中心をなしていくのが銀座です。

明治以前の銀座

銀座の発展についてお話する前に、ここで幾つか要点を確認しておきます。それは、まず銀座という町は江戸時代には決して盛り場ではなく、むしろ場末であったということです。江戸時代の東京の賑わいの中心といいますが、商業的な中心はあくまで日本橋本町界隈ですし、大衆の娯楽的中心になるのは浅草だったり、両国でした。商業的に見ると江戸時代までは、京橋まではかなり賑わっていましたが、明治の初めに書かれた銀座の本をみますと、京橋まで賑わっているが、そこを過ぎるとどんどん寂れていって、新橋のあたりまで行くと非常に街道性が強くなり、新橋自体も非常に粗末な橋であったと書かれています。ですから江戸の賑わいの中からいえば、銀座は周縁だったというふうに言っていると思います。

ここで非常に重要なのは、その銀座になぜ煉瓦街が作られたのかということです。つまり江戸時代からすれば決して盛り場であったわけではない、商業的にも重要な場所であったわけではない銀座に、なぜ明治政府がかなりの力を入れ

て、つまり相当予算をつぎ込んで煉瓦街を作ったのかということです。

煉瓦街は明治の5年から7年にかけて作られたものですが、明治の初期、すでに林立してきます。一つは新橋馬頭です。明治の3年から5年にかけて新橋から横浜まで鉄道が敷かれます。そのころ東京駅はまだなく、現在の汐留の貨物駅のあったところですが、そこが新橋ステーションになり、東京の出発点になりました。これが非常に重要なことです。当時はまず、西洋からの情報にしても物にしても人にしても、横浜からすべてが入ってきていた。その横浜に入ってきたものが、鉄道を通して新橋へ来る。ですから最初、新橋は東京の中で最も西洋に近い場所でした。それから、東京のミッション系の大学というのはほとんどが築地から出発しています。ホテルにしても教会にしても病院にしても、学校にしても、そういうものは築地から出発しています。また当時、東京に来た外国人が泊まる場所も築地にあった。つまり築地は東京の中に建設された外国人居留地だったということです。当時の築地は、東京の中でも最も西洋化された空間でした。

銀座は、この築地と新橋の中間地点にありました。ですから銀座を西洋化する必要があったわけではなく、横浜から新橋、そして新橋から銀座を通して築地、という一連のルートがあったからです。この明治初年代に完成したルート全体が、当時の東京にとって西洋あるいは世界に開かれた窓となっていった。空間的には世界、時間的には近代なり未来に向けての窓としての役割を持っていきます。

銀座のロジック

つまり、江戸時代までの賑わいの空間の作られ方というか盛り場を支えてきた空間的なロジックと、銀座という盛り場を支え発展させてきた空間的なロジックというのは、根本的に違うと思います。江戸時代までの盛り場を發展させ、賑わいを支えてきた空間的なロジックというのは、異界ないし他界への窓として日常の感覚を越えたものがその盛り場の向こうにあるという形です。その異界、他界とのインターアクションが一つの文化的な意味でのロジックでした。ところが、銀座を支えてきたのはそういう異界や他界といったものとの関係ではなく、むしろ近代あるいは西洋との関係です。最初は横浜が鉄道の拠点ということで重要だったわけですが、銀座は、西洋なり未来に向けた窓として發展していくわけです。ですから東京の中心と周辺といった関係ではなく、「窓」としてのポジションというか、「位置」が銀座が賑わうことを形作る基礎になっていったのだと思います。これは当時の錦絵などを見るとよく分かります。その後、銀座では確かに煉瓦街が開発されましたが、家賃は高いし、湿気は多いし、窓は狭いし、蒸し暑いし、と悪いことばかり言われたようで、空き家がたくさん出て困ったという話が残っています。そこで政府は明治 10 年代の最初の頃は、興行師や見世物小屋の人たちにも煉瓦街を貸していたようで、銀座の煉瓦街で口クロ首や、いろんな見世物興行をやっていた、というエピソードもあります。他にもエピソードはいろいろあるのですが、明治の 20 年代になりますと、徐々に銀座も店で埋まって行って、ある程度の賑わいというものが形成されていきます。

この時、銀座の賑わいの核をなしていたものには二つのものがあります。一つは時計や洋服、化粧品といった舶来品を扱う店です。もう一つ

は新聞社。朝野新聞を始め、新聞社やその手の情報産業が並んでいました。それで読売広告社にしても電通にしても、銀座の周辺には広告代理店がかなり多いんです。これはもともと銀座の周辺に新聞社といった情報関連産業が多かったということによります。

ではなぜ新聞社が銀座に集まっていたのかといえますと、さきほどお話しした話とも関係がありまして、つまりまだインターネットもない時代ですし衛星通信もない時代ですから、電信というものがあるにしても、情報というのは手紙とか人間にしても、基本的には当然ですが交通手段を使って入ってくるんです。そうした時、東京の中で一番世界に近い場所、西洋に近い場所は銀座だった。銀座という場所は東京の中にありながら、同時に新橋という鉄道駅を通して横浜に近かった。横浜に近いということはつまり西洋に近い。つまり、単にハイカラだからとか、カッコイイからみんなが集まってきたわけではなく、やはり新橋に近く、そういう情報の世界に近いということが大きく関係していたわけです。

そしてここで改めて強調しておきたいことは、関東大震災の前、大正の初めまでの銀座は盛り場ではなかったということです。確かに東京の中で最もお洒落な空間、ハイカラな空間であったことは間違いありません。そして詩人なりハイカラ好みの人たちから、いわゆる素人の連中まで銀座を好んでいたということ。一般の人も物珍しさから、一度は銀座でそういう洋風ものを味わってみようと思うような珍しい空間であったと思います。しかしそれは日常的に銀座に行行って買い物をしたり銀座を楽しむという習慣ではなく、銀座が大衆化していたわけではないのです。銀座は特別な空間であり、今の若い人たちにとっての渋谷、原宿というよりも代官

山や青山といった、ちょっと格好をつけた人たちが行くような空間だったわけです。

それから東京駅は大正3年にできました。この東京駅の開設とともに新橋駅は廃止になります。それに伴って、その後の銀座についての議論が行われ、もう銀座は駄目なんじゃないかということが新聞に書かれたりしました。それまで銀座は新橋駅が支えの一つになっていたわけですから、新橋駅がなくなり東京駅が中心になってしまったら、これからの賑わいの中心も東京駅の周辺に移っていくのではないかというふうに書かれたわけです。当時はそういうことさえ言われるような状況であったわけです。震災後にでた『銀座細見』という本の中にも、震災前の銀座というのは確かにハイカラであったし、ある程度賑わってはいたけれども、浅草に比べればまだまだ比べようもなかったし、神楽坂周辺と比べても、賑わいという点からは劣っていたというふうに書かれています。

こういった状況が一気に逆転して銀座が大衆化、盛り場化して、遊びの場と同時にショッピングの一大中心となっていくのは関東大震災の後です。デパートの三越にしても松屋にしても松坂屋にしても、本格的に銀座に進出したのは、昭和のはじめです。それからモダンボーイが出てきて銀座を闊歩するようになった。流行歌で盛んに銀座が歌われるようになり、『中央公論』や『改造』といった雑誌に「銀座特集」がひっきりなしに入ってくるようになったのも、すべて震災後に起こってくる現象です。

大衆化した銀座

しかし、なぜ震災後になって一気に銀座が大衆化したのか。それは交通機関の発達、つまり銀

座線が開通したということも多少関係があるかもしれませんが、それだけが決定的な理由ではありません。、その一番大きな要因というのは、むしろ東京全体を包み込み場合によっては震災後の日本社会全体を包み込んでいった大きな変化と関係しているのではないかと考えています。

震災前には既に、銀座のハイカラで西洋風なイメージというのは広がっていたわけです。当時の錦絵にも、そういう銀座の町のイメージというのはたくさん書かれていますし、写真にも印刷にもお馴染みで、それが人々の間には広がっていました。ところがそういう銀座のイメージというのは当時の庶民感覚、大正期までの人々の日常生活感覚からすれば、疎遠なものでした。東京の中では、浅草につながるような生活空間の方が海のように広がっており、銀座につながるような生活空間、つまり西洋化された生活空間というのは、そこに浮かぶ島にすぎなかったわけです。それが震災のあった20年代を大きな契機として、この海と島の関係が反転してきます。つまり生活のモダン化、近代化が主流になってきます。浅草的なものがだんだん島になり、銀座的なものが、海のように広く生活の中に入ってきます。

これをもう少し具体的に見ると、そこには特徴的なことが二つ、三つあります。一つは浅草と銀座を対比した場合、主役となる歩く人々の層が違っていたということです。階級的にももちろん違ったわけですが、世代的にも違っていた。浅草の場合には、老若男女、子供からお年寄りまで、いろいろ種々雑多な層が皆、同じように入り乱れた関係を作っていました。ところが震災後の銀座に集まってきた人々というのは、若者たちでした。その若者たちがかなり大きな役割を果たす盛り場として再出発した銀座。江戸時代の盛り場というのは、かなり男性に頼って

いたところがありますが、世代的な関係ではそれほどはっきりとはしていません。ところが銀座の場合には若者たちが特権的な役割を演じていきました。

二番目は「モダン」という銀座のイメージ。このモダンという言葉の流行とイメージが、日本の特に東京の大衆の方へずっと広がっていく。「モダン生活」とか「モダニズム」といった流行語が大流行します。このイメージの広がりや銀座の流行というものが重なるわけです。明治の場合は文明開化ですけれども、文明開化というより、もっとモダニズム、あるいは日本の都市のモダニックなもののイメージを空間的に具現化した場所として銀座というのができていったと言えるのではないのでしょうか。

そして、この震災後の銀座の発展を、三番目に支えたものは「郊外住宅地」です。すなわち山の手住宅地の発展ということが非常に大きく影響していると思います。震災を契機に、下町一帯の空間地の解体が行われ、いわゆる山の手型の中産階級の住宅地が発展していきました。

そしてもう一つ、非常に大きな影響を与えたのはメディアです。昭和の初めには「銀座セレナーデ」「銀座の柳」「東京行進曲」それから「銀座ボーイ」など「銀座」という流行歌が軒並み出てきてヒットします。そして雑誌などでも「銀座」特集が非常にたくさん組まれています。つまりこの頃の銀座ほどメディアによって集中的に語られた盛り場はないと思います。なぜこのようなことがおこったのかということを考えて時、まずそこで重要になってくるのが、そういう銀座を語るメディアそのものが、この時期に誕生したということです。銀座を全国レベルで語っていったメディア、例えば流行歌にしても、まずレコードというものがなければ、

ありえない。そしてそのレコードがかなり大衆に普及していなければならない。同時にレコードで流れるものを、ラジオというマスメディアが流すという構図。東京のラジオ局、東京放送局が放送を開始するのは大正15年で、全国ネットが完成されるのは昭和3年です。つまりラジオというものは1920年代後半に急速に大衆化し、広がっていったわけです。それと並行して蓄音機も広がっていった。それから『中央公論』とか『週刊朝日』といったいわゆる総合雑誌や週刊誌というもののほとんどが明治の20年代初めから30年代にかけて創刊されています。最初の週刊誌、総合雑誌の創刊ブームです。いわゆる今日につながる総合雑誌とか大衆小説が出てきます。『キング』もそうですし、『婦人公論』といった婦人雑誌もそうですが、まさに雑誌というメディアが大衆化していった時代です。そういう印刷媒体、そして放送媒体といったマスメディアが、1920年代、日常生活に深く入ってきて、このメディアを通して銀座のイメージもグッと広がっていった。

銀座のイメージ

確かに、銀座の発展というのは煉瓦街とともに基礎が作られたともいえますが、その物理的なところはすべて関東大震災において壊れてしまいますし、大正の初めには新橋駅もなくなり、昭和の初め頃には物理的条件は完全に消えてしまいます。

ところが、そういった状況にもかかわらず、銀座のイメージは煉瓦街で作られたものを核に、それがメディアによって媒介されたりモダニズムに受け入れられた人々との意識が結びつくことによって、むしろそういうイメージが先導するような形で、銀座は昭和の初めに一気に大衆

化していったわけです。つまり文明開化の銀座と、モダンの銀座とでは構造が逆転しているといったところがあります。モノからイメージが作られていった明治から大正にかけての銀座に対し、大正末から昭和にかけての銀座の大衆化というのは、むしろイメージが先にあって、マス媒体を通じて空間として発展していくというある種疑似イベント的な、逆転していくようなプロセスが一部にあったといえます。

こういった銀座の発展は、現代型の盛り場の原型だと思えます。浅草から新宿に至るような盛り場の発展というのは、質的にみると江戸時代からずっと繋がっているような面をもっていますが、銀座以前には、銀座型のつまり西洋の近代的、未来的なものに向けて開かれた窓としての空間が設定され、それをベースにイメージが作られ、発展するようになるようなものではありません。そのような形は銀座が初めてで、またその後、形を変えて渋谷にしても原宿にしても、銀座のバリエーションとして発展していきました。

銀座と渋谷、原宿の違いということでもう一言だけ触れると、関東大震災の後になってからだと思いますが、戸越銀座とかアルプス銀座といったぐあいに全国の商店街に「銀座」という名前が付けられていく傾向が出てきます。1960年ぐらいの調査では、全国に約520の「銀座」があるということでした。そういう風に全国の商店街に銀座の名がつけられていったのは、やはり東京の銀座がモデルになっています。東京の銀座にあやかって自分達の商店街にも銀座という名前をつけてしまえば、実際には何もしなくてもちょっとモダンで近代的なイメージを被せることができる。それでどんどん「銀座」という名前をつけることが流行していったわけです。しかし70年代以降の商店街の名前の付けられ

方というのは、そういったスタイルとはまた変わり、例えばストリート、アベニュー、モールなどとディズニーランド的というか、カタカナで異国的な名前をポンとつけるというのが、主流になってきます。それを最初に先導したのは渋谷の西武パルコの公園通り開発ですね。非常に意図的で、また全然その地域に関係のないカタカナの名前をつけることによって周りの空間を再開発していく。

銀座の場合は日本の中心に東京があって、東京の中心に銀座があって、その銀座が一番西洋に近い。それに近づくことによって非常にモダンなイメージをかぶせていく、よりファッショナブルなイメージをかぶせていくというやり方をとっていったわけです。ところが、70年代以降の渋谷、原宿というのは、基本的には日本全国の都市部が都市化されてしまっていて、ある意味で近代化、西洋化されているという状況は前提になってしまっている。その前提の上で差異化、個性化をはかるにはどうすればいいのかといった時、要するにフィクションの中での差別化をやるわけです。そうした自分の空間をどう記号化するか。自分の商店街なり、その空間にどういう記号をつけ、どういう記号空間として商店街を組織していくかという話になっていきます。その辺の構造の変化ということがあったのだと思います。

(講演終了)

- 全体議論より -

保田 / たしかに日本が近代化されたのは昭和3年です。いわゆる録音の仕方が変わってきて、マイクを使うようになったからで、「電気吹き込み」といわれてました。それを昭和2年に名古屋のレコード会社が初めて使い、東京の会社が出したのは昭和3年です。レコード会社が自前で流行歌を作り出すのもその頃です。銀座はそこへうまく乗ったという感じです。それから歌にするときにはなんとなく、浅草より銀座の方がモダンでスマートだったのでしょう。それがヒットの理由ですね。銀座も得するし、歌も得するという相乗効果が起こったのだらうと思います。

長谷川 / 確かにメディアという視点では、当時たまたまそういうメディアが発達してきて、その中身として銀座がのり、そうして全国に銀座が広がり、そこからまた銀座が栄えていった。

保田 / あと東京の地下鉄は、昭和2年末に初めて浅草・上野間に銀座線ができた。なぜ最初に浅草にできたのかというと、当時はまだ銀座より浅草の方がはるかに栄えていたのではないかと思います。昭和2年といいましても、工事は何年前からやっているわけですからその設計、計画ができたということ。それでも、なぜ上野・浅草間が先にできたのか、と疑問に思っていたのですが、確かにおっしゃるとおり、震災後すぐではないけど、大正から昭和の境目ぐらいいから銀座は変わってきていたんですね。

荒井 / お話の最後の方で、銀座以降いろんな意味で、盛り場のあり方が違って来たというお話

がありましたが、その中で銀座と渋谷もしくは原宿が対比されるものであるとすれば、銀座が昭和の初期に得た地位が今日までの50、60年ぐらいい間に変化してきた変わりようと、渋谷は若い町ですけれども、盛り場としてかなり認定されるようになってから20年位でしょうか、そういう70年代に入ってからの変り方というのは、少し違う気がします。

例えば、今渋谷というと明らかにある段階で「若い」というキーワードではなくなりましたね。ところが渋谷の場合、もちろん最初は若かったのですが、まだ急速に変化しているので、今の選択は広いですよ。渋谷は、単に若くなったということだけではなくて、ある種のモダニズムとは言わないまでも、ある種の猥雑さというか、そういうことを備えた町にだんだん動いてきているんじゃないかなと思います。そうすると、最初はすごく似たような位置付けの中で始まって、設計されてきた町が変化していく中で、渋谷のこの10年とか20年の急速な変化というのは、やはり私どもは間近に見るわけで、それが例えば銀座のたどった道と渋谷のたどった道がもし違ふとすれば、それは今日の社会におけるモダニズムと、かつてのモダニズムの差であるかもしれないし、もしかすると日常性、あるいは先ほどおっしゃった日常性からの逸脱、そういう類の候補自体が、概念では同じかもしれないけれども、実はすごく違った形をとっていて、かつての浅草の構造に今の渋谷が近づいているのではないかということをおもったりします。

そうすると、かつての盛り場、銀座以降の盛り場というのは、ある種のクリアさというか「猥雑」に対して「透明さ」というか、そういうことが特徴であったのが、もしかすると今、我々が潜在的に求めているのは、そういう銀座に代

表されるような透明さ、クリアさではなくて、実は猥雑なものを求めるようになってきているのかなと思います。それは単に渋谷というケースがものすごく変わってきて、もう銀座と対比できないようなケースになったのかもしれませんが、その辺がどうも判断がつかないので、少しご意見をお願いできればと思います。

吉見 / これにはおそらく三通りの答え方ができるかなと思います。

まず一つは、浅草から銀座へという場合は割とはっきり出るんですけども、本当は新宿と渋谷、原宿はきれいに整理できないと思うんですね。ただ若者文化に限定すると、部分的に70年代は新宿から渋谷、原宿への変化ということのなかに、多少、浅草から銀座への移行と似たような変化が見えるんじゃないかということベースにしているわけです。

都市化というのが単純にイコール近代化となるのではなく、都市化の中にはどんどん消費社会化する部分があり、あるいは近代化する要素と矛盾するような要素もあったりということで、都市化と一口に言っても、矛盾する幾つかの要素が組み合わさって成り立っているはずだと思うんです。実はそこが一番言いたいところです。

二番目は、こういう図で考えた時に、新宿から渋谷、原宿というのがきれいじゃないのはなぜかということと関連するのですが、その一つの理由というのがメディアの問題だと思います。銀座は確かにメディアという媒介で、初めて社会に流行していった最初の盛り場だと思うんです。しかしそれでも、都市そのものがメディア化するという状況ではなく、まだ場所的な秩序みたいなものがどこか前提にあり、その中で展開しているようなところがあるんです。

しかし、70年代以降の渋谷、原宿では、いくら渋谷、原宿や特定の地域の盛り場にフォーカスを当てて見ていっても、やはり見えることは限定されてしまい、限界がある。都市の文化全体をそこから見ようというのには無理があるので。

それはやはり現代の都市の文化というのは、都市という場所そのものがメディア化されているところがあるからではないでしょうか。だからそれこそインターネットで東京とニューヨークがつながってしまうといった、空間的に非常に離れていても、場所を共有してしまうような状況がある。

このテクノロジーとメディアに媒介された場所と文化を、もう少し総合的に考えていかないと見えてこない。地域だけを渋谷、原宿というふうに閉じた形で、あるいは渋谷を一つという形で見ていくのではなくて、もっと非常にローカルなものがグローバルなものとの交わる場所として見ていく。非常にローカルなものとグローバルなみみたいな、あるいはローカライゼーションとグローバル化というものが表立っているようなところでの文化の成立というのを総合的に見ていくには、ちょっと別のアプローチが必要だなというふうに思っております。

三番目は、特に70年代以降、渋谷、原宿になってくると、基本的にはポストモダン、あるいはポスト工業化社会になります。我々の現在の社会というのは、近代がある屈折をしたところに成立してきていますから、いわゆる近代化というのは、直線的には考えられなくなっている。そうすると、ある未来に向けての窓、近代に向けての直線的な時間というのがあって、その中で向こうに銀座があり構造では考えられなく

なっている。この考えられなくなっているということが、今、先生にお話しいただいた、渋谷、原宿とか、現代の盛り場の位置付けがミックスされたような難しさ、ということにつながっている感じがしました。

荒井 / そもそも地理的空間というか、実在する地理的空間としての領域のカテゴリーはその通りだと思います。私は地理学者なので、そこに多少こだわらざるを得なくて、一応議論し得るものだという前提に立ちますと、もちろん新宿も渋谷もある意味では郊外化が速い。ちょうど津田沼とか町田とか、あの辺の開発をやっていた時期ですが、いわばああいう形でどんどんどんどん商業施設が作られていく。それはもう、そうなるのには簡単に経済原理で説明がつくんですけども。実際、それは大都市といいますが、都市の必然として郊外化していく。郊外化していけばいろんなものが散っていく。散っていくけれどもばらばらに完全に砂をまいたように散るわけではないから、その中に生きていく。

そういう意味では、銀座とか浅草というような意味での集中、空間的集中としての盛り場と、全然違ったレベルでの盛り場があり、いわば小さな盛り場ですね。そういうことからいくと、ここで議論された話というのは、いわばその空間地形態とかなり近い。それで都心の中での勢力の変化が少しある。

もし、本当の意味で非常に大きなベクトルを考えるとすると、もちろん近代化されて以降の議論では間違いはないんですが、郊外化の議論、あるいは郊外化をもたらした文化というようなことで議論していかないと、分からない部分ができます。

ただし一方で、その郊外化の文化というものは、

確かに郊外住民の文化であったり、あるいは郊外地域社会の文化であったりするかもしれませんが、もしかしたら郊外の盛り場の文化というものは存在しないのかもしれないと思います。

といいますのは、そういった郊外は非常に設計されてしまうものですから主体が非常にはっきりしている。その辺をどう考えればいいのかというのがよく分からなくて。彼らのカルチャーというのは、実はもしかしたら郊外の盛り場論の中に出てくるかもしれないし、もしかしたらもう既に盛り場論にはないのかもしれない。

それではどうやって彼らのカルチャーを探すべきなのかと。その辺がどうもよくわからなくて、何かご意見を伺わせていただければと思います。

吉見 / おそらく、盛り場論は特に 70 年代以降の局面ではすごく限界があるんです。

部分的には 80 年代の終わりに、ディズニーランドについて『零の修辞学』という本の中でディズニーランド論を展開しました。そこでも書きましたが、80 年代の東京で人々が集まる場所というのは、これまで述べてきたような意味での盛り場ではないんですね。もっと組織された、非常に全部がデザインされた遊戯空間、ショッピングタウンというか、その中で人々の身体とどう位置付けられていくのかということ考えた部分があるんです。ただ現在では、ディズニーランドというよりももっとメディアと日常性が融合化したようなメディア・スペースが、なし崩し的に広がっていているということがあります。そういう場の問題を考える必要があると思います。

荒井 / その延長で、例えばアメリカの都市で非常に郊外型が進んでいるとか、ダウンタウンが

アウトになっているとか、またそれがあるために、特殊に発達してしまったロサンゼルスみたいなケースもありますが。ただ、あれはもう都心に比較するものがなくなって、明らかに郊外という空間の中で、何がしかのまとまりを得ていて、もしかするとあそこには、あれで何がしかのカルチャーがあると思うんです。

ロサンゼルスで成立したものが、ある種のカルチャーとして非常に郊外化する。実は物理的形態として日本やヨーロッパの都市で、ああいうふうに比肩するような都市空間が作れるとは必ずしも思えないんですけれども、しかしながら、本来の文化論という意味で考えれば何がしかの形でそういう形が成立する可能性があるのかというのは、私にとっては非常に疑問で、少し考えてみたいと思います。

吉見 / 郊外が、そういう非常にきれいにデザインされ尽くした形になっていく一方で、同時に犯罪の問題やマイノリティーの問題など、社会矛盾や紛争、闘争といったいろいろな社会問題がそこら中で噴出するような、非常に空間が分裂したり錯綜していったりするような、そういう郊外のイメージの方が大きくなっている気がします。そこまでいくと、都市空間としての郊外空間、かなりグローバルな空間というのが、ものすごく直結してきています。我々がそういう空間分析の中で、グローバルであると同時に、ローカルであるような視点を、とっていかざる得なくなっていくのは事実です。

高津 / 私たちの世代だと、先程おっしゃられた大和民的なところでも、民衆に対する過信というか期待的なところを素直に聞いてしまいます。そういう意味で言うと、最後の結論的な銀座でのイメージが形成されて、空間内実が後から備わってくるという逆説的な話を聞いていると、

それを構造的に決めると、やはり結構穴が出てくるでしょうし、その論理に銀座を当てはめたときには、その先はもうないのではないかと思いますね。既にお台場があり、さらにそういう情報系ですべての場という装置が後からついてくるのであれば、もう銀座というのは、多分この先何にもないとなりますね。それではどうするのかということ、もう一回振り返しをしなければいけないのではないかとということになる。

装置系というところは後からついてきますが、一番最初にそういうものがあり、その後イメージというものが形成されてという、順送りの循環構造がもしあるとすれば、もう一回、装置的なものも見直せるという、何か発想の軸をどこかに持ってこれるのではないかと。そこで銀座を最近の情報の中において、何か視点を探すと、小林信彦や古く言えば田山花袋とか。銀座とか東京自体を描いたときに構図として置いてしまうのが、「山の手」とやはり「下町」ということになり、先ほど言ったように今それを置きかえると「郊外」と「都心」ということになると思います。

今の情報の中で銀座の再編の道がないとすれば、なにかその辺のところを逆説的に使って、それを装置なりにして。先ほど言った山の手発想の山の手の意識が銀座というものを支えてきて、今の基本的な銀座の形態を作ってしまったのであれば、もう一回そのところを掘り下げて、そこに対応した価値というものをもう一回再構築することによって情報の逆発信をする。それを装置の中でもう一回再構築し、もしくは今あるものに付加価値をつけ加えることによって、逆に装置の場から情報発信と、再構築の断片でもいいから銀座としてつかみ取ることができないのかなと考えました。

その時、山の手の中流意識というのが、今の中でどう再構築できるのかというのは、さきほどのお話にあったアメリカナイズされた中流意識自体が瀕死の状況にあるということを考えると、はたしてどこに求めていったらいいのか。逆にその辺のところを伺った方が話としては早いのかなと思いますが。いずれにせよ、もう一度、昔のものに価値を求めて、そこから何か再構築できないのかなと思いました。

吉見 / 銀座というのは、いろんな意味で日本の西洋化のシンボルであり近代化のシンボルだと思うんです。やはりいろんな意味でモダンの象徴でもあったということは確かです。西洋に最も近い空間というのが、銀座だったわけですから、そこから外れる必要は全くないと思います。

それでさきほどの「山の手、下町」ということで言うと、ぼくは山の手と下町の構図というものが、いつから、どういう形で成立してきたのかということに興味があります。勝手な仮説なんですけれども、永井荷風や、谷崎潤一郎といった文学者というのを見ていけば、かなり見えていくのではないかと思います。「山の手、下町」の構図というのは日本版のある種オリエンタリズムだということが言えるんです。オリエンタリズムというのは、西洋とか東洋というものを対立的に関係づける枠組みのことですが。そして、西洋の方がより優れていて、東洋は劣っているという、対立構造というのは西洋が無理やり東洋になすりつけるという意味ではなく、東洋の方からも西洋というものを他者としてみているということです。本当は、いつから「山の手 vs. 下町」と言われ始めたのかを調べなければと思いますが、そういう対立軸を東京の都市空間において分けて考えてみると、山の手が西洋でやはり下町が東洋なんですね。そして西洋だから山の手になっていて、より日本的なもの

あるいは伝統的なものが下町という関係の問題となってくる。空間がそういうふうに意識の中で構造化されてくるプロセスがあったんじゃないかと。

それで銀座というと西洋の中心になる。だから山の手を中心であり、山の手を中心であるということは西洋の中心であると。その論理でいくと、ちょうど銀座は東京のヨーロッパだと考えられる。パリでもロンドンでもいいわけですがグローバルな展開の中でのヨーロッパに相当する。東京での西洋が銀座だと考える時、ある種ヨーロッパの没落している点というのがありますが、ヨーロッパ性を保ち続けてその力を持ち続けている。それと似たようなところが銀座にもある。

今は、都市空間の作られ方自体が、必ずしもそういう西洋近代的な形で展開しているのではなく、これから全体としてはもっといろんな商店の形態で広がっていくと思いますが、一度銀座に集中した人たちにそれが広がっていくとはあまり思えない。あるいはもっとショッピングモールで組織されて、郊外型ショッピングモール型が中心になっていくかもしれない。ですから、これから一気に銀座的なものが広がるとは思えませんが、要するに東京の近代や、西洋としての価値みたいなものにこだわった方が、銀座のアイデンティティ、銀座という概念そのものを保てるかもしれないし、そこから外れようがないとすれば、こだわるしかないし、それにこだわるという制度的な価値がそういう近代日本の中心をなしてきたわけで、銀座の価値というのは、そのレベルで作られたきたわけです。

長谷川 / 銀座には不思議な浄化能力というものがあって、三越にハンバーガー屋さんが入っても、やっぱり長続きしなかったりする。ある

種の時間という蓄積のようなものがあって、決して新しいものが来るのは拒まないんだけど、結局それはうまくいかない。それはある種銀座が持っている一種の免疫抗体みたいなものですね。

吉見 / 東京はかなり大都市で、その東京のいわゆる山の手産階級みたいな階層というのは、他の消費地に比べて、割と厚いですよね。相対的にその層はそんなに変わらないと思うんです。たとえ銀座が変わるとしても、渋谷や他の都市に比べて変わり方が遅いですよね。

石丸 / 先ほどのお話の中で、銀座が大きく発展した転換期の時、いわゆる煉瓦街という装置が完成したわけですが、その装置が壊れたなかでもイメージだけが残って、それが銀座の発展のきっかけになったというのは大変おもしろかったです。しかしこの装置というものは残さなければいけない反面、それを残しながらの銀座の今後を考えると、これはかなりの足かせとなるのではないかと思います。

一方で、70年代の渋谷のパルコ文化から、最近公園通りが歌舞伎町化しているとか、今度は池袋だという話になっていること。まさに渋谷というところがセゾングループの文化で発展していく中で、今度池袋では逆に追いかけていくという装置があって、最初にお話があった浅草が盛り場としての意識の場、精神の場として町があったところと比べて見てみると、意外に逆転のところに行っている。こういう発展を考える時には、どうも流通系の方から見てしまいますので、大衆文化、一媒介としての百貨店、デパートといったものの位置付けというところはどうなるのでしょうか。

吉見 / 銀座の商業施設というのは消費空間で

あって、浅草の興行空間とは違います。浅草から銀座になってくるときにはジェンダーがすごく変わった。消費者としての女性というのは、昭和の初めのモダンガールのイメージで、モダニズムというのが女性のイメージでかなり上がってくるわけです。そこから消費する女たちの浮上、発展ということが銀座の発展ということに重なっていったわけです。

それから巨大開発とか郊外型の再開発みたいなものがこれからどう展開していくのか。そうすると銀座のような中心地はどうなるのか。周辺からどんどん攻められていって中心は空洞化してしまうのか、それとも中心が空洞化した上で、再開発みたいなものを進めていくのか。それとも、中心は中心であり続けるのか。そういう関係の中で考えていくことが実は重要なのかもかもしれませんね。

* * * * *

長谷川 / 今まで私たちもいろいろな観点から議論してきましたが、今日のような浅草との対比とか、盛り場という視点で議論することはなかったですね。今日はそういった意味で総括的に話していただき、非常に示唆に富んだものになったのではないかと思います。

(1997年10月)

* 講演時にはスライド使用あり

「私が残したい銀座のあれこれ」



村國 豊

(株)都市マーケティング研究所 代表取締役社長
中央大学法学部法律学科卒。広告会社を経て、都市マーケティング研究所を設立。現在、同研究所代表取締役社長。

[公職] 第2回世界中小企業技術交流会及び博覧会 (MITEC'98)
日本企画委員会副委員長。東京都墨田区「すみだマイスターまつり」実行委員会会長。「曳舟駅前地区市街地再開発事業」に係わる『工房ショップ』事業化検討調査委員会委員長(住宅・都市整備公団)。『副都心錦糸町』地域活性化構想検討調査構想策定委員会委員長。神奈川県小田原市新総合計画に係わるコンサルティング業務。他多数。

[講師] 東京都立科学技術大学特別講師 (H9,H10)。他多数。

[絵画] 昭和40年、二科展入選。

[著書] 『新・マーケティング戦略』(日本実業出版社刊)

* * * * *

絵描きの目から見た銀座

村國 / 先般、皆様が今までにやられた研究の成果をお送りいただいて拝見しましたが、私にとっても興味のある研究で、この研究会自体に大変関心を持ちました。本日は、かなり主観的に銀座の景観の視点でお話したいと思っております。

私はたまたま絵を描いております関係で、まわりを見るときに、絵描きの目で見える習慣があります。ある町へ行ったときに、ここは私が絵描きとして絵を描きたくなる町だろうか、という見方をするので。そうすると、これは私の主観的なことで少し語弊があるかもしれませんが、

銀座を含めて日本の都市は絵を描きたくなる何か一種、衝動のような気持ちにさせてくれるところはないですね。これはなぜなのかと思いません。

たとえばパリだとかローマとか、アメリカの都市に行ってもそうですが、ところどころで絵描きの姿をみると思います。しかもプロの絵描きばかりではなく、アマチュアもあちらこちらで絵を描いている。皆さんそういう風景にめぐり合うことが多いと思うのですが、不思議なことに、東京の街を歩いていて絵描きが絵を描いているので注意してその前を避けて通ろうという配慮をするような経験はほとんどないと思いま

す。これはもしかすると大変な問題ではないか
と思います。やはり、絵を描きたくなる場所と
いうのは何か魅力があるのだと思います。実は
この問題を私はずっと考え続けてきましたが、
もともと日本の街というのが昔からそうだった
わけではありません。野口さんの本にも書いて
ありましたが、江戸時代の都市では安藤広重、
北斎など、いろんな画家や版画家が、日本の都
市なり日常生活をたくさん描いてきました。と
ころが明治以降のもので、日本の都市をテー
マに描いた絵は残念ながらほとんどない。たと
えば日本画の絵描きの絵を見ても、日本の「風土」
をテーマにして描いている。東山魁夷が銀座を
テーマに絵を描いているかというところと違
う。梅原龍三郎は薔薇の絵を描いたり富士山
を描いたりしているかもしれないけれど、都
市は描いていない。これは銀座に限りませ
ん。新宿の絵を描いているかといっても描
いてない。私はよく新宿の都庁に仕事で行
くのですが、まずあそこで絵描きがスケッ
チしているのに気づいたことではないです。
21世紀の日本は、もっと多くの外国人を
迎えるような観光立国にならないとい
けないと思っていますが、今の日本の都市
をそういう目で見ると、特に外国人の目
から見て絵になるような風景はないの
ではないかという気がするのです。私は
都市計画のメンバーでもありますので
これを自分の問題としても考えていま
す。

「中景」ばかりの街づくり

たとえば広重の絵で言いますと、向こうのほう
に富士山のような山があったり、もしくは遠く
に水平線があるというように「遠景」がありま
す。そして、手前のほうには朝顔の盆栽があり、
朝顔と富士山というのが描かれていて、その真

ん中に建物がある。日本語に「中景」という言
葉はありませんが、絵を遠近法で描いたとき
には、必ず真ん中の風景というのがありまして「遠
景、中景、近景」となっています。

広重は東京の街を描くとき、遠景に富士山、中
景にお城や茶屋といろいろ描き、そして手前
に朝顔の盆栽、というように立体的なものを見
事に描くわけです。しかし今、私たちが東京
の街を見るときには遠景が見えない。高い建
物に入ったとき「なんだ東京からでも富士山
は見えるのか」と、とても意外に思えるので
す。これは遠景を無視した街づくりの結果とい
うことでしょうか。それでは近景はどうなの
かということを考えますと、近景もあまり意
識されていないのではと思います。

つまり明治時代以降、遠景と近景はなくなり、
日本語にない中景ばかりつくってきたのでは
ないかと思うのです。たとえば両国の駅の前
を降りまして、江戸東京博物館の建物の隣
に国技館があります。これは全く違う異質
の建物が、調和しないで相反して背中合
わせに建っていると思います。絵描きの目
から見ても、ここは全く絵にしたい風
景ですね。バランスも悪いし、その絵
を見た人はきっと不快感を感じるよ
うなかたちになっているという気が
します。遠景には何もなく、近景
にも何もありません。たとえそ
こに朝顔の盆栽みたいなものを置
いたとしても、それは決して調和
しないと思いますね。

明治以降ずっと作ってきた近代文明国家の真
ん中に極めて文明的な、しかし私から見ると非
文化的な建造物が二ヨキッとあって、それが遠
景も近景も両方消し去っている気がするこ
ともあります。その典型的な例が今の臨海副
都心です。臨海副都心へゆりかもめで行き
まして駅を降りて目的地の建物まで行く間
の空々しさといった

ら、これは非常にづらいものがあります。そして、建物の向こうには房総半島が見えるのですが、その房総半島と手前にあるテレコムセンターの建物はまったく調和していない。これも気になります。

それで広重の時代は、もしかすると広重が絵を描きたくなるような都市構造を考えていたプロデューサーがいたのではないかと考え、いろいろなものを見に行きました。15世紀にローマの街づくりを頼まれたミケランジェロという人は本当の意味では建築家ではなくて、絵描きの目でものを見ていた人だと思います。今でも残っていますが、ミケランジェロが最初に盆地のなかにあるローマの街のシルエットをスケッチブックに描いているのです。そこには遠景として見える山の稜線と手前にある教会の尖塔が建っているのですが、教会のシルエットとうしろの山の稜線が、南のほうから見たときにはこういうふうに見えますよというようにスケッチブックに残しているのです。そして設計の人に「このシルエットに合わせたかたちで、専門的に設計をしてほしい」ということを依頼しているわけです。ローマは100年かかったなどと言われますが、ミケランジェロの後にはラファエロが継いで、二人の絵描きが全体のかたちをつくった。それがやはり後にスペインのセビリアだとか、バルセロナだとかにも影響を与えていますし、パリにも影響を与えているわけです。これは何か江戸時代にも共通していたと思いますが、明治以降の日本はそれを失ってしまったのではないのでしょうか。

その土地の景観を考えるということは私一人ではなかなか難しい問題ですが、これからは絵を描きたくなる都市づくりということに挑戦していきたいと思っています。

「花の東京」再構築

ところで「花のパリ」という言葉は、皆さんすぐに理解されると思います。「花のお江戸」というのも一般的な言葉だったと思います。しかし「花の東京」という言葉はないですね。皆さんに「花の東京」と言っても「何だい、それは」ということになってしまう。しかし「花のお江戸」というのは確かに使われていた言葉だと思うのです。

亀戸天神の藤棚は有名ですが、その藤棚がちょうど満開の頃、約一週間ぐらいの間に、普段はまったく人気のない亀戸の駅の周辺に人がたくさん群がります。銀座まつりほどではありませんが、だいたい一週間に約四、五十万人ぐらいの人が集まるそうです。日本人は非常に花が好きなんだと思うのです。藤の花以外でも、上野の山や隅田川のあたりは少し細々としかありませんが、桜が咲くと人々が集まる。これらはことごとく明治以降につくられた花ではありません。江戸時代からたまたま残されてきた上野の桜であり、そして千鳥ヶ淵の桜であり亀戸天神であり、それらは「花のお江戸」のほんの一部ですが、そこに人々が集まっている。江戸時代はもしかしたらもっとたくさんそういう「花のお江戸」と言われるのにふさわしいものがあつたのではないだろうか。それが今では消え去ってしまったのではないだろうか。そういうことも含めて、これはもう一度見直してみる必要があるのではないかという気がします。

私は銀座が大好きで、必ず一日に一度は銀座のどこかを徘徊しているというふうにもいいぐらいです。たまたまこの中央通りをずっとまっすぐ行きました田町の右側のところに住んでいるものですから、どうしてもこの銀座の中央通りというのが通り道になっているような感

じがありまして、すごくこの辺が好きなんです。しかし残念ながら私は一度も銀座の絵を描いたことがありません。さきほどからずっと考えていたのですが、なぜなのでしょう。実は私はすぐ隣にあります伊東屋さんで、いつも12月に私が描いたカレンダーを売っています。限定で売りますが、何人かファンの方がいるようで、だいたい3日で完売します。今年のもは私が25年ほど前にパリへ行ったときスケッチブックに描いてきたパリ近郊の風景を、もう一度去年の夏休みにカレンダーのために水彩画で描き直したものです。

そのように東京の街をカレンダーにしようと考えると、どういうふうになるのか私はちょっと悩んでしまいます。これはパリでなくてもいいと思うのです。ローマであってもいいし、もしかしたら中国の街でもいいのかもしれない。けれどもなぜか東京を含め、日本にある都市というのはみんな似ていて、絵心をそそらないという気がします。

銀座を眺めて

その関連でもう一つお話しします。今日は改めてショー・ウィンドウを眺めながらここへ来たのですが、以前ショー・ウィンドウのデザインをやっている方と話をしたことがあります。日本でのショー・ウィンドウというのは、前を歩かれる方のためにディスプレイしているということでした。したがってショー・ウィンドウは、前を歩かれる方から見て美しければいいわけです。ところが、私がパリへ行って感じたことは、特にショー・ウィンドウが非常にきれいだったということでした。そこでパリのショー・ウィンドウデザイナーに話を聞きましたら「私たちがショー・ウィンドウをやるときには、道を挟んで

反対側の歩道を歩いている方から見て美しいディスプレイをします」と言われました。「何か素敵なものがあるな」「あのショー・ウィンドウ、きれいだな」というふうに、いわゆる絵画の額のように見えるのでしょうか。そうするとその反対側を歩かれた方が気になって渡ってきてくれて、そのショー・ウィンドウを見に来てくれる。しかし東京は反対側を歩いている人なんて全然意識していません。ですから向こう側に渡って、きれいに見えるかどうかというチェックはしないのだと思います。しかし最近は少し進歩してきていますね。

先ほど言いました距離感というところで、そういうことへの配慮がものすごく出てくる気がします。照明の専門家の方で石井幹子さんという方が活躍されていますが、建物を照明するのに間接的に照らす手法が、最近では日本も少しよくなってきたとおっしゃっています。しかし私は今でもまだまだ遅れているのではないかと思うことがあります。私も広告の分野にいたことがありますのであまり言えないのですが、日本の街のなかで問題なのは屋外広告だと思います。屋外広告の美しくない様子、これが問題ですね。銀座は規制があるようで、かなり整然とされているように思うのですが、それでもパリだとかローマだとかニューヨークに比べると、やはり美しくない。この屋外広告の問題を研究しないと、どうも町の品位が上がっていかないのではないかという気がします。

そういうことで銀座にもう少し何か魅力をつかっていくために、絵描き仲間が「みんなで銀座へ行って絵を描こう」といって、みんなで絵を描いているような風景になって、モンマルトルの丘のような風景ができれば、少しは様子が変わるのではないかという気がするのです。「おっ、銀座って何かすごく芸術的だな」というよ

うな。銀座はギャラリーがいっぱいあるわりに、絵描きがないというのは不思議な感じがします。たとえば絵画の先生が「銀座ということテーマにして絵を描きなさい」と言ったとき、生徒たちがどう反応するか、ちょっと聞いてみたいですね。そしてその宿題に対してどんな絵を描いてくるのか、すごく興味があります。

つぶされた江戸の文化

最近、私は江戸までの日本と明治以降の日本ということを考えてとき、明治が江戸をつぶしていった歴史というところに注目しています。

海外から非常に高く評価されている日本固有の文化のなかには、たとえば歌舞伎だとか大相撲があります。大相撲は特に人気がありまして最近ロンドンあたりでも、丁髷を真似して裸になってお相撲さんみたいな格好をしている人が出てくるほど、相当日本ブームが浸透してきているように思います。その相撲に引き継がれている、丁髷や土俵、まわしなどといった伝統的な様式というのは、今のこういう時代のなかにあっても、あまり違和感がないような気がするのです。つまりこれらに違和感がないということは、もしかしたらもっと多くの江戸の風俗が残っていても良かったのではないかという気がするのです。

司馬遼太郎先生だとかその他多くの先生たちは、明治維新の時の志士達を、どんな形にしる近代日本の国家をつくっていった最も素晴らしい人達、英雄だという位置づけで強く前に出されていて、彼らが犯したマイナス点などにはあまり触れないものですから英雄像だけが見事にイメージとして定着していると思います。しかし想

像するに、20代の長州藩に住んでいた若者と薩摩に住んでいた若者が江戸に上ってきて、あの当時の江戸の文化、260年かけて完成された日本固有の文化を見たときには、非常に衝撃を受けたのではないかと思います。おそらくその江戸の文化は彼らにとっては震えおののくくらい素晴らしいものだったのではないかと思うのです。たとえば江戸東京博などで吉原の芸妓が着ていたような着物の生地一枚を見ても、今でもちょっと考えられないくらい素晴らしく絢爛豪華なものを着ています。そのような技術や当時の様々な衣食住すべてにわたる様子は、変な言い方ですが、長州と薩摩の田舎侍が出てきて見たときには、まさに竜宮城に来たような感じだったと思います。そしてこの圧倒的な文化を前にして、俺たちは負けてしまうのではないかと思ったのではないのでしょうか。それではこの江戸をつぶして新しい新政府をつくる時、これに勝てる文化はいったいどこから持ってきたらいいのだろうか。長州や薩摩の文化を持ってきて勝てるのかといたら、おそらく勝てないと判断したのだと思うのです。その時、外を見たわけですね。パリがちょうどエッフェル塔を造っている時期です。たまたま丁髷を結って万国博を見に行ったら、そこには圧倒的なフランスの宮廷文化があり、イギリスに行けばもう汽車が走っている。これらに圧倒されたのだと思うのです。「よし、これなら勝てる」と思ったのでしょう。これらは私の主観的な見方ですが、もし私が大久保利通であれば、やはり「よし、これを持って来てしまおう。そうすればあの江戸のすごい文化にとって代われる。」と思ったと思います。そこに一種コンプレックスの裏返しとして欧化主義があったのではないかという気がしているのです。もちろん、これはある意味では評価されるべきことですが、私が残念でならないのは、そういう海外から持ってきた素晴

らしい文化を導入すると同時に、中央集権的な江戸にあった日本固有の文化も潰さずに、大相撲のごとく保存、伝承してくれていたなら、今の日本の都市がもう少し違うかたちで世界に誇れるものになっていたのではないかと思います。

江戸時代の創造性を蘇生させる

また明治以降、欧化主義によって日本人は世界一の物真似のうまい国民であるという一種の蔑視感情や蔑視的な評価があります。ところが実はそうではないと思うのです。日本人は物真似もうまいけれど、実は独創的な創造性も持っていたと私は思います。

それはどういうことかと言いますと、江戸時代までにつくりあげてきた、特に江戸の鎖国期につくりあげた日本の固有の文化というものは、ほとんど日本人の創造性によって誕生しているということです。これはたとえばゴッホとかセザンヌといった皆さんもご存じの印象派の絵描きたちが、当時の日本の版画家たちの試みを最も先進的なアートだと評価していたことからわかります。彼らにしてみると、なぜ日本という国にこんな素晴らしい創造性があるのか。彼らはそういった敬服の念を持っていたわけですが、その時、日本自身がそれらを正しく評価できなかったために潰してってしまったのだと思います。

明治の初期、フランスの絵描きでピゴーという人が日本に来ていました。なぜ彼が日本に来たかといいますと、歌麻呂や広重、北斎らのつくり出した日本の芸術を勉強したくて来たのです。ようやく日本に来て、そして版画を教えるところはないかと探したそうですがどこにもなかった。上野の山へ行きましたら美術学校が

あったが、日本の版画を教える先生はいないし、今の新政府の元では一切そういうものは「ノー」であり、江戸にあったものは全部つぶせということになっていると。そこでは油絵科があるというので、聞いてみると、フランスやイタリアの油絵を勉強しているという。実際に見に行ったら「この程度の油絵の練習では、私たちフランスの油絵に追いつくためには100年はかかるだろう」と思ったそうです。そして「日本人はなぜ何百年もかけてやってきた日本の版画という素晴らしいオリジナリティーを継承しないのか」といったら、「それらはもう全部ありません」「版木はどこにいったんだ」「いやそんなもの、どこにもありません。もう二束三文でどこかに売り飛ばしました」。そうやって日本の版画はなくなったというわけです。

実は今、私は墨田区で仕事をしているのですが、今度「北斎館」というものができます。そして両国のところに「北斎通り」という名前の道まで作ろうとしています。この北斎館がなぜできたかと言いますと、大森の貝塚を発見した考古学者のモース博士が、貝塚を掘りながら併せて興味があった日本の文化を徹底的に調べまして、北斎の作品のほとんどの版木を買っていた。私の想像ですが、考古学者の給料が当時どのくらいだったのかは知りませんが、そういう人がサッと買えるくらいの二束三文で買っていった。それもほとんどの作品と版木を。これをモースが母国へ持ち帰り、モース家の倉庫の中に保管していたのでしょう。考古学者ですから、おそらくきちんと保存していたのだらうと思います。そしてそれらが最近になって、ハーバード大学に通っているお孫さんによって見つけられた。倉庫を調べていたら、何かよくわからないものが出てきて、中を見たら北斎の版木だったというのです。19歳のハーバード大学に入ったばかり

りのお孫さんは「これらは私が持っていて意味がないから、日本に戻そう」といってこの生誕の地に持っていこうと墨田区に問い合わせたそうです。それらを評価したら、大変な価値のものだということがわかったわけです。もし今これを通常の画廊で商売したとすると、何百億というくらいの価値があるそうですが、私が偉いと思うのは、そのモースさんのお孫さんは「そんなのいらない」と言ったそうです。しかし墨田区としてはタダでもらうわけにはいかないからという話になって、あまり正確ではないかもしれませんが、約一億の予算でそれら全作品を買い戻したようです。このモースさんのお孫さんも素晴らしいと思いますが、日本人が捨て去ったものをそうやって評価していたアメリカのモースさんは本当に素晴らしいと思いますね。そして、一億円で返してもらったことも非常に嬉しいわけですが、一方では、銀座煉瓦街が燃えるくらいですから、もしかしたら日本の土蔵ではたぶん保存できなかったとも思われるので、結果論的には良かったのでしょうか。

こうしてかろうじて守られてきた、江戸時代のそういう創造性というものを、私は銀座の問題を含めて、私たち日本人がもう一度再蘇生させ、回復していかなければいけないのではないかと思います。日本人は物真似だけが得意なのではない、という自信をもう一度持ち直して、世界のどこにもないような固有のものを私たちは創り出すことを、今からやっていかなければいけないのではないかという気がしてならないのです。

原点を見つめる

私は最近、この経済が不況になっている時期にいろいろなところで申し上げていることがあり

ます。バブル期までの日本は、欧化主義で何でも西欧が良いというような、たとえばビルをつくる時でも、何かエッフェル塔よりデカイものをつくりたいといった傾向。または、ニューヨークの街みたいなものをつくりたい、といったそういった風潮がありましたよね。しかし今はそうではなくて、やはりもう一度原点を見つめる時期なのではないかということです。日本人一人一人が足元を見詰め直す時なのではないかなという気がするのです。

世の中がこんな不況のなかで、その足元を見るということは、私はやはり一つまず自分を見つめるということが、重要だと思っています。それから二番目は家族です。家族とか故郷を見つめ直す方向にいますと思うのです。どうもバブルの時までは、ハワイに別荘を持つようなんで言って騒いでいましたが、今は全然そうではなく、むしろ「俺が生まれたところがどうなっているのだろう」と、そういうことをみんなが考えている時期なのではないでしょうか。この原点に戻ろうとしているベクトルが、そこからまたいろんな方向にいつている気がします。

それからまた、最近では人から聞いた話ということ信用しない時代になっているという気がするのです。たとえば「どことこのシンクタンクが言ったのだから株は上がるよ」と言って買ってみたら駄目だったとか、「テレビが言っているのだからあの宣伝は正しいよ」というのを「これもどうも怪しいな」と思ったり、「あの会社はつぶれないよ」「いやいや、怪しいな」と思ったりしていますね。これはどういうことなのかというと、私は何か一次体験とかライブ主義というものが重視される時代なのだと思うのです。

昔たとえば典型的なサラリーマンの幸せな家庭

たとえば、土曜日の夕方になるとお父さんがソファにごろりと横になって缶ビールを飲みながら野球を見て「いやぁ、巨人が勝ったな。いいね、長島は。」って言って缶ビールを飲んで、ほろ酔い気分でグダグダそこで寝転がっている親父がいる。これが、何か一つの典型的な幸せ家庭像だったわけです。しかし今はどうもこういうお父さんは軽蔑されているのです。そんな缶ビールで野球なんか見てひっくり返っている親父なんて駄目だよと。そして、前より野球が面白くないのに、なぜ野球場が満員になるのか不思議に思っていたのですが、あれは別にジャイアンツが強いから満員になっているのではなく、前みたいに間接的にテレビを見て野球を見るというのは、おしゃれではないんだ、自分で行って見ることがいいんだというふうになっているからではないでしょうか。これは一つはJリーグのサッカーが影響を与えていると思います。やはりサッカーもその現場に行って、サポーターになってみて初めてあの面白さがわかるというのがありますよね。そういうライブ感覚とか一次体験感覚というのがものすごく大事になっているわけで、これは先ほど申し上げた原点思考の延長線上にあるような気がします。

この間、テレビ局の編成部長と話したのですがやはり、まさにそうなのではないかといっていました。たとえばテレビで「いい温泉があります」ということを伝えようとして、昔だったらその温泉へ女優さんを連れていって「ああ、気持ちいい」とその表情を撮る。そうするとテレビを見ている人は、「ああ、良さそうだな。だけど自分は面倒だから行かないな」といって見るだけだったけれど、今はそうではないんですね。ここにいい温泉があります、ということ伝えれば、世の中のお母さんたちは実際にそこに行くのだそうです。行って見て「テレビで言

っているのは嘘じゃないの」「私に来たら全然よくないじゃないの」って言って怒ったりするらしい。そういうふうに参加型になってきているわけですね。

そして何より 10 年前と圧倒的に変わったのは銀座の街角なんかで取材をする時に、カメラを向けて「最近の橋本政権をどう思いますか」なんて言うと、みんなほとんど昔は逃げたというのです。マイクを近づけたら「いやいや私はちょっと失礼します」、「いやいやいや」と言ってみんな逃げた。それが今では、こうやってマイクを向けるとバーツとみんな来て、どんどん意見を言うのだそうです。昔だったら「私、ちょっと、会社の関係がありますから、出たくない」と言っていたのが、今はもう全然関係ない。大企業の重役さんでも誰でもみんな、悪いことしてない限りみんな出てくる。もうとにかくテレビのカメラが行ったら逆に群がるというような感じになってきて日本人が体質的に変わってきていると思うのです。以前ジュリアナで、女の子たちがワーツと踊っていましたね。みんな参加して踊るというようなことが恥ずかしくないんだということ、これも一次体験主義のはしりなのではないかと思うのです。昔の日本人の引っ込み思案のようなものが少し様変わりしてきているような気がします。そして、それがどんどん進むのではないかという気がするのです。

もう一つ同じ原点思考の一つですが、一次産業、二次産業、三次産業と来て、次はどこにいくのだろうということ。よく青山通りでコピーライターになりたいといっていた人が、最近コピーライターでは飯が食べられなくなった。それでコピーライターでなかったらフリーターでいいや、といって名刺に「フリーター」と書くとかっこいいとか。そういう時代になっていて、第三次産業の端にこぼれそうになっているよう

な人たちがいっぱいいるわけです。しかしこれはほとんど根無し草みたいなものですね。

また原点思考のなかで面白いと思うのは、世の中がもう一度、一次産業に注目していると感じられるところです。確かに最近元気がいいのは、かつての一次産業のなかに芽生えてきていたものだという気がするのです。たとえば農業がバイオだとか水耕栽培など新しい技術を導入して、新しい付加価値の高い産業として生まれ変わろうとしている。その延長で具体的な例を挙げると、東京農業大学みたいな大学が偏差値が高くなってきて競争率が激しくなっているということです。特に女の子がたくさん受験するようになった。以前は女の子にとって農大という学校のステータスが決してカッコいいことではなかったのが、今ではむしろそういう農業を考えるのがカッコいいんだというふうになっている。そういうことが私は非常に面白いと思っています。それから漁業もある意味で非常に注目されている気がします。最近の漁船を拝見すると、もう蟹工船的漁船などではなくなって、冷暖房完備、なかには厨房がきっちりついていて、とりたての魚で毎日うまいものを食べて、素晴らしい環境のなかで活気のある生活をしているわけです。また園芸の世界も非常に注目されていますね。

今はそういう「ものづくり」というところに戻ってきているようですね。私は今、墨田区で「マイスター運動」を一生懸命やっているのですが、そういういってみれば宮大工さんのような世界とか、そういうところにいろんな方がまた戻り始めているわけです。

相対的に見ますと、先ほど問題提起した日本人の創造性が再蘇生するという意味で、その芽がすでに育ち始めているのではないかと思います。

これまでのように何も欧化主義一辺倒ではなく、例えばもう一回、宮大工というものはいったい何なのか、というようなことを見つめるという原点思考に戻ってきていることに、私は少し勇気づけられる気がしています。

21世紀の日本が他に例を見ない、個性的な日本の姿というものになっていくためには、今申し上げてきたようなことが重要になってくるのではないかという気がしていて、それがこの銀座の街にも何か影響してくるのではないかと思います。

銀座は日本の中心

最後に銀座について、今の話と少し趣を異にするのですが私の思っていることをお話したいと思います。

皆さんは日本の中心はどこかということをお考えの場合どこをイメージされるでしょうか。丸の内だとか、霞が関ではないかとか、永田町といった地名が出てくると思いますが、私はこれはまったく違うと思います。

私はやはり日本の中心といったときは銀座だと思ふのです。それはどうしてなのかと言いますと、戦後最初に聞こえてきた歌が何かといった時、やはり笠置シズ子の「銀座ブギウギ」が印象的です。そして流行歌の始まりを考えた場合も決して「柳が瀬ブルース」から始まるということはないと思うのです。やはり銀座があって、柳が瀬銀座であってみたい。デュエットも「銀座の恋の物語」がスタートのような気がするのです。まず「銀座の恋の物語」があって石原裕次郎は次に札幌の歌を歌うのではないかと。そう考えると、やはり最初のスタートは銀座なの

ではないかと。それが日本人から見たときに納得するところなのではないかと思うのです。そうして私たちの気持ちの収斂していくところには銀座があるのではないかと思っています。

私は東京生まれでずっと東京育ちなのでわからないのですが、今度、地方からお客様をお迎えた時に「今日、どこでごはんを食べましょうか」と一回聞いてみようと思っています。例えば「今日は新宿でご飯を食べましょう」と言うのと「今日は銀座でご飯を食べましょう」と言うのでは、どちらが嬉しいと思うのか。「今日は渋谷で食事をしましょうか」と言ったときはどうなんだろう。また新橋は銀座の隣ですが、「新橋に行きましょう」といった時、少し何か違う印象があるのではないかという気がするのです。

そういう意味から今の赤坂の迎賓館を考えると少し寂しくなります。たとえばフランスの大統領をあそこに連れて行って泊めるという行為が、私にはどうしても不思議でならないのです。今のフランスの大統領もそうですが、日本通の方が多いです。彼が言うにはなんと云ってもやはり日本では京都がいいそうです。ですから私は今の迎賓館に外国の要人をお迎えするのは、少し恥ずかしい思いがしています。やはりそういう意味で地域のイメージというのは非常に大事で、これは歴史的に非常に貴重な無形の財産なのではないかという気がしています。そういう意味でも銀座らしさというものには、何かやはり私たち日本人の血と肉から出てきたような香りがするものであってほしいという気がするのです。

(講演終了)

* * * * *

- 全体議論より -

銀座は平らになったのか

村國 / 私は一つ野口先生に教えていただきたいことがあるのですが。一時期、電通の新しいビル建築のために汐留の下を掘っていたら、鍋島家の下屋敷が出てきて大騒ぎになったことがありましたね。ここは少なくとも明治になってから、かぶされているわけで、江戸時代にかぶせているわけではない。しかもあそこには汽笛一声新橋の汽車が走っていたわけですから。ですから、おそらくその前後に埋め立てていると思うのですが、そのことが文献や公文書に残っていないというのが、私にはとても不思議な気がするのです。残っていれば、この下に鍋島が埋まっているということはわかっていたわけで、それなりのことがあったと思うのです。しかし実際には、掘っていたら何かが出てきて、調べたら鍋島だったということですよ。

地図を見てみますと、この銀座の辺りは汐留のところから真っ平らになっています。それで皇居のところから皇居前の日比谷通り、丸の内、そして銀座界限と調べてみますと、だいたい虎ノ門から芝一帯がずっと平らだということがわかります。それから京橋、日本橋、神田、そして新宿の方は山になってしまうのですが、その辺りまではだいたい真っ平らです。しかし広重の絵などを見ていると、江戸の町はけっこうデコボコしていますよね。つまり江戸の時の銀座界限は尾張町界限ともう少し山坂があったのだと思います。しかしこれが真っ平らになってしまったというのはどういうことなのか。もしかすると、この下には鍋島藩どころか、もっといろいろな屋敷が下には埋まっていて、しらぬふりをしているのではないかという気がしてい

るのです。

もしかしたら、あの当時、江戸に進出してきて何か一気にここを真っ平らにするという作業をやり、近代都市をつくるためにものすごい一種の暴挙をやったのではないかと私はなんとなく勝手に推測しているのです。それでは、その埋め立てのための土をどこから運んできたのかと思い、調べてみたら、ちょうど荒川放水路を掘り始めたのがその頃なのです。あのぐらいの土を持ってくると埋まります。相当遠くから持ってくるというわけにはいきませんから、おそらく下町の向こう側ぐらいから土を運んできて、真っ平らにしたのではないかと。そうしなければ、あの時期にあんな大きな川の放水路をつくることはできなかつたらうと思います。

野口 / だいたいこの銀座付近はもともと湿地でした。しかし明治に都市になったその段階では真っ平らになっていたようです。ただ、汐留のほうはそれに土をかけたようです。公文書のなかには新橋駅、つまり汐留駅をつくるときに、銀座の焼け跡の瓦礫で埋めたと書かれています。当時はいわゆる土壁でしたから、わりと良質の埋め立ての土になったようです。

銀座の特徴を復活させる

前田 / 明治の東京が、田舎侍のコンプレックスによってつくられたという説はなかなか新鮮で、説得力があると思います。理由はともかく、欧化主義を進めたためにもともと江戸時代にあった成熟した文化が失われてしまったということは、確かに言えると思います。

しかし銀座に限ってみれば、欧化主義が入ってきたから輝いたというところもあります。そう

いう意味では江戸時代の良さと新しい欧風の文明の両方によって、アンビバレントな魅力をつくり出していたのが銀座だったのではないのでしょうか。また、庶民的な下町とハイソな山の手が混ざり合ったアンビバレンスもあり、そこが面白いところだと私は思っています。

ところがお話にあったように、徐々に江戸の方が負けていくわけです。そしてだんだん影が薄れてきて、戦後の高度成長期になると、今度は欧風とか日本風とかというより、もっと強力な商業主義というか、石油文明に裏打ちされた現代化、近代化が流れ込んできたことで、その両方ともが押しつぶされていったわけです。ですから、もとの部分を何らかの形で復活させる必要があるというご意見には大賛成です。

先ほどおっしゃったようなヒューマンスケールの「近景」をつくるということと、手づくりのものを復活させるということは非常に通じるものだと思います。ですから、墨田区でやっている「小さな博物館運動」などは素晴らしいと思います。私も参考にさせてもらっています。銀座にも、ああいうことがあってもいいのではないかと思います。

村國 / 実は最近興味が出てきたことで、非常に面白いと思っている一つの要素があります。それは小売りの面白さということです。買う側とか売る側ということの境界線を飛び越えて、ものの売り買いにはエキサイティングな状況というのがあります。ほしいものがそこにあり、手に入れるときには喜びがあるといったいろいろなことがあります。しかし日本の小売りは、一方ではどんどん無人化しているという状況があります。たとえば無店舗販売などもそうですし、コンビニエンスストアなどでもっと機械化されていくと、最終的にはもう人がまったくいない

ところで、ものの売り買いが行われるという状況がどんどん進むと思います。特に人件費の問題などいろいろな問題がありますから。

そのような時、銀座はそういう方向に行くのではなく、むしろ再び人間の温かみとか、本当の意味での専門店の良さというものを継承していく町としてあってほしいと思っています。私は時折、三越だとか銀座の百貨店の地下売場に行きますが、賑わっていますね。特に魚屋さんとかのいわゆる対面販売の面白さがそこにはありますね。最近の若い奥さんなんかは、魚をどうやっていいかわからないようで、時々「この魚どうしたらいいですか」と聞いていて、魚屋さんがいろいろ教えていますね。これはかつての魚屋の良さ、つまりプロの売り子がいる感覚がそこにはあるのだと思います。同じように洋服屋でもそうだと思います。一度オーダーメイドから離れていった人も、やはりまたオーダーメイドに戻ってくる。銀座のこの規模でしたら、そういう銀座ファンだけで成立していくように、消費者の方も育っていくというかそうなるような気がします。

三枝 / おっしゃるように銀座では、自動販売機とは対極にある売り方をしようとしているのですが、これがなかなか難しくて。まだ充分ではないのですが、そういう意識は銀座の連中は大体持っています。お客様との気持ちの交流の中で買っていただくという、その対策というものをこれから進めていく姿勢はあります。しかし、それが若い人たちに通用するのかどうかというのが、また非常に問題で、今の若い人たちというのは、親父が出てきてうるさいことをいうのを嫌い、かえってああいう親父がいてイヤだとか、自分の欲しいものは欲しいのだから、お金を払って、ただ黙ってモノだけよこせばいいじゃないかというような気持ちもあるわけです。

ですからそういうのはこれから通用していくかどうかという問題もあります。昔は衣料専門店というのは店の方で客を選ぶといったことをしていました。ですからそれで何もスーパーマーケットのように、ものすごい投網をかけて一網打尽にしなくても、そういうのが良いとって下さるお客様を大切にしていればなんとか生活できたわけです。店が客を選ぶというのは、お客様に対してはいえない言葉ですが、自然にそうなるところがあります。

島田 / いわゆる今、いろいろと行き過ぎた近代主義みたいなことが批判されて、いわゆるポストモダンみたいな言葉が出てきていますよね。日本でも確かに明治以降のレボリューションで、ある意味では確かに良さを失ったけれど、しかし戦前まではまだ要するに和洋折衷のある種のオリジナリティーというのがあった。それが戦後、特に急速な経済成長の陰でかなり壊れてしまった。

戦前は素材を家庭側が購入して、家庭側の加工で消費する、そういう時代だったわけですが、戦後というのはある種、企業側が材料を全部生産加工して完成品として供給し始めた。いわゆる老舗も企業家みたいになってしまって、そこである種、大量に売ろうとする方向になり、そこで本質が見えなくなってきたといったようなことがあったのだと思うのです。それに対して最近では、自分でやるとかあるいは体験してみるとか、日曜農業のようにいわゆる自然と非常に近くなって暮らす。そういうことで様々な分野、それはたとえば洋服でも既製品を買うのじゃなくて、どうも自分なりに何かさらに工夫をするということが、かなり若い人の間でもはやっていて、ミシンというのも一般の人にはふりむかれなくなっていました。また再びミシンが新たに出てきていたりします。そういうレベルで

は、いわゆる手芸や園芸も戻りつつある。そういう意味では、おそらくある種のコミュニケーションというか、コミュニケーションの本筋の復活というのをみんなが求めているのだと思います。すべて完成品だけで、コンビニエンスに都市化されていくこと、誰にも影響を受けず、干渉されない、ある種そういう生活価値みたいなものによって変わってきている部分も多いですが、他方で何かもう一度原点へ立ち返るという動きが出てきていると思いますし、そういう感覚は非常に大事だと思います。

ですからやはり銀座というのは、私は少なくとも新宿や渋谷とか、ああいうところよりもまだそういうある種の価値をまだ残しつつきているので、そういう意味で、改めて本当のコミュニケーションとか、新鮮味も、伝統とか品位とかを大切にしていきたいと思っています。まさにそういうものが今また再び注目されているおり、若い人はそれを理屈ではなく感覚的に感じているかもしれないと思います。

都市の緑化

島田 / 銀座にいろいろな小さなもっとヒューマンスケールなものを蘇生させることが必要だと思います。ただやはり一番難しいのは空間的にどうにもいじれないジレンマみたいなものがある。景観も含めてそこがやはり一番の悩みではないかな。本当に魅力がある空間というのはやればできるのしょうけれど、あらゆるがんじがらめの権利意識と法的規制と様々なものが交錯し合って銀座は身動きがとれなくなっていますね。

前田 / 確かにね。せめてスカイラインぐらいいじりたいですね。今のところ、次善の策とし

てそういう「小技」をやるしかないですね。

村國 / 私は、さきほどの「花の東京」ではないですが、たとえばパリはご存じのとおり木一本でも四季の感じがよく出ています。「枯れ葉」という歌があるということは、やはりそういうふうに木が枯れて散る木があるからこそ、そういう歌があるわけで、日本の場合どこへ行っても似たような木ばかりというのが、過去にはずいぶん多かったような気がします。

私はよく建設省公園緑地課だとか、東京都の公園緑地課の役人の方と話をしますが、とにかく彼らは全部緑にすればいいんだという考えなんですよね。本来「緑化」ということはいったいどういうことなのか。私たち絵描きの考えで言うと、それは何も緑だけを指しているわけではなくて、要は「植物を」ということでしょう。しかし、お役所で言うのは全部常緑樹なんですね。何でもかんでも常緑樹。そしてできれば葉が落ちないほうがいいわけです。どうして葉が落ちないほうがいいのかというと、掃除が面倒くさいと言うんです。そんなことを言ったらパリなんかポプラは全部散るし、銀杏は散りますよね。そうすると銀杏の葉っぱは滑るとか、誰が掃除をするんだとか、とにかく掃除代が大変だとか、そんな議論ばかりしていて。非常に不思議な気がします。

また、東京の人たちは公園が少ないという議論をよくしますね。青島知事が世界都市博の問題が起こった時に、あれをどうしようかという見直し論をやりましたね。そうしたら、あそこを全部公園にしてしまったほうがいいという意見が出たりしました。都民は公園を求めているのだ。しかし私にはこれは疑問なんです。確かに公園を求めているのかもしれないけれど、たとえば代々木公園の一年間の入場者数を見ると、

寒気がするくらい少ないです。隣の原宿は人が群がっているのに。渋谷もご存じのとおりです。しかし隣接する代々木公園にはほとんど人がいない。たまたまイラン人の人達が行くところがなくて代々木公園に集まるようになった。そうしたら網を張って全部閉め出してしまったという状況ですから。ある人に、どうして代々木公園に行かないのかと聞いたら、あそこは緑だけで面白くないと。花も咲いてなければ何にもない。ただ緑が延々とあるだけだと。それで散歩に行く人も非常に少ないようです。近所の人がちっと犬の散歩をしている程度でしょうか。このような状況で、本当に東京都民はあのような公園を求めているのか私にはどうにも疑問なんです。しかし、先ほどもお話ししましたように、たとえばそこに藤棚が集積されていたり、桜があるようなところであれば、人は行くのではないかと考えています。

島田 / その辺りおっしゃる意味はよくわかります。しかし、そういうある種のライフスタイルとして、やはりこれは一つ提唱していく必要があるのではないかと私は思っています。確かに日本人のなかに、そういうお祭り性というか、そういうものの方が好きだという感じはあるかもしれませんが。しかし個人的なことをいうと、いわゆる自然の緑もやはりものすごく重要だと思うのです。

私はバブル期の頃、休みというところから中を歩いていました。太田市場の横に野鳥の小さな公園ですが、サンクチュアリがあります。あれだけ人工のもので時間が経過すると、本当に素晴らしくなりました。人工的なもので時間を経るとものの見事に変化するという、歴然とした証拠だと思います。私はほとんど毎週、300円を払って行っていますが、本当に素晴らしいところですよ。よく東京には自然がないとい

いますがそんなことは全然なくて、そういう意味では、今はみんな気付いていないだけ。興味を持っていないだけで、実は以外と多いです。

前田 / 都市の生態系を考える上でも、やはりそういう広いところはあったほうがいいと思います。身近な緑や自然と人工とが一体となったようなものが、都市の中に必要だということも、おっしゃるとおりだと思うのですが、それと同時にやはり大きな公園もあったほうがいいと思います。そこには、たとえ入れなくてもいいのです。その典型が皇居です。あれだけ広いところで、しかも最も地価の高そうところで田植えが行われていたりする。それでも都市環境にとって非常に意味があるわけです。日本の都市や文化の特質として「中心が空虚である」ことをしてきたのは、ロラン・バルトですが、空虚な「空地」がポツポツとあるから、その周りが生きてくる。「空地」というのも、とても重要なんですね。

島田 / 日本の場合、そこに公園緑地法というもののや、特に都市などでは児童公園などに妙な規制があってジャングルジムと何と何とかがなければいけないなどといってきて、実にくだらないです。とにかく何も公園、芝生しかないとか、木しかないとか、そういう感覚がむしろ今は大切で、すべてそこへ向いているような気がします。ですから日本にもハイパークやヨーロッパの公園のようなものを作るべきです。

村國 / 代々木公園の場合、あまりにも規制が厳しいために、例えば朝8時にしないと開かない。近所の高齢者の仲間の人たちが朝、6時頃から始まるラジオ体操を公園でやりたいと考えても、規則である公園は8時からしか開けないことになっているので、駄目だと。こういうのは問題だと思いますね。夕方6時になると閉

めてしまう。他にも木に登ってはいけませんとか、ボールは投げちゃいけません、自転車で走るなどがいろいろ書いてあります。

鳥田 / 安全管理上の問題で、管理する職員の労働時間の問題とかいろいろあるのでしょうか。私もたとえば東京都の野鳥公園を夜開けてほしいと思っています。ゴイサギとかの夜行性動物の生態を観察するためには夜でないといけないわけです。昼間はほとんど寝ているので、面白くないのです。常時でなくてもいいので、たまに開けるようにしたらどうかと思います。アメリカの水族館では、夜子供たちに徹夜で見せるというようなことをやっていますね。

現在のそういう日本の行政の姿勢が、この銀座の街にしてもそうですが、すべてに渡って影響し合っていると思いますね。

村國 / たとえばこの銀座の街をどうしようかということ、中央区の皆さんや、銀座の街の方々考えたとき、実際にはたとえば東京都とか中央区の方がやりになるわけですね。そうすると、その人たちが皆さんの考えに納得しない限り、計画したようにはなっていないということでしょうか。例えば、木は全て柳にしてくれと仮に言っても、柳は認めないとなれば、もう駄目になってしまうのでしょうか。

三枝 / そうです。それで困っています。すべてがそういうものとぶつかってくるわけです。たとえば、銀座通りは国道なので建設省の管轄なんです。建設省としては、地域のことを考えていたら道路みたいなものは管理できないという考えですから、銀座通りのように京橋から新橋までのほんの短い区間で、そこだけ特別なことはできない、といって全てが終わりです。どうしようもないです。

家業と企業の考えの違い

長谷川 / 銀座の次世代の経営者の方々というのは、それなりに次の銀座というものを考えているのでしょうか。今日、三枝さんがおっしゃったような話ですが、良い意味で店がお客を選ぶというそういう思想を私も非常に良いことだと思うのですが、次の銀座を担う商いの方々というのは、そういったお考えでやっていこうという意志はお持ちなんでしょうか。

三枝 / 私たちの世代では、少しずつ微妙な違いはあるにしても根本的にはそういう考えが残っていると思います。しかし今、このバブルの後のいろいろな問題があって、いわば家業みたいなものや専門店でそれらをなかなか継承できない状態にあるということがあります。そして、後継者の問題とか職人がいなくなって商品ができなくなってきたなど他にもいろいろな問題があります。そういうことからいえば、昔の銀座というのは明らかにそういう家業を中心とした専門店の街でしたから、親父どもが集まれば話も合うし、そこで決まったことは実行できていたのですが、今はご承知のとおり、銀座はブランドショップで有名になってきています。ブランドショップというのは国際的な資本が支店として出てきているわけです。それから大きな会社が支店を出すとか、メーカーが小売り部門を出すと、非常に大きな企業の発言力が強くなってくる。そうすると、銀座の街の我々のような何代か続いたような専門店の親父だけでは抑えられなくなって、街の性格も変わってきています。それはそれで、いろいろバラエティが出てきて、うまくやればいいのかもしれませんが、銀座の中のそういう専門店、いわば家業的なかたちで育ってきた専門店の力が相

対的に低下していることは、もう明らかです。大会社の支店というのは、銀座の街には悪くないのですが、感覚は全然違いますね。銀座に対する愛着とかそういうものは出てくると思いますが、街に対する感覚が違うのでいろいろな面で話が合わないわけです。そうすると誰もリーダーシップがとれないまま、雑然とその土地の勢いに流されているのだということを非常に強く感じます。そこがやはり問題なんです。これからの銀座というのは変わらざるを得ないという気がします。

前田 / そういう文脈を見ると、中央通りに立地するこの読売広告社の役割というのが見えてくるのではないかと思います。家業的な経営が少なくなってきたなか、銀座によその大企業が入ってきた時、企業市民としてこのコミュニティに参加する方向性を示さなければいけないのですが、それを昔からの専門店の人が言いにくいということであれば、広告代理店である読売広告社のようなところが、その役割を担ってほしいと思いますね。

三枝 / 読売広告社さんにやっていただければ、それはいいですね。何にせよそういうものができてこない、なかなか方向性を打ち出せません。銀座通連合会というものがあって、そこには銀行も入っているし、企業も入っていますが、やはり話がかみ合わないですね。街を良くするということについては別に異論のある人はいないのですが、方法論とかということになると、もうまちまちになってしまって。昔の銀座通連合会は銀座を代表する商店、つまり専門店の親父連中だけでつくっていた会でしたから。だいたいみんな銀座に住んで、考えていることもみな同じで、従ってどどんいゝんなことができました。今は些細なこと一つでも、実現するためにはえらく時間がかかったり、しかもや

ろうということになっても「いや、俺はそんなのはイヤだ」と言い出す人もいて、全員でそれをやろうということにはならないです。ですからそういう意味では、非常に街としての力が弱くなっています。

さきほど、銀座には広告の規制があるのだろうというお話がありましたが、実はそういうものはないのです。ただ、あまりにひどいものについては「頼むから止めてほしい」と我々がいつてお願いをします。しかしそれを聞いてくれればいいのですが、聞いてくれなければダメです。今まではそういう細部の規則とかを決める前に、そんなこと当たり前ではないか、銀座で商売しているやつがそんなバカなことはやらないだろうという雰囲気があったわけです。そういうものがルール化しているかということ、非常に抽象的なものしかない。たとえばネオンの色はこうしようとかといった具体的な規制は何もなかったのです。仮に今、それをつくって守ろうということになっても、昔だったらそれは住民の一つの意志でしたから「よし、そうと決まったらやろうじゃないか」という雰囲気がありましたが、今はどこからアウトサイダーが入ってくるかわからないですから、周知徹底することはできないです。やはり専門店の親父だけの問題ではないということから、もう少し全体をコントロールできるような機関を作る必要があると思います。

調和のある街づくり

保田 / さきほどの絵を描きたくないというのは非常に重要な問題だと思います。私も列車に乗って窓から外を見ているのがわりと好きで、昔からよく見っていますが、昔はその地方独特の家の建て方というのがあり、全部が違って

いました。今はどんなところにも東京と同じ家がポンポンと入っていて、そういうところをみてもますます絵を描きたくなくなります。東京のなかでもそういうことが起こっていて、たとえば昔は銀座と墨田区では家の構造が違ったと思うのです。しかし今はほとんど変わらなくなってきている。また杉並の住宅地にある一軒家をつぶすと似たような家が6軒くらい建ったり、マンションが建ってしまう。浅草六区の映画館のなかに全然関係ない建物がボンと建ったり。こういうのは非常に重要な問題で、ますます絵を描きたくなくなります。しかし、ではどこが規制できるのかというと、また難しい問題でどうしていいのかわからないのですが。

とにかく建物はその建物一つではなく、周り全体との調和というのを考えてつくるものだということをもっと真剣に考えていかないと、それこそ今後東京は何も特徴のないところになってしまうのではないかという気がします。これは単に緑があるとかないとかという問題ではなくて、建物そのものをどうしていくかということだと思うのです。私は今でも銀座と墨田区とでは建物が違っていいと思うのですが。

長谷川 / 私も毎週山形まで新幹線で通っていますが、この6年間を見ていると、一軒一軒の家は立派になっていますが、いわゆるプレハブ的になっていてどこを見ても変わり映えしないですね。京都に行くとさすがに少しは黒い屋根が残っているようですが。

以前、建築家の菊竹清訓さんが広島に出張に行った時、ちょっとウトウトして間違えて岡山で降りてしまったらしいのですが、新幹線を降りてタクシーに乗って、岡山県なのに「広島県庁へ」といったらタクシーの運転手がびっくりして、それまでここが岡山だということに気づか

なかったというのです。建築家がそうなるくらいですから。

日本の裏表意識

村國 / 町の景観でもう一つ、私は気になることがあります。日本人の概念の中には表裏という概念がありますね。たとえば玄関があれば裏口があるという、そういうのがありますね。裏口のほうにゴミ箱を出して、たとえばお手洗いも裏口にもってくる。そうすると山手線に乗って見るときには、みんな建物が電車の方に裏を向けているのです。たとえば中華料理屋さんがあるとしますと、向こう側に道があって山の手線側に裏を向けている。山の手線側には排気口があって煙が出ていて、何か干し物があって下の方にはゴミ箱がおいてある。汚いですよ。ではその店が汚いのかというと、表側にまわってみるときれいなんです。玄関はちゃんとしていてきれいです。しかしよく考えてみると、人は電車の中から一番よく見ているわけですよ。ヨーロッパの町では皆、家でも店でも電車の方にむかって表を向けている気がするのです。西欧の人たちとはものの考え方が違うのかと思ってしまいます。日本では電車に乗っている人は自分の家とは関係ないという気持ちがあるのかも知れませんが。スイスでの場合、みんな外に向けて花とかをきれいに切って見せていますね。こちらに向けているのだからその反対側は裏なのかと思うと、反対側も裏ではない。この話をヨーロッパの人に聞いてみたら、彼らは全方位が表だと云うのです。どこからみても、その人が見ている方が表なんだと思わせるようにしているというのです。ところが日本の場合は、どんな建物でも必ず表裏がありますよね。私は建築のことはよくわかりませんが、何かあるので

しょうか。昔から南の方がお父さんの部屋、北の方は台所といったようなことがありますよね。

前田 / それは建築だけの問題ではないと思います。日本はいろいろな意味で遅れていて、イギリスに比べると100年ぐらい、ドイツからは60年ぐらい、アメリカからは40年ぐらい遅れているのではないかと思います。先ほど話にでたパリだって、ナポレオン三世が都市改造をやるまではとんでもなく汚い街だったようです。ヨーロッパのゴミためとまで言われたぐらい、ひどい街だったようです。そこを強力な権力とものすごいお金をつぎ込んで、今のパリはできたわけです。ドイツも今では環境先進国ですが、産業革命期以降は相当ひどかったようです。ロンドンも然り。日本は江戸時代は素晴らしかったけれど、近代化してひどくなった。しかし、100年ぐらい先には何とかなるかもしれませんね。

村國 / 長野ではオリンピックをやるということで一生懸命がんばって道や施設を良くしていますが、たとえば海外から来るお客や選手の人たちは成田に着いて新幹線で長野まで向かうわけですよね。そうすると先ほどの「裏側」が見えるわけです。それだけではなく、その途中の群馬県や埼玉県もどうかということになると思うのですが。

前田 / 今のお話は銀座の景観を語ることと同じことだと思うのです。いわゆる中山間地域といわれるようなところも含め、地方の景観も銀座の景観も似たような状況だと思います。景観は国の文化全体の反映だと思うのです。その文化が成熟していかないと景観なんて本当に良くならないのです。それまでは小手先にならざるを得ないので、次善の策として何をやるかといった話はあっても、本当に良くなっていくため

には時間がかかりますよ。

島田 / 暮らし方というかその意識みたいなものが相当大きいと思います。たとえば私がデンマークに行った時、みんなで街を見ていると家の中におばあさんがいたりするのが覗けるんです。覗いてはいけなかなと思いつつ、つききれいなと思って見ていると、目線が合ってニコツとしたら、おばあさんも挨拶をしてくれて「どうぞ見ていいですよ」と。要するに「私たちは見られるためにきれいにしていますから」と言ったのです。毎日ガラスを磨く時は「是非見てほしいという気持ちで磨いている」というのです。やはりその辺の意識が全然違いますよね。ヨーロッパの国がすべてそうだとはいえませんが、日本の場合はむしろ逆で、できるだけ覗かれないようにしていますから。

前田 / 江戸時代まではそうでもなかったと思うのです。例えば、古い農家の間取りでは、家族がいつもいる部屋は陽当たりの悪いところにして、客間はやたら立派に陽当たりの良いところにつくっています。祭りの時には、そこへ沢山の人を人と呼んだりします。また例えば、山形の最上川流域の町では、雛祭りに、自分の家にはこんなに立派なお雛様がありますよと、表の座敷に飾って見せたりします。

日本でも江戸時代までの文化は相当成熟度が高く、完成されていた。それが明治以降、西洋文明を取り入れて混乱してしまった。今は、全体をひっくるめて消化し直している状況と考えたい。そのため、それなりの成熟度を持つためには相当な時間がかかるだろうと思います。パリのような状態には決してなり得ないと思いますが、長い目で見ていくしかないと思います。

村國 / 厚生省の関係の方とお話していて、驚いたのですが、明治維新の時、日本の人口は5000万人だったそうです。それが戦争などを経て多少の増減はありながらも右肩上がり人口が増えてきた。今ちょうど富士山の頂上のようなところに来ているというわけです。これからしばらくは平らになって、2007年くらいから下がり出すのだそうです。ちょうど今年が明治維新から130年目ですが、これから、よっぽど子供をたくさんつくるといふ運動が起きない限り少子化でしかも高齢化が続き、今の計算でいくとあと130年経つとまた5000万人に戻るのだそうです。そういうことから今がちょうど富士山の形でいうと頂点らしいです。江戸が260年でしたからちょうど同じですね。しかしそう考えてみますと、その時に今これだけの建物は必要ないですね。

たとえば私たちが子供の頃というのは比較的庭のある家に住んでいた人が多いと思うのですが、人口が下がればそれだけ庭がある普通の家に住む人がまた必然的に増えてくると思います。そうすると何かニューヨークのスラムみたいに、かつてのバブルの時の建物があっても誰も住んでいなくて、その中がすべてスラムになってしまう、そういう場所が出てくるのではないかという気がするのです。兜町あたりも怪しいのではないかと思うのですけれど。

日本人の嗜好の背景にあるもの

村國 / 今後銀座は、やはり創造性といいますが、銀座固有の文化や個性みたいなものをどんどん磨いていかなければいけない気がします。その時、銀座の個性というのは一体何なのかということになると、さきほどお話にあったような歴史的に続いてきたもので、ある一つ匂いみたい

なものがあると思うのです。そのためには日本人の美意識とか価値観というものをもう少しよく見つめてみる必要があると思います。

一つのヒントとして申し上げたいのは、私が絵を描いていていつも思うことなのですが、私は水彩画とか水墨画がものすごく体質に合うのです。どうしても油絵というのはダメで、たとえばルーブル美術館に行ってドラクロアの絵だとかルオーの絵をみていると、もうこれは絶対に勝てないと思ってしまう。その時、自分は水の文化なんだと思うのです。これは宗教的な背景とか食事とか、遊牧民族だとかいろいろなことがあるのかもしれませんが、つまり西欧人は加算型というか足し算型なのだと思うのです。たとえば、何かイベントをやる時には、できるだけ大きな音を出してみんなでワーツと音を出す。たとえばオペラなんかでも、できるだけ大きな声でワーツと歌うのがいいという。そういういわゆる加算型だと思うのですが、日本の場合はまったく正反対のところには美意識があって、たとえば静かな茶室みたいなところでの静寂がいいというのだと。時々、向こうの方でチーンと鳴ったとか、あちらの方で虫が鳴いていたり、鳥が鳴いているみたいなところにすごく共感する。聴覚でも静かなのがいいというのがあります。色でも単色とか、より淡い色とかモノトーン、そういうものに惹かれるところがありますね。それから味もより生に近い、ご飯が典型的な例だと思うのですが、お米に何も味をつけなくて水だけで炊いて食べていますね。刺身も時には、我々は醤油をつけなくても味がしますよね。しかし外国人にしてみれば、マヨネーズをつけたり、ソースをつけないと食べられない。我々は無味のほうに近い、無味、無臭、無色、無音という、減算型といっていいところに何か価値観があるような気がする。しかし最近中国

に行って思ったことは、彼らは加算型だということ。中国料理を食べても明らかですが、やはり加算型だと思うのです。

つまり東洋のなかでも日本固有の美意識というものがある、そういう美意識と銀座の伝統みたいなものが上手にミックスして何かうまくできないかなという気がします。今の若い人たちにはまだある錯覚があって、依然加算型のものの中にいると思うのです。スピーカーがガンガン鳴る音の中で踊り狂っているのが、本当にみな日本人の幸せ感につながっていくのかということに、いつかどこかでハッと気が付くのではないかと思います。

ですから、物事を考える時にもあまり加算型ものを考えない方がいいと思うのです。広告代理店的にやれば加算型になる。お金をとるためには、どんどん色を塗りましょう、音をだしましょう、となっていく。しかし、私は静かな時間をつくって、そこで何かをやるということでも、人は集まると思うのです。極限の静寂をつくり、そこで何か非常にシンプルな音だけが鳴っているような音楽会とか。

長谷川 / ニューヨークのタイムズスクエアを以前の市長が「あんなにネオンでギンギラギンにするのはけしからん」というので、それに反抗して一回ネオンを切ったりしましたね。エネルギーがいかに大事か、電灯やネオンというのがいかに大事かということ逆をみんなにわかってもらうために明かりを消したのです。そこでインタビューしているのを聞いたら、やはりアメリカ人はみんな「暗いのはいやだ」「早くネオンをつけたほうがいい」という反応が多かったようです。

島田 / だからこそ今私は「マイナスのデザイ

ン」ということっています。たとえば新聞広告をやるのに、15段一面の場合、日本ではできる限り情報を載せてほしいというふうになるのですが、これは広告のセオリーからも、何も無いスペースが最も力強くインパクトがあるというのがわかっていながら、なかなかそこをやるというものが今までいないわけです。もちろん中には優秀な作品がありますが、やはりある種、空間とか引き算するという方向をこれからデザインする側から実践していかなければ、何も変わらないし、とんでもないことになると思います。たとえば、細川氏が熊本知事の時に、看板条例をつくりました。それで今の熊本空港から市内に行く道には一切看板がないわけです。まるでスイスのようなのですが、あそこまでやればできるわけです。それが本当にいいのかどうかの是非論というのはまた別に評価はあるのですが、やはり今このものすごくノイズな時代に対してやはり効果はあると思います。

建物と街の再建

三枝 / この間、現在銀座通りにある建物というのは主にいつ頃出来たのかという話になって、ほとんどが35年から45年ぐらいに建った建物なんですね。その時代の建築の先生の美意識で建てられたもので、物理的にはまだ充分使えるのですが、さすがに古いです。それで資生堂パーラーが建て直すことになりましたが、おそらくあれが、今後もう一つの銀座の景観をつくる最初のスタートになると思うのです。だいたい40年くらい経つと変わりますね。しかし建て直すとも容積率が減るといった問題もあり、景気も悪いので、そうした動きが遅れていますね。しかしいずれにせよ、この辺りからガラッと変わると思うんです。その時、ただ高見の見物

をしていると銀座通りの景色がどういうふうに変わるのか。ただそうして見ているだけでいいのかどうかという問題があります。放っておけば個々のクライアントと建築の先生が好きなように建ててしまっ、おそらく景色はずいぶんと変わるでしょう。それが失敗であってもおそらくあと40、50年は変わらないと思います。

島田 / たとえばヨーロッパで、中世からの状態を保っている町とか、200年位前から続く町といった昔の都市は、ブロックがなくなるとそこに新しいものをはめ込むという手法で基本的な総合スケールというか、原理というのはかなり出来上がっているようですね。

しかし、たとえばローマのいわゆる新都心などでは、多少異質な違いを意識はしていても結構とんでもないものが林立していますね。建築家の主張がぶつかりあっているようでもあり、なんだか日本よりもすごいです。ものすごく実験集団のようでもあり、人間をどう思っているのだろうか。それなりに良いものをつくるけれど、ものすごく主張が激しいものが並ぶのが新都市みたいなどころにはあると思います。全体的には都市をどう保存していこうかという美意識で。ポーランドなどの場合は、大戦で全て焼けてしまった町をまったく昔のままに復元してしまう。日本でしたら、ここぞとばかりに建て替えてしまう。あのような意識はいったいどこから出てくるのかと思います。民族的意識の違いがあるのだと思いますが、しかしどちらが良いのかというと、いざとなるとどうもよくわからないですね。

前田 / この国では、建物をつくったり道路工事をしたりということが、経済政策の一部にくみこまれています。住宅政策にしても、経済論理が優先しています。例えば、良い住宅を建築家

が設計したいと思っても、実際に建築家が設計する住宅なんて、全体の5%にも満たないです。ビルだと当然建築家が設計するのですが、それにしても大部分、経済論理に左右されてつらざるを得ないのです。しかし最近では、徐々に状況が変わりつつもあるので、今後はもう少し良くなるのではないかと期待しています。

長谷川 / 今、日本の建設業というのは建設人口が780万人ぐらいで、事業者数は大手のゼネコンで56万5000社です。ここ10年の間で経済が5%減っているわけですが、建築事業者数は10%増えてきているのです。今の建設需要というのは80兆円ありまして、これはGDPで示す名目上でだいたい20%なんです。その内補修にまわっているのが5兆円ぐらいあります。これは世界の先進国の中で見ると非常に異常です。対GDPに対して20%も建設需要があるという先進国はどこにもないです。せいぜい10%あるかないかぐらいで。しかもヨーロッパでは新しいものをつくるということではなく、その大半が補修です。日本の経済はこうした構造に浸りきっている恐れがあります。たとえば北海道などは公共投資で生きているといってもいい状態です。

そういう状況が根底にある一方で、どんどん何かをつくっていくということが大きな問題になっています。さきほど建築とか都市の研究というのは、今のところ工学部の中でされているというお話でしたが、MITなどでは建築都市学部という、それだけで一つの学部になっています。一時、日本でもそういうのをやるべきだという動きがあったようですが、今のところ都市計画とかそういうもので一つ独立した学部としてつくろうという話になっているようです。しかしまだ実現はしていませんし、相変わらず工学部の工学部建築学科とか工学部都市計画学科とい

って、いわゆるエンジニアリングというか工学的な視点で町づくりがされています。

こうしたことを前提に銀座を考えていくと、やはり次の建て替えの時に、このままでいってしまっ、あまり良いものにならないのではないかという感じがします。だからこそ逆にこちらでマスタープランを作り、方向性を強く打ち出さないといけないのではないかと思います。

アートとサイエンス

村國 / 私はもっとアートの部分とサイエンスの部分というものが、調和をとって何かをつくりあげていく状況があっているのではないかと思います。今はまだどうもサイエンス優先主義というのがありますね。今までの東京大学的発想でいくとそうなるのでしょう。東京大学には絵が描けなくても音楽がわからなくても入れてしまう。しかし、その人たちがヨーロッパに負けないオペラハウスをつくらうとした時、もともと音楽を何もやっていなかった人がオペラハウスを考えても良いものはつくれない気がするのです。

島田 / 最近、中小企業庁が中心になってデザイン活動の研究をしていますが、まさに今お話にあったような話です。デザイン新領域とは、何なのかという調査研究しており、その中でも、そもそもデザインとは何なのか。ある一つの何かをつくっていかうとする時、そこに法則的発想的な何かがあり、建築でいえばそういうのは、むしろデザインというある種の専門職能で上がってくる全く未開のものか、急にコンセプトとイメージを持ってきて突然それがそちらから開いてしまうという可能性がものすごくあるのではないかといった議論です。何か言われたコン

セプトを形にしていくという意味での旧態のデザイン、旧型のデザインというのは、一種の川上指向として見たときには、そこでできるデザインも発想者のイメージとは少しずれてしまうのではないか。逆に、そこに新しい新領域があるのかもしれないという話です。

前田 / 確かに、一軒の家でしたら、その経営者とデザイナーが「良いものをつくらう」といってやればできますが、町の場合そうはいかないです。どんなに感性の良い人がやったとしても文句が出るに決まっています。そこで重要になるのは、「美意識」の前の「美の論理」みたいなものだと思います。そしてそれは歴史の中にあると思うのです。その都市が歴史的に培ってきた文化性などを掘り起こして、その延長上にどう考えていくかということです。思いつきや、どこからか降ってくるような類のものではありません。まずは掘り起こして、そこからまた考えるという作業をすれば、しかもその過程で皆が感性を磨き合って、町を憂う人を沢山つくる作業が大事だと思います。

島田 / 工学部を出た人にも感性の良い人はいるわけですから、実際にはできると思います。ただそれをやろうとすると、みんながイヤだと言う。そういう文化性というのが、常に銀座をがんじがらめにしているように見えます。何か共通意識を持ってみんなでやろうと。そしてどうしたらできるのかということ、これに尽きると思います。

* * * * *

長谷川 / やはり銀座学科をつくらなければいけませんね。アートとサイエンスの融合を目的

につくられたのが東北芸術工科大学ですから、つまり今やっとな芸術と工科が、というところでは。しかし東北芸工大に限らず、時代がそういうことを必要としてきているため、四つ五つはできつつあります。早くそういったところから銀座に反映される人材が出てくるといいと思います。

(1997 年 10 月)

「まちづくりとしての銀座」



田村 明

法政大学名誉教授

東京大学工学部建築学科(S25)卒、同大法学部法科(S28)卒、同大政治

コース(S29)卒。工学博士。

運輸省、労働省、日本生命不動産部などを経て、大阪万博の娯楽施設のデザインを担当。昭和43年請われて横浜市庁入りし、企画調整部長、のち同局長として同市の町づくりに貢献、「都市空間創造の実践」として日本建築学会賞を受けた。横浜市技監から56年法政大学教授。町づくりに身近に森林があるのが望ましいと主張している。

著書に「環境計画論」「酸性雨」など。

* * * * *

はじめに

田村 / 私は自分の職業を「政策プランナー」といっておりますが、町づくりをやるときには、必ず歴史的なものからやるようにしています。東京については、『江戸・東京町づくり物語』という、私としてはかなり長いものを書きましたが、本来こういうものは歴史家が書くべきものなのですが、案外歴史家は書いていないんです。プランナーというのは、未来のことを考えるのが仕事ですが、未来のことを考えるにしても、ただ未来のことを考えてもしょうがない。地域のことを考える時には、その地形とか歴史とかというものを辿って、その上で現在を分析し、どうするのかということを行わなければ

プランにならないんです。それを抜きにしてしまうとすると、ある一つのパターンだけを作った、ただそれを当てはめてしまえば済むわけで。建築屋にはそういう風習がありまして、その一つパターンができてしまうと、どこでもこのパターンが当てはめられそうな所、受け入れられそうな所を見つけては、同じようなものをつくるという癖がありますね。ですからそういった意味で性格的にはプランナーとはかなり違いますね。私は建築学科の出身ですが建築の外へ出てしまった方ですから、建築家の考え方もよくわかるんです。

本日は、銀座を考えるということなので、やはり私としては、まず銀座の歴史から知らなくてはいけないと思っております。

銀座での思い出

『江戸・東京町づくり物語』にも、銀座のことは若干ながら触れましたが、まずここでは最初に私個人の歴史の中で、どこで最初に銀座を感じたかということをお話します。私が青山に住んでいた頃は、親父の勤めていた会社が銀座にありました。当時の銀座には、夜店というのがありまして、よくそこで飯を食わせてもらったりしていました。青山から銀座までは市電で出てきました。戦前の銀座は、今の銀座とは相当違った感じがあって、あれもよかったなと思いますね。

親父が勤めていたのは、NCR、ナショナルキャッシュレジスターというところで、銀座のお店の方々と親父はずいぶんつきあいがあったんです。ごく親しくしていたお店の方もいるので、銀座はたいへんなつかしいです。NCRはアメリカ人が設立したアメリカ系の会社で、その後日本と一緒にになりましたが、戦争中は一度潰された会社です。その時は親父も失職して、また戦後になって復職をしたという経過があります。ですから私は子供の時にも、時々ここを歩いていたんですね。その頃はもちろんビルなんかありませんでしたが。それで、なぜこのアメリカ系の会社が、銀座なのかなと考えると、やはり私は明石町の関係ではないかと思います。明石町がここにあって、居留地がありましたからね。それと、銀座というところは横浜と結ばれていたの、国際的なところがあったんだろうというふうに思います。

東京の方向感覚

ところで、一番古いところから銀座を振り返ってみると、まず銀座での軸というのが南北軸になっていることを思います。僕らが子供の頃は、

南北というふうには思ってなくて、こっちのほうに行くとなんとなく大阪の方に行くわけだから西のほうかな、東西かな、という具合に思っていました。また昔の図面というのは、南北軸で書いてません。市電の切符、乗り換え切符などもぜんぜん書いていない。軸が90度ずれてたりするんですね。だから方向感覚というのが、東京ではまったくつかないんです。私はその後大阪にも行きましたが、大阪の人は方向でもの言わないと駄目なんです。それに比べて東京は本来的に方向でものを言わない。その中でも、銀座はわりあいはっきりしている方ですけど、それでもあんまり方向的に言わない。「青山」だとかなんとかと地名で言うってしまう。軸線なんか何やら訳分からんと言って、昔は全くそういう方向感覚がなかった。ですから、私は関西に行って初めて、方向感覚というのは町にあるんだなと思いました。

ただ銀座は偶然、南北軸になっていますね。これは方向性を持ってやったのではなく、全くの偶然なんです。銀座のちょっと手前ぐらいのところで前島、つまり前に半島があって、半島が突き出していて、この半島が日比谷の入り江を抱いているようにあったわけで、その根元のところに堀を掘るんですけど、もともと平川があったんですね。そこに日本橋という橋を初めてかけた。だから海の線のほうが高速道路ですね。陸のほうはそれに対する人間の通りということになるんですが、それを前島という。前島というのは半島ですから、半島のところは背割りで入れるんです。その背割り線でこっちに水勾配という具合に決まるんです。今の日本橋から京橋まで来るそのどこから先を埋め立てたのか分からないんだけど、そのあと日比谷の入り江を完全に埋めて、この半島で途切れていたところの銀座通りを使って江戸橋から向こうの東

海道の方へつけていくという形になるんです。ですから半島の先だったんです。そこにいろんな人間を呼んで来て、いろんな工事をさせた。尾張町は尾張さんがやって。加賀町というのは、加賀さまじゃなくて、加賀屋というのがやったのではないかという説もありますが。それから泉町とかも若干の埋め立てをしたんです。どこからどこまでだったかという範囲は、二三軒よく調べれば分かるのでしょうけれど。とにかく前島が基礎になっている。そうすると軸が決まる。その軸を延ばして行って、ちょっと微妙に違ってしまったと野口孝一さんの本に書かれています。微妙に違うんじゃないかと、あれは埋め出したから、こっちへすりつけるために、ちょっと触れたんですね。そういうところなんです。

しかしこの都市の軸線というのは、いっぺん決まると変わらないんですよ。容易なことでは変わりません。これを変更するのはよほどのことです。もちろん、江戸は何度も大火はあったし、関東大震災から戦災などいろいろありましたが、それでも幅が変わるぐらいのもので、この軸は変わらないですね。軸線というのはそのぐらい重要な意味持っているんです。いっぺんつけちゃうと、町が丸焼けになっても変わらない。その基が自然の前島というところから来ているというのもちょっとおもしろいなと実は思っています。

銀座という響き

明治に入りまして、銀座という名前が有名になったのは、なんとと言っても銀座煉瓦街ができたからです。そしてこの銀座という名前は、もう私が言うまでもなく、銀座があったからで、こ

の名前がよかったからだと私は思います。

私は静岡で旧制の高等学校で行きました。静岡には金座町というのがあるんです。そして銀座は静岡にもあったんですが、静岡の銀座も移ってしまって、もう地名はなくなっています。「金座」というのは語感から言って、ちょっと町の名前としては締まらないんですね。やっぱり「銀座」というのがすごくいい。名前が生きたと思いますね。江戸の中の金座はご承知のように、実際は日本銀行だったんですね。しかし金座とは言わなかった。そんなことを考えても、やっぱり銀座って、ちょっとしゃれてるなど。これは私の個人的な感じなんです。

その銀座に煉瓦街ができてここは一躍、日の目を見るんですけども。江戸時代まではだいたい尾張町と呼ばれていた。尾張町4丁目、つまり銀座4丁目のあたりまでだったわけで、もっと泉町のほうに行くと職人なんかいた。今は向こうのほうが賑やかですが、昔はむしろ向こうのほうにぎやかじゃなかったわけで。ものごととはそういうものなんですね。都市の発展を見るとおもしろいもので、賑やかではなかったところが賑やかになったり、空洞化しているところに実は中身があって、そうでないところは逆に落ちてきたりと、そういうふうになるんですね。

さらに大きな次元で言えば、関東平野の中で江戸という所は完全な空白地帯でした。ここが中心で徐々に外へ発展したわけではないんです。400年前はむしろここは空洞地帯だったわけで、だから家康が来て発展したんです。こういったことを400年ぐらいの次元で見ると、ちょっとおもしろいですよ。

中間地帯だった銀座

銀座煉瓦街の話に戻しまして。この辺りに銀座煉瓦街を建設したのは、由利公正でした。始めたのは井上馨だという説もあります。由利公正も自分だと言っているけど、どちらかというところは井上馨のほうを取るんですけど、まあいろんな人間がからまっているんでしょう。銀座煉瓦街が何故この場所にできたのかというと、それはやはり横浜との関係だったと思いますね。横浜からの駅をまず汐留の伊達家のところで作った。当時は横浜が先に開港したわけですが、その時、横浜の開港ではなく東京開港にしろという議論がありました。ところが横浜は断固として反対して、東京には開港つまり外港にはさせないと頑張ったわけです。そのために東京が開港するのは昭和16年になりますが、そうして戦争が始まった年に初めて開港したわけですから、実質は戦後の開港といえるでしょう。

それが東京にとって、どういう影響となったか考えると、もしあの時に田口卯吉なんかが言っていたとおりにやっていたら、銀座はむしろ別の所になってしまったと思うんです。そういう案を彼らは出していましたからね。つまり東京は開港したいけれど、横浜が頑張って開港させない。東京から見るとけしからんということだったわけですが、案外それが銀座を育ててきたわけです。何でも取ってしまうというのはかえってよくないですね。中央に何もかもありすぎると、ある時期まではいいけれど、結局は倒壊してしまう。むしろ適当に離れた距離のところに横浜があって、そこに外人が上がってきて、そこから鉄道できたところが新橋で、それから地方の通りである銀座通りを通して、明石町に行くなり、丸の内に行くなり皇居に行くなり、というふうに分かれた方が。そういうクッション的な役割があるからこそ発展していったわけ

で。いきなり銀座ではないんです。あくまでもいろいろな場所との中間地帯だったということで、それが大変大きな意味を持っていたわけです。銀座の中でも、はじめは京橋に近い方が当然賑わっていたわけですが、今では、それまで遅れをとっていた4丁目から先の7丁目、8丁目のあたりの方が、今では賑わっています。つまり先ほどのように、街というのはいろいろな逆転が起きるんです。そこが非常におもしろい都市のダイナミズムなんです。今でも新橋のところに土橋の名前が残っていますが、あそこは江戸の中でも外れのところだったんです。神田から芝あたりはもう外れの外れで。町としては、だいたい4丁目まででした。そこに鉄道ができたことで、メインロードが向こうの方に逆転してしまったわけです。

銀座に対するいくつかの見方を挙げますと、『東京繁昌記』に出ている服部撫松のものには、ちょっとこけおどかしの的な宣伝広告という部分がありますが、もっと冷静に書いている人もいます。例えば外国人から見ると、日本でなぜこんなものを行っているのか、と思うらしくて。ピエール・ロチが書いていますが、東洋の異国にきて、中国はだいたい分かったけれど、島国のジバングにきてここにも何か異国的なおもしろいものがあると思っていたが、とんでもなかった。西洋に比べるといかにも安っぽい、しかも東洋的な良さもないと。彼には非常に中途半端に見えたんだと思いますね。

余地としての隙間

その後、政府は由利公正をクビにして、責任だけは託して、その間に知事を取り替えてしまった。昔でいえば、若年寄のような人を起用して

一応江戸的な感覚を入れておかないとまずいかなというものが、当時の明治政府の一端だったのでしょう。しかし計画は決まっていますから、計画は計画で実現して、まあまあとやったわけですね。しかしもちろん、いろいろな人が書いてますように、泉町あたりに残った人はほとんどいなかったようです。これは当然のことで、彼らは西欧風の町を作りたかったわけですが、それは住民のためではなかった。しかし買ってくれる人間がないのも困るし、とりあえず買ってくれるであろう人はそこにいた人たちで、そういう人が残ったわけです。

しかし、政府がやろうとした新しいことというものに中身があったかということ、あまり中身はなかった。格好だけを作りたいということで、格好だけ実現させたんですね。つまり町を作るという感覚が当時の明治政府にあるわけがない。今の政府にもあるのかは非常に疑問なんですけれど、当時も町を作るという感覚はなかった。海外などで見てきたものを作るというのはあったけれど、どういう町で、どういう生活をして、どういう商売をしていくのか。そこを、とりあえず前の地主さんが買ってくればそれでいいと。それは売るという点ではいいけれど、生活の形態がまったく違うわけだから、前の商売やあるいは職人なんか、そこで生活するわけにはいかなかった。金額も高くて、とにかく売れなくて困った末、見世物小屋をやったとか、有名な話ではクマの見世物やってたとか、大蛇の見世物やってたといえます。そこへ入り込んできたのが、私は新聞社だったと思うんです。政府がもし煉瓦街を造る際にいろいろと細かい配慮をして、もともとの住人を住まわせるようにしていたら、その後の銀座はむしろなかったのではないかと思いますね。敢えていなくしたわけではないでしょうが、いなくてもいいという

ような政策だったわけです。それで隙間ができ、新しい連中が入り込んできた。

この隙間というのが、なかなか重要なんです。合意でつくる場合もあるし、まあまあとうまい具合になんとかつくってしまう場合もある。それもはっきりとした意図はなかったけれど、意図がなかった結果、やたらと新聞や報道関係が入り込んできて、銀座といえば一時は報道の町になっていた。当時は新しいものに対しては、いろいろな需要があったわけです。しかし新聞なんてその頃はまだなかった。『横浜日日新聞』が日刊新聞の最初で、横浜にはあったけれど、東京にはまだなかった時代です。江戸には場所がなかったので、どこでそういうものが成立したかということ、下町だった。瓦版ならいいけれど、この銀座というのは、さきほども言ったように横浜にも非常に近い。政府にも非常に近い。だから外人も近くにいる。それで格好としてもなんとか新しい街ができたから、この辺でやるのが割合いいとなったわけです。銀座で一番最初に新聞をつくったのは、イギリス人のブラックさんです。「日新真事誌」というのをこしらえた。これもやはり明石町という条件で出てきた。それで次々といろいろな新聞社が出てきて、当時銀座は商店街ではなく、新聞の街だったという。これは、井上馨でも由利公正がやったわけでもないけれど、たまたまそういうご時世になってしまったという。日本の街には、そういうことがよくあります。

私が最近東京について、「積み木都市、東京」ということをやりましたが、これも全体像としてはあまりなく、やるとなんかそれで街ができているという感覚がある。銀座もそういうところがありますね。だから意に反して、ではなく、まず意がない。形を作るという意はあったけれど、それ以上の中身はなかった。中身はないけ

れど高いから、前の人たちは当然居られない。そこには隙間ができて、その隙間に入り込んだのは、当時最も必要だとされたものが入り込んだ。だからもともと銀座に住んでいた人達から見れば、俺達は追い出されたという感じかもしれないけれど、近代日本の進むところからすれば、そういう新しい物の受け皿を作ったともいえるわけです。

都市というのは、転換期が必ず途中にはあって、そのままずっといくということはないです。しかも何年、何十年かに一度、大転換期がある。私が仕掛けた「みなと未来21」もそうです。当時は70年くらい使ってきた、三菱の社長にも、富士重工の社長にも「社長の任期ぐらいでこの問題を考えてはダメだ。20年、30年の単位で考えたら、あそこはいつまでも工場にしているところではない。」といて説得して、それで動かしてもらったわけです。銀座もまさにそういうところなんです。銀座っていかにも江戸時代の昔から繁華街があって、いかにも街の中心だったようにみえますが、そうではなかった。もし仮にこれを日本橋の辺りが中心だった江戸の頃にやろうとしていたら、もっとやりやすかったと思いますね。従来から日本橋のあたりで蟠踞している連中がたくさんいて、街の名主なんて3人もみんな日本橋ですから。そういうところはあまり新しいものについていけないから、むしろいろいろと工作されてうまくいかなかったでしょうね。その当時、銀座は中心ではなく端っこだったから、そういう自由があったんだと思います。

もう一つおもしろいのは、実は銀座は自由民権の中心地だったということです。これは意外に知られていなくて、歴史で習う明治7年の民選議員設立建白書が、書かれたのはまさに銀座だったということなんです。それが国会開設運動

の最初のものになるのですが、そのことを発見して、なるほどと思いました。これもやはり都市の隙間でわりあい情報が交流するところ、そういうところにみんな入り込んできたわけですね。彼らの一番新しい問題という、それはやはり政治をどうするかということで、明治維新というのはただ幕府を倒しただけで、どういう政府を作るかという構想はなかった。それで、やはり憲法や国会を作らなければいけないという動きが出たわけで、その最先端のところには一番情報があつた。ここでも情報は交錯していて、おもしろいですね。しかしだからといって、ここがものすごい価値観を持っていたわけではないんです。あまり価値観を持っているということは、つまりえらい家老がいたり、えらい商人がいるということであつて、それではやりにくい。案外そういう人はいないところに、新しい人が来てやっている。そういうところに土族などがずいぶん入り込んできています。土族、平民という分け方自体がナンセンスですが、江戸幕末期から明治の初めというのは、やはり土族が一番教養もあつたし、教育も受け手いた。新しい自由民権運動をやっていたのは、だいたいがそちらの系統が多いですね。そういう人たちがずいぶん銀座に入り込んできていたようです。

つまり明治の銀座というのは、形はありながらも、そういう情報が行き交うような空白地帯があつた。そういうところからだんだん商店街になってくるわけですが、銀座煉瓦街がただちに商店街になるわけではなく、途中で変な所ともくっつけたようで、結構汚かったところもあつて雨漏りとかしていたようです。静岡のお茶屋さんも、せっかくのお茶がみんな腐ったとか、生糸にカビがはえたとか、大変だったようです。

その後、明治20年くらいに初めてのショーウイ

ンドーというのが作られたり、それまでお客はお店の中に入って上がりがまりの所に腰かけて、やりとりしていたのを、三越が改革して自由に見られるようなシステムにしたり。要するにここは、江戸の知恵と蓄積が花開いたかのようにあらゆる新しいことが行われていくような土壌となっていたわけです。その後の煉瓦街は、永井荷風が書いているように、なにか老婆の白粉がはげちゃったような、ひどい状態だったと書いているくらい、これが銀座かと思うような頃もあったようです。

つまり煉瓦街というのは、まず話題性をつくり、今のようなガタイを作った。しかしガタイの中身を埋めるようなものはなく、自由度だけがあり、情報と交流の場にはなった。これが明治の銀座の基本的な姿だったと思います。ですから、今でこそ立派な商店街がありますが、それは新しいものをやる自由度があってからであって、ただ古い商店街があります、ということではないはずです。情報が行き交い、誰に対しても開放的であった。当時、外国に開けるといっても大変なことだったと思います。

銀座のストリート文化

銀ブラという言葉は、現在我々が使っているような意味からではなくて、銀ブラという名のついた変なやつがいたからというのがことの初めらしいですけど、ただ銀座は本当に自由で、別にものを買わなくても街を自由に歩けた。ストリートライフという見世物的な文化を作ったところでもあるわけです。そういう銀ブラにくる野次馬が、だんだん銀座に来る時には少し洒落ていかなければいけない、と格好をつけるようになり、特有のストリート文化ができていっ

たのだと思います。

ある人が、私が横浜でやったことを評価して、「田村さんはストリートライフを充実させるための、あるいはみんなをその気持ちにさせるための空間づくりをやったんじゃないですか」と言った人がいましたが、おそらくそういうものが抜けていたんですね。今でも日本を他と比べるとまだ抜けているところがあると思いますが、銀座という空間がそれを可能にさせたのだと思います。

都市というのは、必ず変化していくものですから、銀座もこれからどこか変化していくと思います。その変化をする中で、銀座の持っている街の心とか精神とか、雰囲気重要になってくると思います。それは偶然にせよ、一度できたものは大変な財産で、急に作れるものではありません。銀座には非常にいい雰囲気があり、それは銀座という名前にちょうどいい。これが銀座では浮ついてそうはならなかったでしょう。銀座というと、ちょっと抑えた感じがあって、そういうイメージが逆に銀座のふくらみになったのではないのでしょうか。最近は減りましたけれど、一時、町の商店街にみんな銀座をつけるようになりましたね。しかしいい意味のイメージがあるとはいえ、やはり銀座の名前なんかつけてほしくないと思うんです。

今後どうするかといえば、今のようなイメージに内包されているようなものを今後、町の中にどう生かすのかということですね。中身でいえば、一つのいろいろな接点があったこと、それから非常に開放されている空間だったということ。日本の中で一番の開放地点だった横浜と同様にここも開放地点になっているんです。もっとも横浜は入り口だというだけの意味しかもっていなかった。銀座には同時に威張っている海

軍もいたし、いろいろな人間が全て混在していた。そういう接点的な役割もして、そういう威張っている人間も銀座にくると、ちょっとホッとする部分があったと思うんです。そういう気楽になれる空間も含む非常に混在していた場所であったと思います。

町というのは村と違って、異質のものを混在させるところがあります。混在させながら、それなりにちゃんと成り立たせる。村は基本的に同質性のもので成り立ち、違うものは排除してしまう閉鎖性があります。村と書いてある村がすべてそうだとはいいません。ただ自然が多い場所という意味の「村」はいいのですが、共同社会という意味の「村」はだいたい閉鎖的ですね。銀座はやはりいろんな意味で人間を呼び込み、情報を呼び込み、新しい商品と呼び込む、魅力を持っていたというところでしょう。また同時に、先取り性というのもあったと思います。時代に対して常に先駆的で、もちろん伝統的なものもあったかと思えますけれど。

銀座の発展

つい数日前にも、浅草、台東区で下町の話をしたんですが、浅草という町も非常に伝統的なものを持っていながら、同時に関東大震災までは先駆的なところでした。例えば12階といえば当時ではまさに超高層のビルですが、そういうのがあったり、地下鉄が初めてできたのも上野と浅草です。文化的なものも、ロックや宝塚なども浅草へきていたようで、父も新婚当時はよく浅草へ行ったといっていました。

それが地下鉄が銀座まで延びてから、新しいものは徐々に銀座のほうへ移っていったようです。

だから力学的にも、地下鉄が東京を分けたといえるでしょう。いずれにしても、銀座は先取り性をもっていた。それはここに空白があったからできたことで、いつの時代をみてもガチッと全部ができあがっていなかったのがよかった。片側に夜店があり、もう片側には高級な店があるという、格の違うものが共存していたのもよかった。そういういろいろと違うものが共存するところが街の仕掛けであって、それらをどう共存させるかという仕組みが、銀座の場合は非常にうまくできていたのだと思います。

またそういう異質のものを呼び込んでいると、自然に新しいもの、先端のものも呼び込むことになるんです。ここだけで先端のものを作り出していたかということ、ちょっと疑問で、あくまでも呼び込んでいたわけです。同時にセンスの良さというか、街の一つの魅力として女性がそこで美しく見えるかどうかというのがあります。良い街というのは女性が美しく見える、という街作りのテーゼのようなものがありますが、銀座はまさにそういう街であり、さらに資生堂の福原さんのような方がそれを盛り上げた。それで結婚して、その結果子供ができれば三枝さんのところへ行って、とまあいろいろうまく出来ていますね（笑）。

銀座の可能性ということでは、何を残したらいいかというより、何か空白を作っていくって、そこではいろんな情報が飛び交っていくようなそういう場所を作ったほうがいいと思います。コンピューターのように機械が発達した世の中で、人間の顔が見える仕組みがある銀座であってほしいと思っています。

（講演終了）

* * * * *

- 全体議論より -

成熟した銀座

三枝 / 先生のお話を伺っていて、まさにおっしゃるとおりだと思います。確かにそういう意味では銀座というのは、今まで本当に完成されたときがない。いつもなにか未完成のまま。なぜもっと完全に作り上げてしまわないのかと。どこかに隙間があったり、いつも建設途上のようところがどこかにあるんです。しかし先生のお話聞いて、それが銀座の良さなんだといわれると、確かにそうなんです。ところが最近になって、そういう意味では完成というか出来上がってしまって何か目標がなくなっているという感じがあります。

田村 / 銀座の「銀座らしさ」がなくなっているわけですね。先ほど都市というのは、ある発展の段階までいくと、どうしても行き詰まってしまうところがあると申し上げました。あえてそこで銀座とは言わなかったのですが、まさに銀座がそこへ来ているのではないかなという危惧があるわけです。もっと銀座の持っている本質を考え、そもそも銀座が成立したときから発展した過程の生き活きたものを、もう一度呼び覚ます必要がありますね。具体的にどうするかというと、いろいろ手法はあるのでしょうけれど、まずは今できあがっているところに乗るのではなくて、もうちょっとガサツにというか、隙間を作って、そこで問題を考えていかなければいけないんじゃないでしょうか。

三枝 / 確かにそういう感じはありますね。素晴らしく高いレベルで完成したとは思っていな

いにせよ、完成したというか、ある意味で停滞しているところがあります。これからどういう町を目指したらいいかということすら、実は町全体の意思としては分からない。一頃よく銀座社用族というのがありましたが、昭和30年代に一番比較されたのは新宿や渋谷でした。その時、我々は新宿に負けるなんて冗談じゃないと思っていて、まだみんなにやる気があって全員の意志をはっきりしようという話もありました。ところが相対的にみると、いつの間にか銀座だけが沈んでしまって。銀座がおかしくなっているという話があっても、もう最近ではどうしていいかわからなくなっているんです。

田村 / そういう風にある意味で都市が成熟してしまうというのは一つの宿命なんですね。その宿命には2つパターンがあって、1つは成熟すると都市が別な場所に移動するというもの。その移動したところでまた同じようなことを繰り返す。もう1つのパターンは、そこでもう一度、再生する力をもっているというもの。そのどちらかに分かれるんですが、普通はもう少し魅力的な別な場所へ移るといってケースが多いです。しかし銀座に代わるような決定的に魅力的な場所というのはまだないですよ。東京の場合、他の中小都市と違ってやはり大量輸送機関も発達しているのでショッピングセンター型のモールを全部集めてしまうということも、意味がない。またふつうはそれが中心商店街と対抗するわけですが、東京はその構図にはなく、そうすると他の商店街と比較すると、やはりまだ銀座かなということなんだろうね。

中小都市の場合、中心となる商店街は1つしかなく、郊外型のショッピングセンターができる、これはかなわんということになるんです。そして中心が郊外へ移り、もとの中心商店街は衰退していくというパターンです。東京は都市

が巨大すぎるから、そのパターンとは少し違って商店街の相対的な競争力になってくる。しかし東京でも少し端のほうの商店街は最近「もうあかん」ということを言い出していますね。東京でも大都市圏の中だと、まだお客が来るわけですが、中小企業診断士の人などと話をすると、盛んに彼らは「とてもじゃない」「駄目だ」と言っていますね。

島田 / それぞれがね、みんな出ていってしまうわけですよ。分散して同質性みたいなものを作っちゃうから、必要なものができたときは非常に便利だと思うけれど、それがこう飽和していくと、やはりもとからある発信する機能が古くなってきて、今どこかでもユニオンとか、でも結局本物の銀座を超えるものはないわけですよ。

やっぱり銀座という相対価値から行き着いてしまって、ある種の停滞が確かにあるのかもしれませんが、たとえば並木通りみたいな所はすごく勢いがありますよね。なぜこんなにいっぱいの人が出てくるんだろう。それがほんとによく分からない。なんでそんなにみなさん銀座なのかなと思うくらい。最近、若い主婦たちは渋谷にあまり行きたくないそうです。それは不潔だとかストリートパフォーマンスとか、つまりある種、渋谷が若い人のストリートカルチャーになってしまったこともあるかもしれないけど、そういうふうになっていてもう不潔だし道が狭い、怖いなどというんなことがあって、むしろ非常にある種完成された状態の銀座みたいなのに、やっぱり自然に目が行く。しかもステイタス性という別の意味も見直されているという感覚は非常にある。

田村 / 私は今年の3月で大学をやめたんですが、ゼミの学生たちに聞いても渋谷へはもう行

きたくないと言うんですね。「高校生のようながキどもとおれたちは一緒に飲めない」なんて大学生がきいたふうなことを言うんです。自分達もガキの時は行ったけどもう今は渋谷なんかじゃおもしろくねえ、ということになっているようです。かといってまだ銀座に行こうというところまではいかない。このように中学、高校とだんだん年齢が下がってきているようです。私から見るとみんな似たようなものだけど、あのくらいの年は、ちょっとした年齢差でも、もう彼らと一緒にされちゃ困るといって差をつけたがるんですね(笑)。その中でも「銀座はちょっと遠い」というのがあらしい。しかしいずれは彼らも潜在的なものから銀座に行くかもしれませぬ。銀座というのは先程のダイエーの話ではないけれど、高いところは高いけれど、意外に安いところははるかに安いものをちゃんと売ってるんですね。なぜこんな安さで売れるのかって言えば、結局お客が来るからで、量で捌けるからでしょうね。

三枝 / それが一番銀座が強いというかおもしろいところではないかと私は思っています。銀座というと、ものすごく高いというイメージがあるんですけど、そんなことはないです。幅がすごくあるんです。その層の厚さが銀座の最も強いところですね。

田村 / だからといって安物売っているわけでもなく、それなりに良い物を安く売っていて。商売の量をこなせば、利益も出るのでしょうか。不動産をやっていた人間の立場からは、すぐそういうことを土地代から考えてしまいます。この土地代でこの値段じゃ売れないかなとか、コーヒー1杯だとこのぐらいだとか、そういう計算をしたものなんです(笑)。

規制緩和と都市計画

三枝 / 先程の話で銀座の容積率が緩和されるという話がありましたが、銀座が政府に利用される時には、そういう規制緩和のシンボルのような利用のされ方をするんですね。実際には30年代から40年代のはじめくらいに建てられたものが多く、建て替えるとなると面積が減ってしまうという様子を見ていたわけですが、それが緩和されるとなると、建て替えがかなり加速されると思います。しかしその再開発についてのマスタープランなどないので、またそれぞれ個々に建て替えることになってしまうと思います。もしこれから銀座にある種のマスタープランを作るとすれば、どういうことになっていくのでしょうか。

田村 / 東京の町でマスタープランを作ってやったといえるのは、徳川家康しかいなかったのではないかと私は思っています。それ以降、明治になってもいませんね。明治の東京の中で唯一やったというのは銀座だけなんです。しかもその時の銀座は、偶然ですが住民の意に反して、人間の中身に反してマスタープランをたてられた結果こういう街になったわけで、そこが大変おもしろいですね。とにかくガタイだけをまずこしらえ、そのガタイの間にいろんな隙間を生んだわけです。しかも非常に情報発信力があり、人を呼び込むことができた。それで隙間だったところがだんだん埋まってきて、いろいろな変化をしながら最先端のところへ入ってきた。自由民権運動の人たちが入っていたなんてすごい話だと思いますね。そういう元気のよさを持っていたんです。今は高級商店街というイメージが強いですが、片や自由民権というものがここにはあったわけです。そういうのがまた出てくるような仕組みが何かできないかなと思います。

先日、王子ホールに行ってきました。たいへん立派なホールでしたが、あのような立派なホールやちょっとやわらかい建物など、いろんな種類の建物があってもいいのではないかと思います。その周辺になんとなく隙間なり、情報発信なりの動きができてくるのではないかという感じがしました。

前田 / 今回の容積率規制の緩和の話では、無条件に緩和することを望む人が当然多いと思われませんが、その時に前にも述べたことがあるインセンティブゾーニングという発想で、何かギャラリーのような文化施設をつけるとか、少しでも町をよくする工夫があればと思います。

田村 / もう25年前の制度ですが、私が横浜で作った制度もそうでした。それで今頃になってようやくそういうことを言うようになりましてね。「みなとみらい」でやったものも方々作りかけていましたが、ちょっとご時世が悪いので市で引き受けたと。しかしいろいろなことをやるような仕組みを作っているから、国ではなく横浜独自に作ってかまわずやっているというわけです。みなとみらいのランドマークタワーの下のところにドックを残したというのも、実はそういう仕組みがあるからで、今でも容積規制云々などという頭はまったくないですね。やっている人もみんな判っているわけではなく、本当は部分だけ。それなのに政治家とかいろんな人がいろいろと要望を出してくる。

前田 / 景気対策が手詰まりで何かやらなければいけないということなんでしょうけれど、またしても経済論理優先の規制緩和か、という気がしますね。

野口 / ひとつには煮詰まってからこのような状態になったわけで、さきほどの容積率で新宿

とか他のところと比べると、みんな全然ダメだといってる。そういう意味で銀座の町はデザイン的には容積率いっぱいですが、みんな揃っている。逆にいうと、普通は経済力がないからバラバラになる。全国似たようなことになっています。そこで容積率を上げて、何が生まれるかというのは実は銀座の未来、将来の可能性というチャンスがあれば、ここを誰がきめうかという主体論としては、またいろいろ可能性がありますね。

議論の最初にお話いただいたことから考えると、あまりプランニングしてはいけないのかもしれないのかもしれないけれど。確かにもっとパワーがければ、実力がないところに勝手におやり下さいというのは無茶苦茶ですが、ここまである程度、戦争で崩壊してしまったところでは、容積率変化ということも一つのエネルギーとして使われて、それほど無茶苦茶にはならない。だから容積率というのは、皆さんにまとまらない話をする時に説得しやすいわけで。逆に考えればこれが例えば容積率 50 %引き上げますといっても、使えますかということになる。最初はバラバラになっても、しばらくするうちに収束していくと思います。

前田 / その辺よく分からないんですが、私はどこまで銀座に力あるかが少し不安です。それだけ緩和しても、全員がすぐに対応できるだけの経済力があるのか。それと先ほど田村先生がおっしゃった「銀座の精神」みたいなものをハード面ではなく、ソフト面で何か残す仕掛けをしておかないと危ないという不安があるんです。今の銀座には、何かそういう仕組みが必要だと思います。ほっといても力があるから大丈夫というのは、少し怖いですね。

例えば、高さ規制などはどうなんでしょうか。容積率が変わる場合、高さを規制しておかないと良くないのでは。現在の建物は結構地下空間が大きく既存不適格状態にあります。そのように地下が広がる分にはそう景色は変わらないけれど、高さ規制なしに容積率が緩和されると、相当な期間、スカイラインがでこぼこ状態になってしまうと思います。さきほどの煉瓦街の話でもありましたが、なんだかんだいっても銀座の魅力っていうのは、空間がきれいだということですよ。それが、過渡的とはいえ、しばらく壊れてしまうかと思うとその辺も心配ですね。

町づくりの主体

田村 / 銀座の場合、本来的には東京都なり中央区なりがしっかりしなければいけない。建設省とかが考えているのは、それ以上の次元のことであって、町づくり的発想はないですよ。

本来自治というものには基礎自治体があり、さらに公益自治体という二重自治体構造になっているわけですが、東京都の区というのは正規の自治体ではないので、区に住んでいる人には一重しかないわけです。それでも最近では以前に比べるとかなり区に自由にやらせるようになっていますが、それでも中途半端ですね。普通は少なくとも自分の市町村長、市町村議員、それから公益自治体としての知事と議員の4つは選んでいるわけですが、東京はかなり権利を制限されていますね。

ですから都知事というのはかなり中途半端にできています。先日も都庁へ行った時、青島知事が出てきましたが、彼も東京の自治長という感じではないですね。立場的に小笠原や伊豆七島

から、日の出町まで全部やっているわけですから、銀座のことなんか考えている余裕ないですよ。それは誰がやっても到底無理です。ですから、まず基礎自治体を持つということが必要だと思っんです。国に町づくり的発想をやれといっても、無理です。仮に制度的に何か書けたところで使う方の都合もありますから、変な話になってしまうでしょう。分権の基礎というのは、基礎自治体にあるんです。

前田 / そういう分権の仕組みが大切だというのはわかりますが、一方で銀座という町がだんだん近隣組織というか市民の町というより、企業の町になってきていて、責任を持った市民による自治共和国のような気分が昔に比べて乏しくなっていることも問題ではないでしょうかね。

田村 / 銀座はまだまだおられますよ。中小都市だって、商店街のみんなが社長さんですから。ただディベロッパー的感覚で、容積率上乘せできるとなると、やはり考えるでしょうね。そうしてますます法人格的、無人格的になる。もちろんテナントは取るでしょうが、主体としてはだんだん変わってくるでしょう。

石丸 / まさにおっしゃるとおりの傾向に進んでいます。だいたいいわゆる上場企業、それは全部不動産の株式会社ですから、そういう上場企業とそうでない会社の比率は、どんどん開いています。銀座通りを間口割りでも、だいたい6割を越えて7割になっているかどうかというところです。このような状況では、いわゆる地域意識といったようなものを決めるのは実は2割か3割かの人間です。今後それが1割になろうか2割になろうか、やはりそういう者はリーダーシップを取らなければいけないわけで。幸い今のところはゴルフという会費会員のようないような存在になってくれていますから、銀

座通り連合会なるものが存在し得ているわけですから。しかしそれがたとえ三枝さんたった一人になったとしても、銀座のリーダーシップは変えずに頑張っていくしかない。

田村 / 容積率が上がれば、それを機会にまたそっちの率は戻るでしょうね。しかしそうするとインセンティブゾーンみたいにどこかに区切りを作って、区とか市とかがきちんとして仕掛けないと一般論ではうまくいかない。だから私は江戸市を東京のどこか真ん中に作ったらどうかといっている。今の区もそれなりにやっているようだけど、ちょっと頼りない。

野口 / 中央区と千代田区とで独立しようという話もあるんですが、全然現実にはならないです。しかしいよいよ煮詰まっていることは確かです。

「計画」の計画

田村 / いろいろとおもしろい議論ですが、プランナーの立場からいうプランニングというのは、今までの都市計画法でいう都市計画とは全く異なります。都市計画法でいう都市計画は、ただの街路樹利用計画にすぎない。私たちが「計画」と呼ぶものは、流動的かつ動態的なものです。そしてそれを「プランニング」ということでは、実際今までに計画というものはなかったに等しい。計画とは、決め込んでしまうのではなく、動きの中をどうつかまえながらいくかということです。細部の計画はどこかでできる。

例えば私が仕掛けた「みなとみらい21」も、最初はなぜあんな間抜けなことを言うのかと、さんざん言われました。今だったら、これは最終

的には事業というになってしまうのですが、私は初め、事業としては持っていかなかった。いろいろな話として横浜全体の土地構造と、それから100年の歴史と、これから先の話など、そういうのを基本としてやる中で、徐々に具体的な部分が煮詰まってきて、事業になる。そこが普通という計画なんです。しかし、そうではないところの計画なんて誰もやらない。当時、神戸が非常によくやっていた時代に、私の知っている神戸の宮崎さんのプレーンだった人を横浜に案内して私がやったことを見せたら、「そんなことを言って、よく横浜や三菱にぶん殴られなかったですね、神戸ではとてもできません」と言われました。つまり彼らのやっているのは皆事業なんです。事業計画の計画。これは私のいうプランニングとは異なる。事業計画も必要だけど、事業段階になればプランニングではないプランニングなんてないわけで。その意味で構想力から何から、あるいは哲学を持っていないとプランニングとはいえない。東京については、唯一、徳川家康という人がそれを持っていたと思う。事業なんて、そうこうすると何々法に基づいてなんとかだとか、財政措置はなんとかかんとか、それはどうだこうだと、そういうことが先になってしまう。もちろんその段階にすればそういう計画もプランナーに言うかもしれないけれど、もっとその前に、大きな流れをどういう風につかまえて、どういうストーリーを作っていくかということが大事。それを抽象的に考えようとするにつぶされてしまうから、それをいかに具体的なところにおろしていけるかというのが、私のいうプランナーであって、そういう人が今はあまりにもいない。どこの町にも、そういう次元で考える人が何人かいるべきです。今のような次元で何かゴチャゴチャやって、財政がどうかこうとか、そんなこと当たり前の流れで出てくるわけで。そんなこ

とを抜きにして、大きな流れで動いているところをどうするか、それが計画なんです。せいぜい総合計画といって、どんどんよけいなことを集めては、こっちでは閉じたり、そんな総合計画になっている。これではまったく総合化されていない。そういうものをどこかで整理して作っていても悪くはないけれど、全部肝心なところが抜けている上でやっているから、どうしようもない。

だいたい計画というものをきちんと考えたことがなくて、計画を「計画でない」というけれど、そういう計画がまさに抜けているわけだから、その計画が必要なわけ。そうでない個々の計画しかないから、どれだけ役に立っているのか、何をしているのか、ということになってしまう。個々の計画の前にもっとそういうものがある。私は、本当の計画はまだないと思っていて、それをやっていくと大きな仕掛けができると思います。

だから銀座で計画をやるとしても、いきなり槍出すと、まず容積なんかから入ってきて無理がある。そうするといきなり事業計画から考えなければいけないとなったり。そうではなくて、もうちょっと大きなところから考える「計画」がないと。構想といってもいいけれど、そこから具体的にどうなのかという風におとしていけない。

計画といっても、ろくな事をしてこなかったからと、計画の不要論を言う人がかなりいて、有名なプランナーでもわざとそういうことを意図的に言う人がいますが、それは違う。例えば、都市計画というものを一番わかりやすく説明すると、中央区にも都庁にも都市計画課というものがあります。私が横浜市に入った時に、私は計画調整部長だったけれど、今の都市計画の係

長をしている者を連れてきて、係長にした。その係長が「今度の田村部長は都市計画がご専門だそうですね。私はずっと一貫してやってきておりますから、きっとお役に立つと思います。」というから、私は初めから言ってやったんだ。「君の都市計画と私ののは違うけど、大いにやってほしい。そういう君の持っているような知識ももちろん必要だけど、私のとは少し次元が違うよ。だけど一生懸命やってください。」それから彼は3カ月もたたないで、「私じゃ務まりません」と言ってきた。

今の都市計画法に基づく都市計画しかやってこなかった大ベテランという人間から見ると、私ののは著しく違って見えたようです。あまりにも流動的で、あまりにもなんでも入ってきて。彼らは決まったことしかしてないから。そのためか「官庁都市計画」とわざわざ言う。官庁都市計画の範囲はとても狭い。工学的都市計画といってもいいけれど、大学の中で講義する工学というのほんの一部。それで、総合計画と言っても、範囲は狭く中身はあまりない。それに比べると私の言う都市計画はとても範囲が広い。同じ都市計画といってもこれだけ内容が違う。だから私は、都市計画家というとか何か誤解を招くので、「プランナー」とカタカナを使わせてもらっている。

ただもちろん、都市計画やってきた人の中にも、もうちょっといろんなことをよく心得ている方がいないというわけではないんです。ただ、仕事の上で狭くなってしまふ。私は企画という立場にずっといましたが、企画というのは普通はだいたい事務屋さんなんです。官庁用語で企画というと事務屋。計画というと技術屋という分け方になっている。民間の会社ではもうちょっとフリーに使われているけれど、官庁はわりあいはっきりしている。つまり企画というのはも

っとトータルにやるという部門で、計画というのはその一部であるという位置づけがある。企画でも最近は技術屋が1人や2人いますが、はっきりいうと刺し身のツマになってしまっている。私は企画という立場でしたが、初めから技術屋を入れて、技術屋主体にした。その技術屋達を再訓練して、私も自らについているところから具体的なことが分かっている、もっと全体を考えたかった。事務系というのは全体をみているようでも、足が地についてないところがあって、また訳が分からなくなってしまうところある。

つまり私は計画というのを、基本的には基礎自治体の中で充実させなければいけないと思っている。だからまず計画を持ってないというのは論外。持っていないも今度中身が私のいう計画に伴わないのもある。それからもうちょっと本格的にやり出して、それで計画ができるかということそうではない。今の都市計画は法律を駆使して、法律通りにやればいい。そして補助金グループとやればいい。しかし私の計画は、この地域全体をどうするかということから始める。地域にいるのはそこで商売している人とか、産業をやってる人とか、また一般に住んでいる人とか、いろいろいるわけです。そういう人たちと一緒にやれなければいけない。都市計画はそれをやらなくても済んでいた。私は計画がやるべきだと言っているのは、ただ抽象的な計画ということではなく、地域の人たちと一緒にやれるそういう計画。そうなる、いろいろなことを含んでくるので考えざるを得ないわけです。これからはNPOといった人達も出てきます。都市計画というのはそういう人と一緒にやれる仕組みにはなっていない。だから、そういう人達が出てきたら普通の役所は嫌がりますね。彼らにはできるだけ知らせな

いようにしようとしたり。

本当の良い意味でのトータルな計画を、私は「地域政策、あるいは「地域経営」といっています。地域をうまく経営していくような、地域経営というのは狭い意味では組織経営ですが、もっと資源というか、その土地の歴史やそこにいる人間、産業、そういうものをどうやって組み合わせることで、未来につなげていくかということを考えることで、企業経営とも同じです。これからは地域というものを対象とした、そういう考えが必要ではないかと思っています。それを誰がやるのかというと、今までの末端機関の自治体ではなく、それも自分たちが作る。つまり市民政府が必要だと思うんです。

銀座全体をどうするかを考える時、まずそこにはいろんな主体となる人がいる。1人でエイッとやるものではないです。ですから例えば建築屋がエイッとばかり、入れ換えてたりしてやるというものではないんです。ある段階にすればそういう人にやってもらうのもいいけれど、もっとその前に考えなければいけないことはたくさんある。しかし計画というとバツと絵を描いて、さあどうですか、とやりたがる人はたくさんいます。しかしあれでは全く都市計画屋ではなく、設備屋なんだけどね。

経済政策と都市計画

田村 / 計画というと、1つ1つが材料にされているようで。確かにこれらは、ちょっといじくと、けっこういろんなものに使えるんですよ。言うだけで影響がある、その一番最たるものが首都移転でしょう。何かのときに、あれを出しておくといろいろと材料になるようで。初めは地価対策だったけれど、まだ都心の地価対策はほとんどできていない。しかし首都移転の話

だして「これでやっとります」といえばなんとかなる。しかし本当に首都移転するといっても、直ちにするわけない、という気持ちがあるから、結局その地価対策もできるわけない。それから一時、地価は下がっていますが、そうすると今度は景気対策。ぜんぜん逆になってしまいましたね。そうするとまた作り直しますよと。そういうふうにほんとに真面目に考えているプランナーなんてほとんどいない。だいたいそういう意味ではみんなプランナーではないんですよ。

前田 / 住宅政策もそうだし、土木も都市計画も、みんな経済運営の手段に使われてしまっています。多少そういうところがあってもしょうがないと思うんだけど、あんまり露骨にやられると、いいかげんにしろという気分になる。

田村 / 今の財政破綻というのは、1つにはやはりそのツケが回り回ったということで。土建業だけがこれだけ膨らんだ国というのは、途上国にはあっても、先進国ではちょっとないですね。みんなそれぞれのところで抑えているわけですが、そうやっている以上、政治的にもなんとなくうまくいくような。経済的にも景気刺激のような経済政策などというものはやってきて、何かというとこれでやってきてしまった。その結果どんどんふくらませてしまっただけで、しかしそんなに全部うまくいくわけじゃないんです。それで調整期に入ったということでしょうね。地価が上がりすぎるから冷やすんだ、という理屈でしたが、すごい大きなツケになりましたね。何でもある程度はしょうがないけれど、でもどこかで、自動調整力が働いているんです。ほんとは市場メカニズム的原理なんだけど、やりすぎるとまずい。ところがその自然調整力が働かないで、逆にどんどん市場メカニズムに乗ってしまうことになる。またしかし政府というのは市場経済でやっているわけではないから、いくらでも赤

字公債を発行して、あとのツケは誰かに押しつけなければいいという考えになっている。ところがみんなツケで回しちゃったら、どうにも首が回らなくなったということですね。

前田 / 結局一番ツケ回しされても文句を言わないのは、自然環境です。我々の生活環境も。我々は少し文句を言うけど、結局しょうがないと済ませてしまうところがある。

田村 / でも文句言うところもある。私なんか、公害の対策なんかで企業と大ゲンカをしました。こういう時も1つ水準を下げると、だいたいその水準になるわけです。そうするとやっぱり、ぜんぜんものを言わないとダメで。環境にしてもものを言うところは何かと狙いにいくでしょう。廃棄物問題なんか、できるだけものを言わないところへ回しているだけ。しかしものを言う所が増えてきましたから、今度は何もものを言わないところ、つまり海の底あたりを狙っていると思いますよ。深海魚は文句言わないから。あるいはどこか、これから二酸化炭素が増えて海面が上がって消えてしまいそうな島あたりを狙っている。

長澤 / お話伺っていて思ったのは、ひょっとして私がよく使う「リミナル・エクスペンシブ」といった意味合いなんですね。私はその考え方とか方法にもある概念があると思うのですが。例えばロンドンではビルとビルの間をすり抜ける道に配管が出ていて、それでお勝手口というようなものができていて、次の通りにすり抜ける場所があります。そういう、あっちの通りからこっちへの抜け道みたいなところがたくさんコベントガーデンには残っていて。そのドアにランプをつけて、新しいパブを作るという限界性。そうして入り込める空間を作っている。日本では今、竹下通りなどがそうですね。

わざわざ設計してどうのこうのするのではなく、なんとなく活用してしまう。そういうリミナルなものが残ってしまうというのは、何かある種の活力のようなものがあるからなのかなとお話を伺って思いました。

いつも完成しきらずにどんどん変わっていくという話では、ある人から都市計画や建築をやっていると、ちょっとした隙間があると、とにかく設計したくなっちゃうんだという話を聞いたことがあります。なんでもいいから理由つけて、ポケットパークでもなんでもいいからとにかく作りたくなるんだと。しかしそういう意味においては、銀座の町もそういう可能性を残しつつやってほしいなという感じがすごします。

あと容積率の話で私はみなさんのお話とは少し違った観点なんですけど、工事中のみっともなさということが、町の人気というのをかすめ取っていくのではないかと考えています。私が住んでいるのは甲州街道沿いなんですけど、マンション1つ建てても道を掘り返すのはたいへんです。埋めたあとで、次の時また掘りますよね。そうすることで、実際にはこの町の道路機能というのは半分は使われていないという使えない状態になっているわけですね。そして完成せずに続けていく間ずっと、町が完成していない状態をさらけ出している。ミラノで改修計画があるような時には、ビル1本分のきれいなパネルを作って、そこにできあがるビルの絵を描いてしまう。何か変なツタの絡まったパネルではなく、それくらいしゃれたことをやるんですね。何かミキサーがきて、ぐじゃぐじゃになって、という状態が続くと、おそらくきれいになってからも行こうという気がなくなってしまう。下手をすると、その工事をするのが人を遠ざけてしまっているのではないかと思うんです。

ですから、今回の容積率の話も工事をするという行為そのものが客足を遠のけるのではないかという危険性を感じます。

田村 / できあがる姿だけを考えず、中間を考えるとね、今のようなかかりおもしろくない美観というのがありますね。それを次々と、あっちこっち、あっちこちでやっている、その間にあるいはイメージが変わってしまうかもしれない。もっと別に魅力的なところができれば流れも移っていってしまうかもしれない。ただ東京の場合、他の魅力的なところというのが、もう1つみんな弱いと思う。

長澤 / 原宿、表参道のあたりでよくあるのは、空き地が出ると仮設のパブなどを建て、しばらくアートスペースとかトークハウスを作ったりしますよね。あれはお金がなかったからとか、埋めようがないからやったとか、時間の違いからやったことかもしれませんが、私の感覚からすると、ある種のサブカルチャーのようになって、あのスタイルがあそこに似合っていると思います。ですから銀座もやり直しの工事期間をどういうふうに、ちゃんと手当てしていくかということがすごく重要になってくると思います。

田村 / 私は大阪にけっこう長くいたんです。今はだいぶ離れちゃって遠くなってしまいましたけれど、東京と比較してみるとおもしろくて。大阪はご承知のとおりミナミですが、それに対してキタというのがあって、ミナミからキタへ移ってきた。あのころのミナミは駄目だと言われて、キタだと言われてました。キタで梅田駅前の大再開発をやりましたが、まったくつまらなかった。結局再開発はされたけど、魅力がなくて逆になった。今は地下街みたいなもの作って、それで少しはキタもよくなりましたが、一時、完全にあの頃はキタのほうがミナミを圧倒

していましたね。それがなんのことはない、猛烈に容積率を上げて、ただの大再開発をやった挙げ句の果てが、やっぱりミナミのほうが大阪の魅力があるということになって。なんだかあそこは、大阪じゃなくてもなんだっていいやということになってしまいましたね。そのへんが、おもしろいですよ。

規制緩和と地域経営

田村 / さきほどの容積上げること、地域経営的に考えるとどうなるのかなと思う。本当にこの地区の人たちが地区戦略を持っていければいいけれど、国が景気対策か何かでやっているのだとしたら、さきほどの話のようにこの力学だけではなく、他の力学も関係してくる。「いい絵があるぞ」と見せられて、そっちの方の機能を活発にさせる。しかし今の経済政策からするとそれでもいいということなんでしょうね。何でも、やる気があるヤツにやらせようという政策だから。しかしこの銀座地区の地域経営からすると、その辺がちょっと衝突する関係になりそうかどうか対応するかが問題ですね。

私はこの「規制緩和」というのは大賛成なんですけれど、ただこと環境に関しては違います。私もロンドンにしばらくいた時、たとえば運送業者に「あなた運送業ですね、免許ありますか」ときくと「ない」と言うんですよ。それでもいろいろ輸送している。それでは佐川急便じゃないけど「大変でしょう」というと、「いや、そんなのありません」と。ありませんと言っても日本でやってたんですよ。それも海外10年以上も経っているから「日本であったでしょう」というと「いや、そう言えば日本ではそういうのいろいろありましたね。しかしここにはそんな

のぜんぜんありません。」と。だからまったく場所移そうと何しようとする自由だそうです。自分の買った古い倉庫の内装だけ全部変えるのもまったく自由だけど、ただし外に関しては、外装を変えるとかそういうことになったら、すごく規制されてるようです。つまり環境に対しては日本よりはるかに厳しい規制がされているんです。しかし業に関しては緩い。ニュース解説などをみても、そういうことがまだ分かってないと思います。全部いっしょくたにしている。「規制緩和」というのは規制の緩和でしょう。しかし日本の環境に対する規制なんて本当に緩いんですよ。業に関しては厳しいですが。だから業の方を緩くするならいいですが、環境に関しても一緒に緩くしてしまおうという。そんな今でさえ緩いんだから、これ以上どうしようもないじゃないかと思う。みんなその区別が分かってない。政治家なんか分らないのはしょうがないとしても、ニュース解説やってる連中も、分かってない。これはちょっと困ったものだなと思う。

銀座についても、まず銀座の経営をすることが大切で、できれば銀座だけではなく、もう少し広い地域で地域経営を考えられるようなものがなければダメですね。それを区役所がやってくれればそれでよし、やってくれないならば、どこかできちんとしたことを考えて、またいろんなところで接触を持てるような考えを。抽象的に考えて、細部としてこんなものができた、あれができたなんていうのではつまらないですよ。常に話ができるような、そういうものができるといいですね。そうなる銀座だけでは範囲が狭いかもしれない。

島田 / 銀座にパワーを取り戻すということで容積率の緩和ばかり注目されて勢いが出てくると、ある種計画されすぎたものばかりになって

しまつて、非常にきちんとやる空間づけはできるかもしれないけど、計算されすぎてしまつて銀座が持つ界隈性というものはなくなるでしょうね。

ブラジリアといったところの都市計画はほとんど、計算されすぎてしまうというか理論上でいくと、たいがい駄目になるものが多いですね。人間の社会性というかケオスのような吉祥寺の駅前みたいに、ごちゃごちゃとした何ともいえない魅力みたいなものがあつた方が。

田村 / あそこは再開発できなかつたからこそ魅力がでてきたんですね(笑)。

島田 / 対極的な関係ですね。それで1つ思っているのは、銀座の居住性、ハビテーション性といった、銀座プラのお話でもあつたようなことを考え、一度この辺に住んでみるわけです。そうしてみるとまた今とは違う新しいスタイルもあり得るんじゃないかと思います。

田村 / 私は25年前に用途別容積制というものを横浜で作りましたが、その時は400%、500%、1000%とは言わないで、何に使うのかによって、例えば商業に使うんだつたら何パーセント、住居の場合は何パーセントとやりました。銀座みたいに、人間が出てしまうのとは逆ですね。商業空間を予定すると住居ばかりになってしまう。横浜の場合はその逆が多く、せっかく商業地域に指定しても、全部マンションになってしまうので、みんな東京に通いに行ってしまうのではつまらない。それで逆の意味で用途別容積制というものを制度的にも作つたわけです。

もっと詳しく言うと、いろんな手段であまりみんなが無理を言えないような仕組みにしているんです。役人が考えることというのは、一方的な論理ばかりで、商売をやつたり八百屋をやる

方はやはり損得を多少は考えますよね。もちろん損得ばかりではないですが、やはりある程度は考えてあげないと。不動産というのは、ある意味では大きければ大きいほどいいに決まっているんです。しかしこの地域だけではもたないということがあって、大容積をもつためには外部から下水から交通まで、あらゆるものでもたせていて、原理的にいうと、都市全体としてその部分だけ破壊してしまうと、必要以上には要求できなくなるような仕組みを内包させているんです。ですから市場経済だからいいといっても市場経済にはならないんですよ。あまり欲張ると、うまくいかなくなるような仕組みがある。そういうことをいろいろと組み合わせて、用途別容積制をうまく使えば、銀座は銀座なりのものができると思いますよ。

本当にその地域のことを考えようと思ったら、自然にそういうことも考えるはずなんです。普通だと法律がどうなるとか考えるのでしょうけれど、何が必要なのかということから考えると、そういう発想に当然なるはず。それがなんとか違反だとかいっても、そんなのいろいろと手を加えてしまえばいい。やり出すと、後から追いかけてくるものです。それを今度全国的な制度にしてしまおうとすると、これまたダメになる。その場所で必要があってやっていることだから、その地域をしっかりと経営できるようにところがそういうことを考えてうまく使えば。

それから容積制度の緩和もずいぶんやりました。必ずインセンティブを与えましたが、これを全国一律的にインセンティブを与えようとしても無理な話ですよ。容積はあっても、もらえないところもたくさんある。東京で不動産関係の安藤さんとか五島昇さんとか江藤さんと一緒に座談会をやる時によく言っていることですが、東

京は容積を使いきっていないんだと。それはいろいろな斜線制限があるから使えないという理由だけではなくて、その地区にはそういう容積を指定しているため、使えないのは当たり前なんです。それを抜きに何パーセントしか使えないという話をしても意味がない。ではそれはどういうふうに指定されたのか知っているのかというと、別に知らないわけで。前の容積制を導入した時になんとなく指定しているものだから、ほとんどルートもわからない。だから何パーセント使っているといっても意味はない。もしそれが必要で、またそれが地区にとって非常に良いことならば与えればいい、というのが私のやり方です。

計画論的に何か揃えようということも、1つの価値だから、あくまでもそこにこだわるというのも1つの計画ですよ。しかしそうではない場合でも、いろんな手段を経営主体が持っていれば、うまく容積制を使い、場合によっては容積制の嵩上げをその代わりに何かに使えば。全体としては、その町として何が問題で将来何だけは作っていかなければいけないか、と考えると持っていなければいけない。しかし相手だっているいるですから、役人が考えるように一度にやろうとしても同じにはならない。誰にでも、いろんな会社の都合とか資金繰りとか、景気の波とかなんだかんだとあるわけで、そこで計画した通りになるなんてことは、まったくの架空の話。だからそういう自由度を持ちながら、将来性をもってやれる時にうまく相手にインセンティブを与えながら、町全体をよくしていくというのを積み上げて十年なり続けていけば、相当なことになるだろう。私が横浜でやった時もお金も何もなくて、そういう手段を専ら使いました。横浜は当時、まったく条件がなかった。銀座みたいに条件がありすぎるところでは、か

えって難しいのかもしれない。だからやるのは、
でっかい金を動かして事業をやろうとなる。こ
れは非常にわかりやすく、角さんの時代から
今までずっと続いている方法。しかし、金がな
くてもうまくやるには、人の金はうちのもの。
うちのものも、うちのもの(笑)、という感じ
で使っていけば、そこそこ小ぎれいにはなっ
ていく。そういうのをやらない限り、ただ計画
だからで終わってしまったりする。そのうち
そういう計画は全く現実とは無関係になっ
ていく。大きな流れを掴みながら、個々に
動かして行って、少なくとも二重に包めな
ければいけないと思いますね。

* * * * *

長谷川 / 田村先生には、いつも薫陶を仰いで
いるんです。田村先生が横浜に関わりを持
たれたのは本当に偶然なことだからで、た
またまその時はお住まいがもう一カ所あ
ったらしいのですが、横浜の方が先に決
まったとかで。もし違う土地に先生が住
まわれていたら、今の横浜はまた違
ったものになったでしょうね。また先生
が銀座におられたとしたら、また銀座も
違ってきていたかもしれないですね。

(1997 年 11 月)

「銀座を売る ～不動産開発の視点からみた銀座～」



船曳 鴻紅

(株)東京デザインセンター代表取締役

東京大学文学部社会学科卒業後、文化人類学者の夫と共にポリネシア、メラネシアなど未開地での生活を経験する。イギリスからの帰国後は4児の母として家事育児に専念。1987年、英オックスフォード大学との間に留学講座を開設。1989年に(株)東京デザインセンターを設立。日本初のインテリアマート、東京デザインセンターを1992年オープンさせ、現在ヨーロッパを中心とする世界のインテリア・ブランド十数社をテナントとしている。さらに日本の建築・インテリア業界の活性化のため、デザイン展、セミナー、シンポジウムなどの文化活動を多数展開する他、三井不動産を始めとするディベロッパーのマンション開発に関わり、都市居住者に良好な住宅を提供すべく活動している。1996年より通産省グッドデザイン商品選定審査委員も務める。

* * * * *

はじめに

船曳 / この銀座座会に約1年間参加させていただきましたが、これまで銀座は私自身何より大好きな街でしたので、このように過去の歴史、背景といったところから銀座に関わり、しかも今の銀座をつくっていらした皆様とお話を交えさせていただけたことは、大変幸運だったと思っております。

その中でこの1年間でのお話は、哲学的といいますが、社会科学的、文学的なものが多かったように思いましたので、私は不動産開発のスペシャリストではないのですけれども、皆さまには目新しいことかもしれないと思い、敢えて今日のお話をさせていただくことにしました。

私は、現在インテリア・ショールーム・ビルを経営しております。「東京デザインセンター」といいますが、会社の業態としては不動産経営です。また実家の方が、広く不動産業を行っており、例えばマンションの開発、販売にも関わってまいりました。しかし私自身が不動産業を専門にしているわけではありませんので、どれだけのことがお話できるのか不安ですが、この一年久しぶりに銀座を往復いたしました中で感じたことを今日はお話させていただこうと思っております。また、最後にヨーロッパの方で少し撮りました写真をスライドで見させていただこうと思います。

銀座の不動産市場の現状

銀座の不動産市場の現状ということでは、去年は日本堂さんがなくなってしまったり、ココ山岡が倒産したりということで驚きましたが、またたこ焼き屋や安いコーヒー屋などが出現してきて、ここ数年の間に銀座は随分さま変わりした印象があります。特に新しいお店が多いですね。これは不動産業の方からいわせると、賃料がかなり下がってきたから、その値頃感から物販関係が随分増えてきたということのようです。もう一つ、並木通りに象徴されます高級ブランドがどんどん進出してきたこともあって、今や銀座は他の繁華街に比べるとホットな状態で、1階店舗に空きが出て即埋まるという不動産市場としては非常にうれしい状況にあるときいております。飲食業の方では、ソーシャルビルで2階以上の部分が空室にあえいでいるところもありますが、店舗リースで貸し出しているところは、かなり恵まれた状況でテナントさんが入っているというふうにもきいております。

このような状況で、テナントの入れ替わりが激しく、かなり新しい外部の方々が出店することが可能なのですが、以前は銀座に店を開くということが一つのステータスであったかと思えますけれども、現在はそれよりもビジネスの観点から銀座に開くということが多くなっているかと思えます。そういう意味で銀座の特殊性というものは少し薄まってしまったのかなと思っています。

それから昨年あたりでは銀座にも随分、安売り屋さんが増えてきましたね。またコンビニのようなお店が銀座に出てきたというのはかなり驚異的に受け止められていたかと思うんですけれども、これもある程度一巡したらそれらの出店もかなり控えめになってきた感がありますね。

銀座は、一応オフィス街でもありますので、当然 OL やサラリーマンに対する日常的なサービスは必要とされているわけですから、その需要と供給が満たされたところで収まってれば、皆さまもそれほど心配ではないかと思いますが。それよりも、並木通りを中心とする高級ブティックが、かなりジャーナリスティックに取り上げられているようです。そのPR効果もあってか、クリスマス前に行きましたら大変な賑わいでした。こういったことは銀座が新しい繁栄を迎えつつあるということを示していて、大変頼もしく思った次第です。

将来の開発への危機感

一方で、この銀座座会に出席させていただいて皆様のお話を伺っていると、不動産開発に関してはかなり危機的な状況にあるんだということがわかりました。地価が非常に高いために、新しく銀座らしいものをつくるビジネスを立ち上げようと思ってもなかなか難しいということ。またご商売の流れが変わっていくなかで、家業として個人企業でお仕事をなさっている方々が、いろんな意味でその経営が難しくなり、大企業が進出してきてしまったために、街並みがどんどん変化してしまったと。もちろんそれをご商売の内容によるのでしょうけれども。それで思い出されますのは、鳩居堂のご主人が亡くなった時に、地価日本一にあげられたことが一因とされたこと。そんなことがあったぐらい、銀座の地価というものは、決して皆さんにプラスをもたらしているわけではないのだということをお知らせしました。

ところで、そういう状況のなかで、銀座は将来のために何を組み立てていかなければならないか。それをこの座会では議論されているわけで

すけれども、一般的に銀座の状況は、地盤沈下している他の繁華街に比べて決して悪くないと思います。

ただ汐留の再開発など、周辺の状況が変わっていくなかでどう発展を続けるのか。銀座の場合、その発展の道筋の方向性が少しでも狂うと、銀座が銀座ではなくなってしまうかもしれないという危険性はあると思います。銀座の町会を支えていらっしゃる中心メンバーの方々は家業としてお仕事を次の世代につなげていらっしゃる方が多いように思いますので、その後を継がれる方々と共に、何をその方向として持っていくのかということがなければなりません。また町会としてどういうコンセンサスを得て、この街をつくっていくのかというのが、大変大きな問題だと思うんです。

銀座らしさ

これは改めて申し上げるまでもないのですが、銀座はいろいろな異文化を消化してきた街であり、また銀座の街にいらっしゃる方々は、消費者としても経験のあるレベルの高い方で、そういう方々に支えられた銀座なんだというお話も以前にあったかと思います。

私事になりますが、先ほどお話しました東京デザインセンターというインテリア・ショールーム・ビルも、そういった点では銀座と少し共通性を持っているのではないかと考えています。私どもの東京デザインセンターというのは、インテリアのショールームとして多数テナントを入れておりますが、ただ単なるメーカーのショールームというだけではなく、私共の方で入れるテナントをかなりセレクトしています。それは会社の大小ではなく、まずクォリティの点で

選ばせていただいております。そのためどちらかといえば一般の消費者の方よりはプロユーザーの方の目にとまりやすい存在になっているようです。

今年で6年目に入りましたけれども、最初の5年間はかなりプロユーザーの方を意識しまして、建設業界、インテリア業界の本当に上層のところにもまず情報を発信していくということを心がけました。やはりそういった層にこの東京デザインセンターというものを十分に認識していただけるようになったことで、徐々にそのことが業界の中で伝わって行って、そういう構造がうまくとれてきたのだと思います。5年目からは一般の消費者の方々にも強くアピールするように、例えば新聞にちらしを入れたりしてきましたが、その時にはデザインセンターの中の一つの雰囲気というものも確固としてできあがっておりましたので、一般の消費者の方がいらしても、クオリティについてはこちらから申し上げることもなく理解して、また期待して来ていただけるようになっております。

話が長くなってしまいましたが、つまり銀座の魅力も同様で、いかにクオリティの高い商品が集積しているかということだと思うんです。そこでは質の高いものを求めたお店がたくさんあり、消費者もそれを期待してそこに行く。その厚みや重なりが銀座というものをつくり出しているのではないかと考えております。

自前の開発ビジョン

さきほど周辺の不動産開発ということをお話ししましたが、皆さん銀座については非常に襟を正してくるような街というイメージが強く、またそれが銀座の売りにもなってきたわけです。

しかし例えば近隣の汐留や、日本橋からの再開発が進みますと、そこにはオフィスを中心としたたいへんな人口集積ができるわけです。そうすると当然、そういう方々に対する日常的なサービスが必要とされるようになるわけです。

銀座はいつでも変わるものだよというお話がありました。それは銀座にはもともと土地の商人がいるわけではなく、いろんな人がいるんな商売を持ち込んで、それを拒んだことがないからだという話を聞いたことがあります。ですから昔の雰囲気がないと言っても、それはしょうがないことで、銀座というところはどんどん変わっていくのが特徴なんだと。

しかしこれから数年は明治から大正、昭和初期の長い時間のなかで徐々に変わってきたものと違って、あと数年で大きな変化が一挙に起こってくるであろうということが、見えるわけです。その時やはり銀座としては独自の将来像なり、開発コンセプトというものを持っているべきだと思うわけです。実際、汐留には大会社が入ってまいりますので、立ち上がるまでにはいろいろなアドバルーンがあげられると思います。しかもその青写真というものは当然経済状況によって変化していくわけですから、そのつど銀座の側としては振り回されることのないような独自の開発コンセプトが必要だと思います。例えば汐留開発については、確固としたビジョンはおそらくまだ出来ていないのだらうと思います。そういう時、銀座はすでにこういうふうを考えているんだよ、というようなことを積極的に売り込んでいくと、あちらも何か焦点を必要としているわけですから、それを核として何か新しい汐留の再開発を考え直すことができ、うまく共栄する方向性で銀座としてのイニシアチブも取れるのではないかと思います。またそうしないと、汐留の方は普通にホテルとオフィス、

そして一部集合住宅となるでしょうし、その一部でウォーターフロント的なことができるかもしれませんが、所謂普通の金太郎飴的な再開発になってしまうと思います。数的にはあちらの方が強いわけですから、そういうオフィスの日常性が徐々に銀座を浸食しかねないともいえませんので、是非銀座としての個性を投げかけていくということを考えていただきたいと思いません。

その中で、では銀座の不動産開発をどのようにまとめていくのかということになりますと、これまでも建築やランドスケープといった方面でいろいろとお話がありましたが、私はどちらかというともっとそこにどのような人たちが集まり、どのようなソサエティーがつくられていくのかといったことをより追求する方がいいのではないかと考えております。もちろん私も多少は建築とかインテリアに関わっておりますので、スペース・デザインとか空間をつくるということから離れてしまうのは、自分の職業としては方向が違うのですが、しかし銀座ということは無心に考えてみますと、そこには既に銀座というものが存在しているわけで、そこに何かを付加するようなことを前提とすると、少しハードに偏りすぎて、何か違うものになるのではないかと考えているわけです。

例えば、私どもの東京デザインセンターはマリオ・ペリーニというイタリアの建築家にデザインを頼みまして建築した建物ですが、私はこれをペリーニのおそらく最高傑作ではないかと考えております。また設計関係の方々にも、東京デザインセンターの建物は質が高いと認めていただいております。オープン当初から数年間は、建物の中を見学したいというご要望が随分ありまして、ツアーもかなり続けてきました。しかし6年目に入りますと、たとえどんな名建

築であろうと、もうその建築というのはデザインセンターの中で起こっていることの内容とその質を、間接的に伝えるものにすぎないのではないかと考えております。ただもちろん、入れ物というものも非常に重要で、空間がその中のものをつくっていくということがあるわけですから、決して切り離すことはできないのですが、やはりどちらかといえば、その中のものが建物もつくっていくという見方もできるのではないかと考えております。

『朝日新聞』にも何度か取り上げてありましたが、銀座の7丁目か8丁目にあるイルタスという不動産会社が、銀座の店舗部分の空室状況を定点観測されていて。その千葉社長に伺いましたら、それを始めたきっかけは社内の社員教育だったそうです。それを続けてみると、銀座という街の一つの考現学というようなものができてきて、非常にやりがいがあるとおっしゃっています。銀座の中でも、もちろんテナントさんの出入りはあるわけですが、街というものは、やはりそこにいらっしゃる住民の方々、またテナントの方々、そしてその街にお客としてくる人たちがつくるわけで、そういう街の雰囲気というものは、何かこういうものを作ればどうだろうか、というようなことのできるものではないというふうに率直に語られてました。千葉さんは戦後ずっと銀座を見てこられた方ですから、その言葉には真実味がありますね。

それでは、そういう形ではないもので、中にいる人たちや外から街へやってくる人たちが、どういう銀座をつくるのか。そして皆さんの中にある銀座というイメージをどういう形にしているといいのか。どういう人間がどういうふうに住組みをつくっていくものなのか、と考えていきますと、まず一つには、銀座でご商売なさ

っていらっしゃる方々、もしくは銀座にお住まいの方々の観点から。もう一つは、やはり外から銀座に来られる方の観点というものがあると思います。この二つから、今後の銀座のヴィジョンが見えるのではないかと考えております。

ホンネでなければ支えられない

自分が不動産業をやっているからということも多少はあるのですが、実態のところでは、銀座の町会のメンバーのかなりの方々が実は不動産に依っていらっしゃるのではないかな、と思いました。

先日も、家業の専門店が成り立たなくなっているというお話を伺いましたが、では、同じ商業で何が成り立っているかを見ると、商社系や外資系のブランドショップであり、世界的なブランドショップで、こういった大資本にどんどん押されてきている状況があるというお話でした。

専門店としてはスーパーのようにお客に勝手に選ばせるというのではなく、やはりその物の価値を十分に理解していただけるように売りたい。そのためにはもっとお一人お一人に時間をかけなければいけない。そのため固定費も上がるわけですから、それも商品価格に乘せざるを得ない、というような非常に苦しい悪循環となるわけです。その中で専門店としてやっていく仕組みをどういうふうに確立するかということになります。またそのコストをどこで回収するかということを考えなければいけないわけです。

実際のところ銀座では、ホンネは不動産業の方が多いのではないかと思いますので、もしそうだとすればその不動産を表のほうで切り離して、

商品とかご商売とかのことをいっても、ちょっと議論が長続きしないのではないかなと思うわけです。そういう町会のメンバーの方々の本当の経営基盤が何に依っているのかということを見据えて、今後 50 年そして 100 年後のことを考えなければ。もちろん理念を語ることは非常に重要なことで、まずそれがなければ前に進むことはできないわけですが、同時に現実的な方策として、もしその不動産が経済的基盤だとしたら、それをどう確立するかということも考え、逆にその専門店ならではのビジネスをそこから支えるようなことを考える必要があるのではないかと思います。

話は長くなってしまいましたが、改めてこの不動産ということの話をさせていただきたいと思います。誤解があるといけないので繰り返しますが、何もご商売が遊び事で実際には不動産業で儲けているといっているわけではないんです。むしろ逆に私がこれから申し上げたいのは、銀座としてのご商売とか、ある文化を創り出していくというような、そういう作業自身が銀座の不動産的価値を高めていくんだということを申し上げたいわけです。

実際、それぞれの物件価値は、この銀座というエリアの価値によって判断されていくわけですから、如何にこの銀座エリア全体の空間価値を上げていくかということがあると思うんです。その空間価値を上げるためには、やはり銀座が銀座らしくあるべきだと思います。

これからの不動産価値というのは、まず収益に合った合理的な価格がつくられる時代になるわけですから、その不動産価値とそこで行われる商業活動というのは不即不離の関係になると考えております。土地はそれぞれの土地の能力に応じて収益をあげ、その収益をあげる土地の価

値というものは、やはりそこで経済活動を行う方々の努力と積重ねがあってからだろうと思います。

人が住む、生きた情報文化の街

また一方で銀座は、外からいらっしゃる方によっても支えられているわけで、そういう方々のことについて少し申し上げたいと思います。

ここは経済活動の豊かさと同時に、やはり外から来る人々を惹きつけるものがあるわけですが、そのためにここで作られたり積み上げられた文化とか活動というものが、外の方へ適切に情報として伝わっていかねばならないと思うんです。その情報は必ずしもそこで経済活動をやっている方々からというだけでなく、できればそこに住みついた人たちからの情報が伝わっていく、そういう情報をつくっていくというのがより望ましいわけです。

そこでこれからは私の提案なんですけれども、まず一つ、銀座は外からいらっしゃる方々に対してもう少し開かれていてもいいのではないかと思います。そしてもう一つは、ここに居住する方々と取組む何か仕組みのようなものを、もう少し積極的に作っていったらいいのではないかと、ということです。

銀座に来る方々にもう少し開くということでは、銀座はすでに長い歴史のもとで商店がきちんとできあがっているため、なかなかそういう余裕を持つことが難しいと思いますが、他の新しい街、例えば新宿とか渋谷とかというところだと、大資本が関わってくるということもありません。街に来る人々を吸い込むような装置を意識的につくっていますね。ただし銀座の場合は、

やはり土地の問題がありますから、そういう装置を設けるにもなかなか解決がつかないところがあるのだと思います。

しかし例えば銀座の1丁目から8丁目までの長いストリート沿いの中に、お休み処とでもいいですか、人がこうちょっと休めるような、息を抜けるところがあると、もっと銀座の中の人々の動きが活発で豊かなものになるのではないかというふうに思うんです。例えば資生堂やミキモトさんのところもそうですけれども、何かあのようなところに、20平方とか30平米でいいんですけれども、少し引き込んだ小さな小さなミニパークとまでいかななくても、そういう場所がつくられて、例えばそこでインフォメーションが得られる。そのインフォメーションも機械的なインフォメーションではなく、ボランティアの方でもいいのです。例えばお店の情報とか、そこで行われる催しの情報とか、いつも街に来る方々に積極的に流せる、そういう場所に出来ればいいと思います。

以前、私が銀座でスキー服を買おうしてデパートに行きましたら、売ってなくて。昔ならデパートに行けばだいたい何でもあったと思うんですけれども、今のデパートは非常に付加価値の高いものや、もしくはスキー服のようにディスカウントショップが一手に引き受けてしまっているようなものは逆に扱わない、ということがはっきりしてきているようで、どこのデパートに行ってもなかったんです。しょうがなく交番でも聞いてもみましたが、わかりませんでした。勿論、銀座にスキー・ウェアがないということも考えられますが、やはり何か銀座ほどのところに百貨がないというのも何かな、というふうに思いますし、必ずどこかにはあるんだと思います。そういったことで、例えば和菓子屋さんやどこにあるとか、蕎麦屋さんがどこにあると

いったことを、単に地図があるからそれでいいではなく、いわばこの蕎麦屋はこういう味ですよとか、この蕎麦屋のつなぎには何が入っていて、ぐらいの情報をあげられるくらい、来訪者にとって親切な情報をサービスすることができたらと思います。

それからもう一つ、皆様もよくご存じだと思うのですが、ヨーロッパの中心的な街では大体目抜き通りのいわゆる銀座にあたるようなところでも、建物の上のほうにはまだまだ人が住んでいますね。それが街の繋がりをつくっていて、街のロイヤリティーというか街の求心力を満たしているようですね。これに似たことで一時、区の方で住民が少なくなってしまうから、それを何とか埋めるために、ビルを建てる時には住宅を上の方に持っていかなければいけないとかとやっていたんですが、そんなことではなく、住民票なんか持ってこなくていいのです。とにかく24時間そこに住みついてこの銀座を愛する、そういう人々をつくり出していかなければいけないのではと思います。

実際この前テレビで、銀座の7丁目か8丁目の裏のほうで勝又さんという方が自分のビルに住んでいらっしゃるそうで、そういう気持ちが、素晴らしいと思います。商業ビルの上ですから、おそらく住居としてはあまり恵まれた環境ではないと思いますが、しかしその気持ちが私はいいなあとと思います。

ですからここで提案したいのは、現在ソーシャルビルなどで高級バーやクラブがどんどんなくなってきて、その後もテナントが入らず空室が目立ってきているところに、それより少し一般的な飲食店を入れてしまうといったことではなく、敢えてこれをアパートに改造できないだろうか、ということなのです。

勿論アパートといっても、そんなに窓はとれないので環境もよくはないでしょうけれども、最近建築基準法もだんだん変わってきていたり、空調や換気装置も非常に優秀になってきていますので、窓がない部屋でも居室として認めるようになっていきます。それで、地下室が居室として認められるようになってきたわけですから。

しかしそういうところですから、あまり長く住むということにはならないと思いますが、ホテルのような感じで人を入れてしまえないだろうか。そんなことを言い出しましたのには2つ理由がありまして、一つはこのままソシアルビルの高級バーがどんどんなくなっていくと何か上の方がこう歯抜けのようになりまして、そこが並木通りのような高級ブランドショップが並んでいるところだと、中にはうまくいく場合もあるかもしれませんが、今でも2600店にもおよぶ飲食店があるようなところで、それら全部がこちらが望むようなオフィスで埋まるとも思えないんですね。もしこのまま単に歯抜けしていくところを同じような、しかもちょっとグレードが落ちたところに入れていくという流れでいくと、私は何か裏側の銀座がすまさしく寂れてきてしまうのではないかなと思うんです。今まで銀座は他の繁華街に比べて、非常に治安がいいということになっていましたが、それが段々悪くなってきて、日中のほうにもそれとなく響いてくるのではないかなという心配があるんです。しかももし再開発ということになりますと、当然、テナント退去の問題も出てくるわけですから、そういう面でもあまりうれしくはないですね。

大体ロンドンやパリをはじめとする欧米の一流都市で、その国を代表する一流の商店街と、それから言葉は悪いですが、飲屋街とこれほど接近しているところを私は知りません。それが今

までは、銀座だからやってこれたわけですが、銀座の裏側が従来の銀座でなくなるとすれば、何かとても危険なことが起こるのではないかなと思います。

それからもう一つは、積極的に人を入れていく、ということです。それは同時に、銀座自身のPRにも利用できるのではないかなと思うんです。実はずっとこの座会に参加させていただきながら、銀座がこれからどうなっていけばいいかという皆様のお話を伺いながら、私は頭の半分ですっとこれじゃないかなと思っていたのが、このことなんです。

敢えて冒険的なことを申し上げてしまいますが、例えば村上春樹みたいな人が、この銀座の表通りの住人になったらどうだろうか。例えば彼が朝の5時、6時に起きて、まだカラスしかないような銀座の通りをジョギングしたらどうだろうと思ったわけです。もしそうなったとしたら、何か最高のイメージになるのではないかな。ある意味では『ティファニーで朝食を』の感じにも思えるわけです。それが例えば、村上春樹さんが高円寺の商店街のところを朝ジョギングしていても何もならないわけで、それはやはり銀座でやるから意味があるわけです。それだけのオーラを銀座は持っているわけで、ただし村上さんが来るかどうかはわかりませんが。もちろんそれは桃井かおりさんでも、誰でもいいんですけど、とにかく何か興味を持ってやってくる、そういう人。戦前や大正期でしたら、私たちが有識人、文化人と思っていたような方々がここには来てくれるのではないかな。もしそういう人がうまくここに嵌まってくれたら、そういう方々を渦にしながら人の集まり、クラブというものが出来上がっていくのではないかなと思うわけです。

クラブといえば、今はクローズされましたが西武の「有楽」というクラブがありました。そういう形から入るクラブではなく、まずいろんなパーソナリティが来ることから、何かそういう人を少しずつ核にするようにしながら、ソフトにクラブ的な人波が出来上がって、それがまたソフトに広がって、銀座文化というものをつくっていければというようなことを夢想したわけなんです。

ですから先ほどの、人を住ませたらいいというのは一つはそういうことで、銀座の飲食街が抜けていく部分をいい形にもって行って、また同時にその埋め方も工夫することによって、銀座が単なる商業の街ということから、一つの文化をつくっていく街なのだとすることをPRできる仕組みに出来るのではないかと思ったわけです。

しかし現実には、今申し上げた話は、実現は非常に難しい。まず最初の銀座通りのなかにちょっとしたミニパークを設けるといっても、当然その地権者、営業権を持っている方々がそれぞれ利害関係にあるわけですから、こんなことは普通、そういう方々が税金が払えなくなってそこが国庫の土地に収まらないかぎりなかなか実現しないわけです。

またアパートに改造しましょうという話では、実際に文京区あたりの方でオフィスをアパートメントに改造して、非常に高い利回りですっきりしているという話があったり、そういうコンサルティング業もできていますし、また千代田区ではオフィスなどを住居に改修しますと補助金が出たりするそうで、流れとしてはあるわけですが、ただ具体的にそういう所に住みたいという本当に物好きな方を探すというのも、非常に危うい話で。先ほどの営業権以上に居住権と

いうのが出てきますから、そういうリスクを誰が取るんだという話にもなると思うんです。それからまた有名人を引っ張ってくるといっても、かなり低廉な家賃でお入りになりませんか、と言わないと。

不動産証券化

そこで提案2なんです。今不動産業界のなかでは、バブル期の不良債権をどうしようかという話になっていて、不動産証券化ということがよく言われています。大手不動産会社がこのところよくその手法を取りたがって、そういう条例の法制化をはかっていて税制上でも無理なくスムーズに行われるように一生懸命プレッシャーをかけております。しかしアメリカではもうこれは、とりわけ1970年代、80年代には一般的にとられてきた手法ですので、これをいわゆる不良債権の処理とかということではなく、もっと前向きに考えて、取り入れてみたらどうかと思うんです。

なぜこのようなことを突然申し上げるかという、一つには不動産を利用した銀座の文化的な再開発、いわゆる土地というハードの部分の再開発ではなく、ソフトの再開発が可能になるかもしれないからです。そしてもう一つには、例えば銀座のなかに土地家屋を持っている方が、その土地家屋を守らなければならないと同時に、ご商売の関係でどうしても緊急にどうにかせざるを得ないとなった場合に、その不動産部分が金融商品化できていけば、不動産経営というのはそのプロに任せてしまっ、ご商売はご商売で専念できるわけです。そして家業のほうでプールするお金が必要であれば、その不動産からの収益を使うこともできるわけです。

これは以前、三枝社長がおっしゃっていたことですが、現在の銀座の街のなかには具体的なルールが何もなく、抽象的なものしかないんだというお話をされて。外部の方がどこから入ってくるのかもわからない状態で具体的なものをつくらうとしても、メンバーが固定しないので、作りにくいし又つくったものも周知徹底しないんだとおっしゃってまして。しかも、そういう状況であるにも関わらず、銀座通りの今の建物は大体昭和30年から40年代に建てられたものなので、多くがその改築の時期にきているということです。現在は容積率の問題と、経済不況の問題で止まってはいるけれど、これが動き出したら、おそらく5年くらいで全体の様相はあつという間に変わってしまうかもしれない、と。たしかに地価が日本一高いことを考えますと、その有効利用ということでちょっと中を変えるぐらいではなく、本当に建て替えを考えなければならぬところもあるわけですね。

また同時に、建設省がアメリカ並に容積率の売買をしてもいいということを今度建築基準法に盛りこもうとしていますね。これが実現しますと当然裏側のビルの容積未消化の部分を表側のビルに乗せられるわけですから、再開発も非常にやりやすくなるわけです。その時にはおそらく銀座はモデル地区として、まず第一にあげられるのではないかなと思うんです。そうしますと本当にこれは、あつという間にこの街のなかが変わっていくだろうという感じがしますね。その時くらい理念的に銀座はこうであらねばならないと言っても、やはりそれぞれの経済事情があるわけですから、そういったご都合にはかなわないところがあるわけですね。

しかし敢えてここで大きなことを言ってしまうと、この機会に銀座の町会で、「特別会社」を作って不動産証券化に取り組んでみたらいい

と思うんです。普通この不動産証券化というのは、大手不動産会社が自分のところが持っているホテルとか、オフィスとかそういうものを金融担保に入れて、証券として売り出し、そのあがりをもたまた配当として配るわけですが、別にこれは不動産会社だけがやる権利を持っているわけではないので、きちんとコンソリデートされたものができあがれば誰がやってもいいわけです。ですから、それは株式会社なのかトラストという形になるのかはわかりませんが、可能かと思えます。そうすることで銀座の街の発展そのものの方向性を、参加するメンバーの方々の気持ちを代弁した形で、かなり現実味を帯びてくるのではないかなと思います。

こういうことを申し上げますのは、やはり今後50年後、100年後、200年後の銀座の文化価値を保持するためにも、開発の形というものは共につくっていかねばならないと思うからです。同時にこれは、そこに土地をお持ちの方々、土地を持ちながらご商売しているの方々にとっても、大変な問題ではないかなと思います。実際、再開発に乗るとか、土地を誰かに貸す、売却するという時には、やはりそれぞれそれなりの理由があるわけで、今土地は値上がりしないといわれていますし、値上がりどころかもしかしたら下がるかもしれないという思いがあるわけです。そのように土地神話は崩壊したわけですが、またこれを有効利用しないで放っておくと、土地というのは逆にコストがかかるので、より不良資産になってしまうんです。まさに所有することがリスクであるという時代になったわけです。

そうなると、銀座の街全体の開発コンセプトとか、街の雰囲気とか、歴史とかそういうものをまったく無視するから売るんだとか、変わるんだというのではなく、もうやむにやまれず、そ

うならざるを得ないということの方が多くなると思うんです。そういう時に、共通化できた理念を掲げて、50年後、100年後の銀座をこういうふうにつくっていきこうという青写真を、自分達の経済性を犠牲にすることなく行えれば、これは本当に皆さんにとってハッピーなことだと思われるわけです。

アメリカの不動産信託というのは非常に簡単なことで、もちろん簡単とはいっても実際にはいろいろ複雑な仕組みがあるわけですが、まず投資家の方々が出資して、何か会社のようなものをつくります。それに対して皆さん本業でまったく別のことをなさっているわけですから、その会社は投資顧問会社なり、不動産会社にでも、投資のアドバイスを求めたりとか実際の運営をするわけです。別に管理人がいる場合もあるでしょうし、管理委託をする場合もあるでしょう。ともかく投資家側の方々が自分一人で考えたら、膨大なエネルギーと費用とがかかる部分を、うまく纏めて会社として、組織としてできればいいと思うんです。その投資の見返りは、うまく運営された事業の収益が分配されるという形で利が生まれるわけです。そうしますと、例えば現実に銀座にビルを一つ持っているオーナーの方がいらした場合で考えますと、その方はそこで自分の商売を続けたい、けれども手元にも資金が欲しいという場合には、その権利を部分的にトラスト会社のほうに売ってもいいですし、また自分所有のビルに付随する証券として、特約条項でもって自分のところの証券としておいて、部分的にその賃料を受け取るということも可能だと思うんです。ともかく不動産というのは、かなりいろいろな部分で不自由なもの、動産ではなく、不ですから、不自由なものですけども、それをかなり自由にすることができるのではないかと思います。例えば今まででした

ら、資金が必要な時にはビルを売却するという一生に一度、一世一代のことを考えなければいけなかったわけですが、それを小出しに売っていくということも考えられるわけで、そこで生業としてやってきた方々が動く必要もなくなるわけです。そうなりますと新しく入ってくる方々によって何か全体の方向が変わってくるという状況も回避できるわけで、最終的には街並みも守れるのではないかと思いますし、それから銀座が銀座なりの文化の青写真を着実に築いていけるのではないかと思います。

銀座に住む夢

最後にもう一つ私の夢を申し上げさせていただきますと、そういう不動産証券として利益があがった場合、部分的にビルとか土地を現物出資などでまわしてもらったり配当してもらったお金で一体何をやるのか、ということなんです。

これは、先ほどお話ししました人の住む街、生きた情報が動く街、ということに関わることで、ここで提案したいのは、不動産証券としてその利用権と所有権を会員制マンションに似たような形で、小口売りにして売るというのはどうだろうかということなんです。

もちろんその不動産のビル自身が別に賃貸アパートである必要はなくて、オフィスビルであってもよし、店舗であってもいいのですが、この不動産信託の特徴は、やはり利回りが固くまわっていかねばならないところで、オフィスに偏るとか商業に偏るということになってしまいますと、やはり景気の好不況にかなり左右されてしまいます。そこで一つの手法として住宅を入れたらどうかということなんです。その住宅もただ分譲ということですと所有権の問題な

どが出てきますから、当然賃貸ということで考えるわけですが、それには、銀座を持つというもう一つの夢を与えられるわけです。会員制マンションのように、証券の100万か、500万、1000万を買ったとします。そうすると勿論、そこから配当も得られわけですが、配当を得るかわりに、例えばそのアパートに1年間暮らす権利も同時にいただくと。

こんなことを言いたしたのは、実は私自身が一度でいいから銀座に住んでみたいからなんです（笑）。一生に一度、数ヶ月か1年くらい。空気が悪くてもいいから本当に銀座の真ん中に住んでみたいのです。おそらく自分の家の中はクラブのようになってしまうと思いますが、人もどんどん遊びにきてくれるだろうと思いますし、こちらも人の家に遊びに行く時、お土産を買うのにも目の前で買えばいいわけですから。そういうふうに老人になればなるほど、もっと動きたくなる。しかも所有してますよという夢も叶えさせてあげる。もともと日本は不動産の売買とか、得たり、売ったり、手放したり、人に貸したりという手間が本当に面倒ですね。ですから、そういうことを一切忘れていいんです。かといってホテルに住めといっても、ホテルは他人行儀でいつも襟を正していなければいけないみたいで、何より高いですね。そこを何かコンドミニアムみたいな形にして、少しは入る人を選ぶというところが出てくるとは思いますが、その交渉権、売る方をある程度クローズドなマーケットにして、コンドミニアムの運営もホテル並とはいかないまでも、ある程度一括管理して運営会社に任せておくことができれば、本当に私はうれしいと思うわけです。

こんな夢みたいなことを思っていましたら、以前にいただいた『はいらいふ』の中の対談で、木幡さんという方が下河辺さんのことをお話に

なっていて。そこを抜き書きしてまいりましたので読みますと、「面白い話で元国土庁事務次官の下河辺淳さんがおっしゃったことですが、今彼は丸の内の東京海上研究所にいますが、丸ビルが随分老朽化しているから、そこを買って、あの辺りで働いていらした所謂三菱だ、なんだの方々のオールド・ピープルズ・ホームにするのはどうかと。そういう人々を引っ込ませないように、そこをその方々の老後のホームにする。そうすると彼らにとっては、最も生き生きとした時代の場所だから、別の老後の過ごし方があるだろう。どうせあの程度のビルでは、今のインテリジェント・ビルには対抗できないから、そのまま使って、そういうふうにしたほうがいいのではないかと。そう言ったら、多田さんも非常に喜んで、「いや、ぼくもそういう都市のなかにご隠居横町つくるようなこと、是非賛成だな」といったお話が出ていたんです。

常々、本当に私も自分と同年代の友達と話をしている時に、高齢化が進んだ今、お互いにこれからどういうライフスタイルになるのだろうか、と話をしていますが、別に老人のことだけではなく、若い人も時間消費型になるだろうと一般的に言われています。自分の時間を大切に、どういうふうに過ごすか、というのがおそらくそれぞれ一番の関心事になるだろうと。私も本当にそう感じていますが、しかしその時間消費といった時に、どういうイメージがあるかといえば、自分一人で読書をするとか、自分一人で何かしっとりしているということくらいで。実際にはそれだけではなく、おそらく子供も手元を離れていきますし、もしかしたら伴侶もどこかでいなくなってしまうかもしれない。そうなるとやはりちょっと寂しいだろうなと思うわけで、その時にもっと賑やかな所で、約束してな

くても誰か知り合いと出会える可能性がある状況やそういう場所に。しかもそこは自分が若い頃によく出かけた場所なら尚更良し、とそういうところを求めると思うんです。何もそこに老後ずっと住むというわけではなく、短ければ数ヶ月、もしかしたら数年でも、そういう生活を楽しめたら本当にいいなあと思って。しかもそれが手間のかからない賃貸という形で。

そして、そういうところに例えば先ほど申し上げたように銀座らしい、銀座らしさを創り出すような、そんなイメージリーダーみたいな人が住んでいたなら、尚更素敵だと思うんです。テレビなどを見ていまして、エリザベス2世号とか、飛鳥とかに何百万、何千万もかけて、半年船に乗って洋上旅行するというところに、ウェイティングがかかるくらいの人気があると聞きます。私は、そのようなことと銀座に住むということは同じことだというふうに思うんです。船のようなあれほど居心地の悪いところで半年間我慢してでも、ああいうところへ出かけてみたいという人がいるわけですから、きっとその熟年夫婦のなかには銀座で一度暮らしてみたい、そんな暮らし方を人生の中で一度やってみたい、と思っている人たちが必ずいると思うんです。

このようにお話していると、ますますこれが実現性のあるもののような気がしてきました。

都市に住む（スライドと共に）

最後に都市に住む、都心に住むということではおそらく銀座と共通するものがあるかと思ひまして、ほんの僅かですがロンドンやパリで撮りました写真をいくつかご紹介いたします。

まずこれはパリの宝石店カルチェです（1）。カルチェの場合だけは、上のほうがカルチェのオフィスで占められているんですけども、この横あたりはホテルであったりとか、アパートであったりとか、1階、2階ぐらいまでは商業店舗やオフィスであったりして、大体その3階以上は、住居にして人が住んでいることが多いですね。



1

これは事務所ですね（2）。でも左側にショップがあって、その奥に、これもまたアパートメントなんですね。



2

下のほうはオフィスに使われていましたけれども。パリの街区というのは、ご存じのように非常に大きいですから、当然区画のなかのほうは

余っちゃうわけですね。余っちゃったところにごうちょっとした中庭をつくって、またそこをずっと囲むようにして建物が建ってるわけなんです。



3

次はロンドンのセント・ジェームス・ストリートと言いまして。この通りには昔からクラブが非常に多いということでも有名なんです(3)。このあたりに、全部が全部だとは申しませんが、会社のクラブがあったり、大学のクラブがあったり。これも大学のクラブですけども、クラブというのは何なのかと言いますと、ひとつには勿論、ここにライブラリーがあったりとか、ちょっとしたバーがあったりするんですが、その上のほうにホテルのような居室がありまして、ホテルよりはずっとクラブのメンバーに対しては、安く開放されていますので、かなり長期にわたって滞在したりするんですね。ですから先ほど私、アパートメントと申しあげましたけれども、もうひとつの形としては、クラブ組織というものもあると思います。また別のクラブをご紹介しますと、これはソーホーの方にありまして、その裏のほうにコベントガーデンがありまして、劇場街が非常に近いものですから、これもとても人気があるクラブなんです(4)。



4

グラウチョコラブと言うんですけども、このクラブが今、すごい。入会にはウエイティングがかかっている。なかなか入れないんです。何故かと言いますと、決してきれいではないところなんですけれども、裏の劇場街があるものですから、作家とか劇関係者といった人がこのバーとかをよく利用しますので、そういうことでもありまして、文化人的な人たちが集まるんですが、いくつかの建物を階段でつなげていて、全部でどのくらい居室がありましたでしょうか。50 ぐらいでしょうか。本当にもう入口は、できるだけ目立たないようにしています。基本的にそのイギリスっていうのは、何と言いますか、オックスフォードとかケンブリッジは典型的にそうなんですけれども、例えば学生証なんかがついこの間までなかった。ではクラブの場合、ガードに立っている人がメンバーをどうやって見分けるのかと言いますと、まずひとつはよく来る人の顔を覚えるということはありませんけど、それ以外に何となくその人の挙措動作を見ているわけです。例えば書類鞆を持ってなかへ入っちゃおうとする。そのクラブは鞆を持ってなかに入っちはいけないという規則があったとします。お前違うじゃないかと。必ず鞆をここで預けなきゃいけないのにとか、そういう細かいことがいくつもあって、どっかでその身分が明かされちゃうというわけです。

最後にこれはパリで成功した開発を、ひとつ不動産開発の手法としてご覧になっていただきたいと思ひまして、持てまいりました。



5

ここは昔、この上を鉄道が通っていたところす(5)。もう鉄道を廃止してから、40年も50年も経って、荒廃しつくしていたところなんですけれども、それをパリ市が再開発に入りまして、この鉄道の桁のところにひとつひとつ店のスペースをつくって見たんです。

しかもこのあたりは工芸とか職人の街だったものですから、ここに入る人たちは、そういう工芸的な、もしくはアート関係の人たちに限るよということで、今こうなっています。たしか40ぐらい、あります。

鉄道が走っていたところは、先ほどのちょうど屋根のところにあたるわけです。竹などを植えまして、それで非常に親しみがあると同時に、下の街を通らないでも、こちらで行き来ができるような、そういう公園にしています。



6

パリ市民は、あまりミッテランのパリ市改造計画には賛成ではなかったんです。パリのループルを始めとしまして世界的には、非常に有名なものができて観光資源が増えたということになっていきますけど、パリ市民は殆どこれにNOと言ってるわけですが。ただこの開発だけは、パリ市民には非常に好評でした。

(講演終了)

* * * * *

柔軟な発想を取り入れて

三枝 / 全体を通して、とにかくたいへん柔軟で夢のあるご提案をいただいて大変感謝しております。おっしゃるとおり銀座で特に大事な、大事というか頼りにしているのは、実は不動産なんです。これが非常に難しい。私どものようなものが銀座で商売できるというのも、この不動産があったからで、おそらく借りてやろうとしていたら、なかなかだったと思います。しかし商売をやっていると銀座ではやはり商店の経営が本業であって、不動産はいわば生業ではないという発想があるんです。ですから、そんなことは、まあいいじゃないかということでここまでできてしまったわけですが（笑）。

しかし現実には、たしかに不動産が支えているという事実もあるわけで、だからもっと不動産を柔軟な不動産にというのは大変大切なことだと思います。その運営を積極的に図って、街の方向性を決めていくという発想はおそらく必要なのかもしれませんが、しかし現実にはなかなかそれが出来ない。

銀座の不動産については、たしかに今日船曳さんがおっしゃったように結果が問題でして、今は個人経営としてあくまでもやっていますけれど、銀座をモデルに試験でやっていく景気対策は、今までの集約型の再開発にすぎず、細かいものをいっぱい集めてくればまわりの約束を取れるといった形態促進型なんです。これまでのように容積率に対して、政府が厳し過ぎたり、規制が厳し過ぎて、再開発ができなかったため、緩めてやれば、再開発が促進できると、あくまで量的なものなんです。

しかし最近銀座は、今までにない銀座になりつつあるので、これを機会に中身をどうするかという問題が出てきていて。これを早くケアしていただきたいと思うわけで。不動産は量的に緩和されると、その分地価はおそらく上がると思うんです。ただちょっと、二、三階、上積みしたような建物が、同じようにできても。あるいは建築のデザイナーも、30年か、40年経つと、ますます個性がなくなるだろうし。ですからそこを早く人が住むような住宅に、という発想はよくわかるんですけど、ところが我々は人が住むといった場合にまず何を考えるかと言うと、他から銀座に住むために来る人なんていないだろう、というのがあって。だからそうなる商店の親父が住まなきゃしょうがないや、とこうなるわけです（笑）。ですから、先ほどの住民票なんかいらんなんてという発想はまず出てこなかったですね。住むということは、そこへ住民票を持つということであって、そうなるいろいろな子どもの教育上の問題とかがあって難しいだろう。ただ中央区としては、住民票を持ってきて区民になるといえば歓迎するでしょうね。それで住民票を増えれば、要するに政治的な力を銀座が持つようにもなって、政治的な圧力が増して、それでもって銀座を代表する、権利を代表するような政治家をつくって、といった発想しか出てこないのしょうけど。

しかし、今のお話のようにそんなことは関係ないんだ、と言われたら確かにそうなんです。だから外からだって、銀座に住んでみたいという人はいっぱいいるんじゃないの、いわれると、我々もなるほどそうかなと思えて。中にいると、意外とそういう発想が出てこないの、そういう意味でも私どもは不安を抱いているんです。

現在も石丸さん達とちょうど銀座の商店会が来年で80周年なので、その相談をしているんです

が、そういう時にちょうど容積率の話が大幅に緩和されそうなので、それをただ政府が考えているような景気対策に協力するようなことだけで終わらせないようにと。今が大体 800 %ですが、それがうまくいけば 1300 %くらいになるという。これは相当な緩和になっている可能性が増えるわけです。それをできるだけ前向きに捉えていこうと。

銀座というのはそういうことを、今まであまりにやってこなかったんです。さきほど、銀座のあらゆるものをきちんと説明するセンターがあればいい、というお話がありましたが、確かに銀座にそういうものはないんです。しかしそれは逆にこれまでの銀座は、むしろそういうのをつくらないのが粋だと考えてきたところがあった。しかしこれからはそういうのでは通用しない、むしろそれがマイナスになってくる、といったご指摘だったわけで、耳が痛いですね(笑)。

これからはそこから一歩進めて、銀座の街づくりの所謂ハードなところを捉えるというような仕事をしたいですね。そういうことを実現するためには、具体的にこういう手法がある、というところを提案しようと考えていたところでしたので、今日は大変勉強になりました。

前田 / 私も銀座に住んでみたいかといわれれば、住んでみたいと思いますね。しかし、私が住んでもあまり役に立たないだろうな、と思ってお話を聞いていたんですが(笑)。

この提案は、住うということと経済活動の中間領域とでもいえるもので、考え方自体が情報発信するようなものではないでしょうか。例えばニューヨークでは、子ども博物館が大規模商業施設のキーテナントになってたりしますよね。もともと、奥さんたちがマンションの一室でポ

ランティアで子どものための博物館を開いていたら、だんだん人気が出てきて、あまりに人がいっぱい来るのでそれを商業施設のキーテナントにしましょうとなったらしいのです。これは、今までのキーテナント像と違うものです。今後は、子どもだけではなく高齢者の溜まり場みたいなものをつくってキーテナントにするという考えもあるかもしれませんよね。

例えば、岐阜県の梶原知事が東京に来た時に、それなりの有識者を集めてサロンを開く場所というのがあったらしいです。各県の知事でもそういう人が集まる場所というものを考えているんですね。銀座でクラブといえば、今までは女の人と話をしてお酒が飲めるところですが、それとは違うかたちのクラブをつくることも考えられるのではないのでしょうか。そこにはビジネスの部分も引かかってきますけれども、インフォーマルなかたちで特定の人が集まれるクラブです。そういうものには結構お金を出しやすいのではないのでしょうか。それと似たような話になりますが、銀座はもともと情報産業の町なので、現在のクラブがなくなったところに情報産業関連のスモール・オフィスが入ってもらうといいですね。

石丸 / キーワードはコストですよ。まさに船曳さんみたいなオーナーが、過去銀座に住んでいたことがあって、そこには全国から知り合いが来たらしくて、奥さんが音をあげて結局青山に引っ越してしまいましたね。確かに賑やかにはなるんですけども、呼びたい人間ばかりではなく、呼びたくない人間まで来る(笑)。そういう不便さもあるみたいですよ。

もちろん社会的な意味からすると素晴らしいポジションではあるんです。しかしそれは家庭のすべてではないということもあって。もう一つ、

やはり過去に7丁目の虎屋さんが自分の所の裏にマンションを作られたのですが、その家賃が20年ほど前でしたが、月30万でした。ワンルームマンションに近い状態でバス、トイレはありましたけれど。それを借りた人は、大阪の財界の方方で、個人的な付き合いから東京に出てきた時の本拠といった使い方をされていたようです。その後の消息は知らないのですが、おそらくみんなオフィスになってしまったのでしょうか。ですから、やはりすべてはコストなんですね。

前田 / 私もそう思ったので、中間的な発想はないかなと思ったりもしたんですけど(笑)。

三枝 / 同じ場所でも住居というのは少し賃料が下がってしまうので、やはりそこをオフィスとして借りてくれる人がいる場合、どうしてもそちらの方になってしまいますね。あと、やはり管理という点でもオフィスは大変なんですよ。会社はたいがい昼間は使っているし、使い方も決まっている。ところが住居となると24時間人が住んでいるため、管理も大変なんですよ。ですからオフィスで借りてがある間は、なかなか住居にはつくらないですね。

島田 / 先ほどの外部から人がきているという話でいえば、例えばニューヨーク、ソーホーなどあの辺りが復活してきたのも、要するに人が離れていったところ、誰も寄りつかなくなってしまうところに、逆にある種の文化人というかアーティストが、広くて安いといって入り込むようになったからで。そこからいろいろ自主的な再開発のような形が始まっていくという状況だったわけです。そういうことからいえば、ある都市の生成分布という一貫するプロセスとして非常にわかりますね。ただ銀座の場合はやはりコスト的なものがどうしようもない。

船曳 / ですからソーシャルビルを改造したらどうかと思ったのですが。聞くと結構、平均家賃が下がりきっているというんですね。2万数千円。それだったら高級マンションと同じくらいでしょうか。

島田 / 僕も京橋で生まれ育ったので、いずれはまた住んでみたいですね。しかしマクロ的に見れば今でも都心享受している生活ではありますが。デベロッパーの商品をみても今は非常に都心享受型が復活しているようですね。それが仮に銀座を中心にしたところとできるとなると、やはりそれはいろんな問題を孕みつつも、最高の都心享受物件ということで充分成立すると思いますね。

そういう新しいスタイルを考えていくべきだと思うし、今の銀座のような深さというかディープさを残しつつ、容積率緩和における今後の50年といったくらいの計で、さきほどのスライドでもあったパリのアパルトマン形式のように、居住と商業、ビジネスを一体化していけば。これは何か古くて新しい手法なのかもしれないけれど、とにかく今日お話を聞いていて、何かを変えていかなければいけないんじゃないかという気がしてきました。

中西 / 私も漠然とはしているんですが、定年後、1年のうち3ヶ月くらいロスアンジェルスにアパートを借りて住んでみようと思っているんです。特に深い意味はないんですが、ただ観光旅行でロスに行ったところによくわからないと思うので、3ヶ月くらい、という夢みたいなものなんです。是非やってみたいと思っています。しかしそれは3ヶ月で100万円かかるんです。

ですから、田舎のちょっとした金持ちで暇のある人が、3ヶ月銀座に住んでみてそれで100万

円だったら半分旅行みたいな気分で、エリザベス2世号に乗るといったことと同じ意味合いで、きつとやってみたいと思う人はいると思うんです。

島田 / まさにマルチハビテーション思考ですよ。僕もかつて福岡にアパート借りたことがあります。週1回くらい福岡に行かなければならない状態だったので、それなら借りた方が安いということだったんですけど。家賃が5万円で駐車場もついていて。それで、ついでにユーノスのオープンカーを中古でまた買って（笑）。

前田 / 避暑地である軽井沢などでは、避暑の期間に別荘地コミュニティができますが、日本の中心である銀座を、マルチハビテーションの対象にするというのは、その反対の発想で、とても新鮮でしたね。

船曳 / とにかく私自身がまず、やりたくてしようがないことだったんです（笑）。

保田 / 銀座に限りませんが、街というのはとても複雑なものですよね。いろんなものがあって。それらを多くの人是一个の流れとして捉えて、そこからいろんな意見を出されるわけですが、船曳さんの場合はその複雑なものを複雑のまま捉えて、そこから意見を出されているので感心してしまいました。それらが実現するのかどうかということでは、もっと複雑な要素があるのかもしれませんが、本当に実現できるといいと思います。ただ私はちょっと銀座には住めないかな（笑）。

長谷川 / 先ほど船曳さんが、世界の都市の裏側にあたるには、いろいろな飲食街があるけれども、銀座の裏側は其中でも非常に奇異な歓楽街になっているというお話がありました

が、これは地理学的には何かあるのでしょうか。

荒井 / これは決して銀座に限らないんですが、日本のように、こんな密度で不安定な商店街という形態はあまりないですね。ただ銀座というのは歴史的に見て、ある種、西洋開発の見本みたいなところであったわけで、極めてアジア的であって、それがもたらしてきたエネルギーというのは、ある意味では銀座が必要としているものだったと思うんですよ。

野口 / 先ほどスライドを見せていただいた中で、ロンドンやパリにはクラブハウスがありましたが。それが何故日本にはできないのかと思うのですが。

船曳 / やはりクラブというのは難しいのでしょうか。コミュニティといえば、地域にもともと住んでいるような方が寄り集まるということからできあがるものですが、クラブというのは一人一人が家から離れて、本当に自分個人で参加して行くわけです。日本人はどうもそういうのは苦手みたいですね

保田 / ロンドンやパリのアパルトマンは、3階から上が住居になっているということでしたが、昔からそうなんですか。

船曳 / 昔からそうだと思います。もしかしたら1階まで全部が住居だったところを、下のほうだけ商業に転換されたのかも知れませんね。店の並びはあまり続いていませんから。

石丸 / 日本の場合、銀座といえども、ビルで何世代という家はないですからね。マンション族でようやく今、2世代目くらいができはじめているかもしれませんが、だいたい皆さん、木造で庭付きですから。土地離れということではもう少し時間がかかるでしょうね。

保田 / 珍しさというのがありますが、住むということとはまた違うと思うんですね。

前田 / ですから、多分永住するというよりも、期限つきですね。

保田 / 永住という言葉がもう無くなってくるとすると、住んでみようかなということになるかも。

島田 / つまり安定と不安定だと思うんです。その日常性と非日常性の組み合わせをいかにうまくやるか、そういう仕掛けができていれば。

* * * * *

長谷川 / 楽しく議論している間に時間がきてしまいました。お話の最後の方では、船曳さんご自身の思いが熱く語られていましたが、この夢もきっと実現される時が来るのではないかと思います。また今後と一緒に議論できる企画ができたと思います。

(1998 年 1 月)

銀座研究を終えて

銀座座会 座長

長谷川 文雄

研究のきっかけ

明治以降の文明開化により、銀座は日本の近代文化を推進していく大きな仕掛けとしての機能を果たし、常に先端をいくハイカラな商業空間の魅力を恣にしてきた。流行歌に歌われ、銀座で会食をし買い物をするのが人々の夢であった時代が長く続いた。それにあやかろうと日本各地でも銀座の名を冠した命名が多くなされてきた。しかし時代の流れは早く、経済的な豊かさが増すにつれ人々の価値観は多様化してきた。夜の銀座は社用化し、少しずつ若者が銀座から離れていった。また急速な国際化にも対応できず、世界に燦然と輝くパリのシャンゼリゼや、ニューヨークの五番街のような人気を博することができなくなってきた。日本各地の街並みも個性化を模索しはじめ、銀座の名を返上する動きもあらわれてきた。

こうした背景のもとに我々の銀座研究はスタートした。単に商店街を活性化することや新たな賑わいを創設するといった表層的な研究ではないものを目指した。歴史の流れの中で銀座が今日までどのように位置づけられて来たかを再整理し、そのうえで今日の課題を明らかにしようという試みである。さらに日本人の、いわゆるハイライフを形成するのに果たしてきた銀座の機能や役割を再確認し、これからの方向性を探ることにした。いわば銀座という針の穴から日本の生活文化の変遷をたどり、さらにその視野を近未来にまで外挿しようという試みだったともいえる。そのため研究の領域は多岐に亘り、一種の考現学的な形態となった。こうして、現代の生活の質のあり方を追求するハイライフ研究所の一つの柱として、研究は1994年から4年間継続的に行われた。

研究内容

研究は3つの視点から推進された。

第一は、「銀座座会」と称する研究会である。年間テーマを設け、それにふさわしいゲストを招き、基調講話をもとに自由闊達な意見交換がなされた。それぞれの内容は年毎に報告書としてまとめられている。

- ・1994年 「銀座のフォークロア」
- ・1995年 「銀座の仕掛け」
- ・1996年 「銀座の未来」
- ・1997年 「銀座が残すべきもの」（今回の報告書）

第二は、銀座を客観的にとらえるために、その対極ともいえる関西からの分析である。武庫川女子大学の高田公理教授のもとで継続的に研究は行われ、それぞれ以下のテーマで報告書にまとめられている。

- ・1994年 「関西から見た『銀座イメージ』に関する研究」
- ・1995年 「『銀座』と『心斎橋』の比較研究」
- ・1997年 「関西から見た 銀座の未来」

第三は、関連研究である。

- ・1994年 「若い世代から見た銀座とハイライフ」（報告書）
- ・データベースの整備

銀座に関するデータを整備するためにデータベース構築の基礎研究を行った。あわせて銀座に造詣の深い方々へのヒアリングを行い、順次データベースに組み入れていく作業のきっかけを創出した。

銀座研究への課題

当初企画した銀座の研究は、途中紆余曲折を見ながら4年間に亘って継続された。この間、日本はバブル景気の終焉とも重なり、日本の街全体の活気が消沈し始めてきた。

研究を通じて明らかになったことの中に、銀座の自浄作用とも言うべき機能がある。新規なもの、キッチュなものが銀座に進出した場合、銀座がもつオーセンティシティ（authenticity）に順応していないと、やがてそれらは街から消えていくという歴史的事実である。これは一種、銀座の自浄作用とも読めるが、またここである種のハイライフに通じる文化が形成されてきたともいえる。そうしたチャレンジを受け入れるところも銀座の銀座たる所以なのかもしれない。

ここ数年、にわかに「銀座ブーム」が起きている。目まぐるしく動く時代のなかで、人々が原点にあるものや不動産の価値、心の拠り所などを模索しているとも読みとれる。まさにそれは銀座のオーセンティシティに繋がっていく。現在のブームも、そうした深い傾向なのか単なる一過性の流行なのか、楽観は許されない。

銀座がこのままでよいというわけではない。「大人の街」と言えば聞こえはよいが、これまで銀座を支持してきた層は年々高齢化している。次の世代は、銀座を一つの選択肢としてしか位置づけてない。銀座の国際性も十分備わってきたわけではない。燦然としていた街並みも輝きがあせてきている。銀座が、その絶対的存在から相対的な存在に推移しつつ、ポジショニングを巡って次の方向性を模索しているようにも見える。

生活文化の研究に終わりがないように、銀座の研究をこれで終えたわけではない。

日本の生活文化にいかなる変容が起きているのかを常に観察し思考し、将来のビジョンにつなげていかなければならない。その意味では今まさに銀座の研究がスタートしたといってもよい。そのきっかけづくりにこの4年間に亘った研究がいささかなりとも貢献したとすれば、それは望外の喜びである。

最後にこの研究に携わっていただいた多くの方々、またこうした研究を長期に亘って支援し続けた財団法人ハイライフ研究所に感謝したい。

1998年 師走

（はせがわ ふみお）